

浅野誠人生・生き方シリーズⅢ

社会のあり方と生き方

—スローライフ—

2013年12月発行

このシリーズの「Ⅰ 人生後半期の人生創造」「Ⅱ 人間関係・家族・移住・多文化」について、今回は「社会のありかたと生き方—スローライフ—」だ。

個人の生き方暮らし方が社会のあり方に深くかかわっていることは言うまでもない。どのような社会のあり方を期待するかによって、その人自身の生き方暮らし方が異なってくる。

ここ数十年、大量生産大量消費とそれを保障する「右上がり経済」に基づいて、みずからの生き方暮らし方を作ることが「当たり前」のようにされてきた。しかし、今それから「卒業」することが求められている。その一つは「スローライフ」という言葉で表現されることが多い。

そんなことにかかわって、この10年間に、ホームページやブログに書いたことを編集した。

※ なお、記事公開順に編集しており、各記事タイトルの後に初出年月日を記入した。

目次

1. 2003～2006年

5

「右上がり」「一直線」発想から卒業すること
 多忙化のなかで、<いいかげん>にやることを考えてみては
 「暮らしぶり」の問題を生き方追求の教育学のなかに位置づける
 大胆に休むこと
 愛知での雑感と「少子化」論
 中村隆一・辻信一「スロービジネス」（ゆっくり堂2004年）を読む
 消費生活—東京・宮崎・沖縄
 「下流社会」に「強者」になることをよびかけるのか
 カール・オノレイ「スローライフ入門」（ソニー・マガジズ）を読む
 森岡孝二「働きすぎの時代」（岩波新書）を読む
 夢想「人生創造産業」
 異質協同論から生き方創造論への私の研究展開—階層・格差問題をめぐって
 飲酒事故キャンペーン、ストレスを減らす、ライフスタイルを変える

2. 2007～2009年

19

「中流」的生活を問う
 大人の男性が平日昼間散歩するのはカッコ悪い？
 学長になる方々 生き方に思う
 ロハスはケチではなく、ぜいたくな生活
 <新版モーレツ会社人間>物語—日本経済新聞社編『働くということ』（日本経済新聞社2004年）を読む
 「格差社会」
 アウル仕事研究室 興味深い組織
 大量生産大量消費 働き過ぎへの疑問 私の環境問題への関心
 大和田順子・水津陽子『ロハスビジネス』（朝日新書）を読む
 OWL仕事研究会のコミュニケーション誌
 「経済危機」とスローライフ
 辻信一『スロー・イズ・ビューティフル』（平凡社）を読む
 I. スロー II. 目標のために今を犠牲にする「準備社会」 III. 「問題を生きる」「答えを生きる」

IV. 「時間を省く」 V. 「疲れ、怠け、遊び、休むことの復権」

VI. さまざまな時間 体の時間と社会の時間

「過剰」から生じた経済危機を、「弱者」切り捨てで乗り切るな

浜田久美子『森の力』（岩波新書2008年）を読む

1. 感情・森 2. 『木の建築を否定した日本の歴史』 3. 森の現代史と行方

松井孝典『地球システムの崩壊』（新潮社2007年）を読む

I. 「宇宙的スケールで論じる、知的刺激に満ちた文明論」

II. 人間圏 地球システムの物質循環のコントロール III. 右肩上がりから右肩下がりへ

IV. 「人間圏の存続時間あと100年」にどう答えるのか

瀧井宏臣『農のある人生』を読む

1. 「農業体験農園」 2. クラインガルテン 週末農民 3. 半農半X 団塊帰農 企業センス農業の問題

4. 「生き方の転換」としての、「農のある人生」

退職できる条件があるのに、退職できない人生後半期の人

忙しく働く人と仕事がない人の二極分化 大学教員の例

モーレツ起業家の「働き方革命」

「発展拡大」神話にとりつかれている人々

『子どもの貧困白書』

1. 一人親家族における貧困問題 2. 一人親家庭の苦労と自己責任論 3. 女性をめぐる貧困

4. 教育費と家計 5. 若者の経済的困難と高校 6. 大学進学と経済力

7. 経済上の貧困と人間関係上の貧困 8. 「迫られる自立像の転換」中西の指摘 9. 学校と子どもの貧困

10. 「貧困」に立ち向かう共同の取り組み

3. 2010～2011年

56

「ソトコト」初めて買う

好きなことだったら働き過ぎてもいいか

C. ダグラス・ラミス、辻信一「エコとピースの交差点」本を読む

1. 経済成長と「減らす発展」 2. 希望と物質的豊かさ 3. 動きまわることととどまること

4. 環境問題解決と熱狂的経済活動抑制 5. 「開発」「発展」とは異なるありよう 6. 「定常」

7. 経済に支配された「平和」 8. 貧困と近代化 9. 豊かさを問い直す、手作りの意味変化

映画「降りてゆく生き方」

35年の変化・・・NHK「現代日本人の意識構造〔第七版〕」を読む

大災害に考える

1. 人々のつながり 2. 支援のできること 電話は慎重に 3. 対抗・克服 しなやかしたたかな対応

4. 体験をもとにする事の大切さと心配 5. 外国関係の動きが問いかけるもの 6. 「復興」のありよう

7. 人々の生活・生き方の問い直しへ 2の1. 50年単位思考は、長いか短いか 2の2. 災害と生活指導
2の3. 多角的な情報収集 2の4. 対抗型とやり過ごし活用する型

国家公務員給与の削減 高いのか低いのか

大震災と生活指導 生活指導学会で発見したこと

1. 避難移住とコミュニティ 2. 避難所のパーティションの話など 3. いくつか

面倒な年金手続き 行政不行き届きに苦労

宮本みち子編著「人口減少社会のライフスタイル」(放送大学振興会2011年)を読む

1. ポスト人口転換 人口の高止まりと減少 2. 緩少子化と超少子化 3. 少子化の社会的背景
4. 少子化とセクシュアリティのあり方 5. 一企業に職業人生を尽くす形態の問題と変化
6. 新しい働き方 ワーク・ライフ・バランス 7. 教員の研修制度休職制度の活用
8. 仕事おこし 社会的企業 労働者協同組合 9. 家族機能の変化 人口減予測
10. 長時間労働 過剰ストレス 男性の子育て 自殺

4. 2012～2013年

91

生涯学習と職業能力開発

ワーク・ライフ・バランスというタテマエの実質化

生活の変化がゆきついた 国内モデル不在と欧米基準

繁忙ストレス病気と養生 自己他者社会のケア

坂岡洋子「老前整理 捨てれば心も暮らしも軽くなる」を読む

ワーカーホリックからスローライフへ

1. 私の早期退職 2. ワーカーホリック時代の私 3. 高熱とオーバーワークコントロール
4. 私の仕事・健康計画表 5. ワーカーホリックからスローライフへと進まない社会現実
6. 慢性的ワーカーホリックと経済成長 7. お金をかけるスローライフ! ?
8. お金に使われないで、お金を使うことが大切 9. 人生の前半期と後半期におけるスローライフ
10. 井形慶子「イギリス式年収200万円で」を読む 11. 西洋医学中心の医療と身体の自己管理能力
12. 医療などの情報と身体の自己管理能力 13. 薬草・ハーブなどの使用
14. 脇役の生き方 保坂隆「人間、60歳からが一番おもしろい」(三笠書房2012年)を読む
15. 生活指導研究の性格・課題 16. 人生後半期の生き方と生活指導
17. ワーカーホリック病から卒業できない人々 18. 自然・人々とつながり合う いろいろな移住者
19. モノ・コト・カネに支配されない人間関係 20. 大金持ち志向はいいのか
21. オーバーペースからマイペースへ 22. 競争より共同の、強者より弱者のスローライフ

木暮太一「僕たちはいつまでこんな働き方を続けるのか?」を読む

1. 2003～2006年

「右上がり」「一直線」発想から卒業すること (2003年10月14日)

『共同グループを育てる』というすぐれた生活指導実践・理論書を執筆した方々との研究会に参加した。私が長い長い書評を書いたのがきっかけだ。

そこでいくつかの問題提起をしたが、参加者の積極的な反応があった一つは、「右上がり」「一直線」発想からの卒業ということである。「生活が豊かになる」「発達課題を順番にやりとげていく」「進んだものに依拠して、遅れたものを引き上げる」といった発想には、一直線上を上昇していくという共通発想がある。それは、1960年代以降人々のなかに深く深く浸透し、人々は空気のように、その発想のなかで生きている。

だが、それが今、問われている。発達段階の発想もそうであり、「ごっこ遊び」の次に「競争的遊び」の段階がくるという着想の問題性の指摘が当日の参加者の関心をよんだ。また、生活の豊かさを常に求め続けるということも、そのことにかかわる。こうした問題指摘がなされてからかなり長いのであるが、人々の生活意識のなかに入り込み、自らの生活・生き方のありようまで検討しようとする人は、まだまだ少ない。おそらく、数十年かけて、共通話題になるような課題かもしれない。私は、地球と人間の存在にとって、喫緊のことだとおもうのだが。

多忙化のなかで、<いいかげん>にやることを考えてみては (2004年5月30日)

昨日、沖縄で教師を勤めるたくさんの旧友たちに会った。そこでは、全国各地と同様に、教師の仕事の繁忙化が語られた。明らかに繁忙化の状況がある。そのなかで「まじめな」人は、繁忙化をつくりだした仕事をきちんとこなそうとして苦勞している。しかし、そのありようを問題にしてもいいのではないかと、思う。

「働き者の日本人」といわれるように、勤勉に働くという考え方、生活のありようは、歴史的伝統だと思う人が多いが、実はそうではなく、近代の産業主義のなかで、国家や企業がつくりだしてきたものだ。そして1960年代以降の「企業社会型」の生き方の浸透のなかで、それが定着してきたのだ。時間をきちんと管理するという発想もそうなのだ。そんななかで、「休む」ことさえ、きちんと管理して休むという形となる。いってみれば、「一生懸命働き、一生懸命休む」ということになる。あるいは「一生懸命働き、ポツと休む」ということになる。「働きながら休む」「やすみながら働く」なんてことはありえないことになる。働くことと休むことが対立語になってしまう。だから、働けず、癒しが必要となる状態に「陥る」とは「敗北だ」という感覚になる。

ふと英語のインダストリーは、「産業」と同時に「勤勉」をも意味することを思い起こした。ビジネス書での、中年以降の生き方の再創造を述べるものは、一層の「働きバチ」を主張する。今日の考え方でいえば、新自由主義的なものである。こうした流れとは異なって、二分法ではなく、「働きながら休む」「休みながら働く」といった<いいかげんさ>（ウチナーグチでいえば「テーゲー」）に注目して考えてみたらどうなるだろうか。「適

当にやる」もそうである。「手を抜く」もそうである。そうしたことが下手な人は、「まじめに」「勤勉に」やるが、それがうまくいかず「折れ」てしまい、折れてしまった自分を「なさげなく思い、いじめてしまう」のである。私が近著「<生き方>を創る教育」で主張した<企業社会型生き方>からの抜け出るうえで、こうした考え方は大切なヒントを与えるように思われる。

「暮らしがい」の問題を生き方追求の教育学のなかに位置づける (2004年10月13日)

これまでの教育学では、「暮らしがい」の問題がそれほど位置づいてこなかった。たとえば民主的な生き方を追求するというときに、そのことはあまり問題にされてこなかった。そうしたなかで、1960年代以降、企業社会型生き方が広まり、実際には「豊かな暮らし」追求のために、競争的でトコロテンコース的な生き方が人々を制覇した。

このことのギャップを埋めていく必要がある。大量の貧困・飢餓が存在するという地球的な視野のなかで暮らしの問題をとらえ、また自然の搾取のなかで「豊かさ」が成立している今日の「先進諸国」の暮らしをとらえていく必要がある。そのような視野に、さらにスピリチュアリティの問題を視野に組み入れつつ、教育を構想していくことが求められる。

スピリチュアリティ、生活(日常の生活と経済)、政治といった多様なレベルを視野に入れて、生き方を論じ、文化を論じ、教育を論じていく構えが求められる。そうしないと、「心」をめぐるトラブルが、心理戦争的な取り組み、「心」内部の問題におしやる形の解決、狭い限定的な「いやし」にされてしまう。

大胆に休むこと (2005年5月21日)

社会全体があまりにも忙しい。そのことはもう何十年も前からいわれ、「働きバチ」「ワーカーホリック」といわれてきた。にもかかわらず、人々は「休む」ことが下手なままだ。「休む」ときも、スケジュールに追われる「忙しい」旅行をしてしまう。気分転換にはなるが、ゆっくりしたペースをもてない。

こうした事情が、近年ますますひどくなりさえしている。大惨事を引き起こしたJR西日本の時刻表通り運行の強制がその象徴である。それにもかかわらず、人々の生活のありようは忙しく働けることを前提にくみたてられ、速い交通機関に無理やり乗ろうとする。生活リズムについていうと、「決められた通り」が強調されるが、「自分の体に相談しながら」とか「自然のリズムに任せ、流れのままに」などというのは、いやがられる。あるいは、「ひく」ということがいやがられる。「敗北」ということになるからだ。

病気というのが、今日では多くの場合、人々の忙しく、かつストレスフルな生活のありようへの黄信号である、というとらえかたはそれほどみられない。だから、なんとか病気に打ち勝って、病気と闘うという表現になる。

日本では、エコロジカルな生き方とか健康な生き方とかは、栄養食品の摂取とか、サプリメントの活用とか、あるいは多様な形でのダイエットという形で追求されたり、ゴミのリサイクルという形で追求されたりするが、もともとの過剰摂取、働きすぎはほとんど問題にされていない。休むためにいかに効率よく仕事を早く終わらせ

るかに焦点があてられがちだ。

今や、これまでの生活のありようの変更なしに、「休む」とか、健康な生き方に転換するとかは大変難しくなっている。その意味で、病気は大変いいきっかけを与えてくれる。病気を理由に正々堂々と、いままでの生きかたを変える大胆な行動が可能になる。しかし、人々はそこにふみこまないで、症候群への当面の対処として、「うじうじと」「闘病」を行なっている。

このことは、教育界にも広くあてはまる。ところで、全生研の「会員通信」最新号に毛利豊さんが「「過労死」時代の仕事術・サボり術10ヶ条」を書いておられる。なかなか示唆に富むところが多い。私はそれに加えて、「休暇」「休職」「退職」のとりかた・仕方なども付け加えてほしい、と思う。

しかし、今日の状況のなかで、なかなか「休む」「サボる」ことは難しいが、その大きな理由に、「まわりに迷惑をかける」ということがある。だから、つい無理をしてしまうし、「無理がかかっていることを他者にはいにくい」という気持ちになってしまう。そこで、こっそりとてもいいから、「からだがいうことをきかなくて」「とてもやっちはいけません」というグチの形をとって、弱音を「まわり」と共有することを日常化し、それをオモテの声へと発展させ、いわば異議申し立てをきちんと行なうようへと発展させたい。

今日の、効率・競争が支配する状況のなかでは、異議申し立てを共有しつつ、オモテの声にしていくことが、すぐれたリーダーシップだと思う。大事故とか自殺とかいう大事件になるまえにそうしたい。ところが、その大事件さえ、小事故だったといっておさえこもうとする動きがみられる。自殺者がでても、当人の問題にして隠してしまうことがしばしばある。そのときは、「大きな声で泣く」「なんといわれようが泣く」ことが人間として当然なことだ。そんな形で弱いものもつすぐれたリーダーシップを発揮したい。人間的にやるのが、今日ではとても必要であり、それがリーダーシップでありさえするのだ。

以上のべてきたことは、かなりの部分、私の実体験である。身体不調の黄信号がでた最初のうちは、一時的なことだからなんとかがんばれる、がんばろうとしてきた。しかし、そんな「姑息」なことではすまない。長年の働き過ぎ、ガンバリズム、効率主義からくる疲れが蓄積し、それがからだの形をとって、あらわれてきたのだ。そして、徐々に弱音をはけるようになり、自分のからだの声をきけるようになってきた。無論、とても試行錯誤ではあるが。そのなかで、自分のからだの黄信号を読むことができるようになり、あまり考えもせずに、休むことができるようになってきた。

そんななかで、数年ぶりにあう人が、「とても顔つきがよくなってきましたね」といってくれる。とてもうれしい。

愛知での雑感と「少子化」論

(2005年7月24日)

1) 愛知にいるときに、ふっと感じたことがある。誰かが何かを話したとき、それに対する反応を「できるだけ見せないようにしましょう」というものである。ないしは、「相手に合わせたフリをしよう」というものである。ないしは、「店員に」代表されるマニュアル通りの反応をしようというものである。授業の場にしてもそうである。それが、人間関係を無難にソツなくこなすワザとなっている、と感じるのである。

商品至上主義の関係では、そうしたことになりやすい。愛知といったが、近年の沖縄でもそうした傾向は増している。

そうした無難な状況を「打ち破っていかない」と教育実践にならないと感じることさえある。しかし、多くの教育実践さえも、そうした無難な関係のなかで営まれているのではなかろうか。

2) 先の「ひまわり会」で気づいたことの一つは、困難な経験をした若者たちが、一皮めくれて就職している例が多く出され、失業している例が少ないことである。さすが日本の「景気」を支えている愛知と実感する。沖縄とは対照的ですからある。その意味では、「経済的パフォーマンスの高い愛知」は、「ストレーター秩序」を卒業することが日本のなかでもっとも困難な地域なのかもしれない。

3) 大人の世界での会話で、女性が「主人は・・・」と語ることに会った際、最初、意味理解にしばしとまどったことがあった。その際、ああ「パートナー」のことかと気づいたが、そのことに関心をもってみると、かなり公式の場では、「主人」といういい方が一般的でさえあることに気づいた。とくに愛知では、このあたりもどうやって「卒業」していってくださるか、関心をもつ。

4) 先日、NHKで「少子化」問題の番組をしていた。それにはかなり経済的視点が貫かれていたので、視聴をやめてしまった。

こんな問題意識はないのだろうか。

今から100年以上前、かなりの長期にわたって、現在の日本の人口の1/3くらいの時代が続いたのが、100年少々前より激増して、現在の人口にいたったということをどう考えるのか。

それは、自然との関係のバランスを大きく崩し、地球的規模の南北問題ともからんでいるが、そうしたことは考えないのか。むしろ、1/3にもどるまでになったほうがいいのではないのか。

現在の少子化現象は、どこかでそうしたシステムの修正機能が働いているのではないのか。それを現在の「高止まり」状況の人口をそのままにしたいと人口統制をすることは問題ではないのか。

こんな問題意識があってもいいのではないだろうか。そして、現在の「経済至上主義」的「大量生産大量消費」的生活のしかたを、自然との調和をはかり、南北問題を解決する方向へと転換してはどうだろうか。

中村隆一・辻信一「スロービジネス」(ゆっくい堂2004年)を読む (2005年7月28日)

多様な世代の多様な方々が多様なきっかけで起業したスロービジネスについての話題が豊富な本である。中心はフェアトレードで活躍する中村さんの物語であるが、彼に触発された若者たちの起業の物語も含まれている。

ここには一つの新たな生きかたの物語がある。それは起業であり、スローであり、たんにNPOやボランティアということではなく採算も視野に入れたビジネスである。そして、食と出会いを中心とする日常生活を軸にした生きかたのありようを示すものでもある。

「雇用ではない仕事」と述べられているが、近代産業以前に存在した自給的生活をも視野に入れながら、「雇用」のなかでしか「生きられない」タテマエがつくられている今日の「経済」のありようを問い直すものも含んでいる。

我が家周辺には、こうしたタイプの起業家の方々が結構いるようだ。そうした方々の集まりもあるようだ。ま

た、近年「カフェ」が近隣に増えているが、そうした発想をもつ人も多そうだ。

実はこの本を手に入れたのもそうしたつきあいが契機だ。5年前になくなった西田純子さんの本を友人たちとともに発行準備しているが、その編集作業をお願いする人として出会った方が編集なされた実物として、紹介されたのがこの本なのだ。この本も事実上、自費出版に近い形で出版されたものと聞かすが、あそらくかなりの部数売れる本だろうと思う。正規出版ルートでの定価の半額で販売がなされている。沖縄生活の隠れたベストセラーの『スローフード』（チャルドフード2003年）も編集なされたという。屋比久壮実さんの本も、彼自身が自費出版して、通常の出版物の半額くらいであり、かつまた1000～2000部どころではないかなりの数が売れている。そんなことを考えると、出版にかかわるスロービジネスのイメージがわかる感じがする。

私自身もこうした出版形態を一度は試みたいと思うようになった。そうしたなかで、「雇用」の形ではない働く人々との興味深い出会いがあるかもしれないと期待する。

ところで、こうしたありようでの金銭面はどうだろうか。私は、こうした近辺のスローフード調のレストランに入ると、ついどうなっているか、私流の試算をしてしまう。多分、働いている人一人あたりは年収100万円少々となろう。この地域では、それで「食べて」いけると思う。二人で月10万円生活のテレビ取材の件で考えたことだが、沖縄の田舎暮らしでは、日常生活費はだれでもそれくらいでいけると思う。しかし、都市型生活をしようとする、そうはいかなくなる。また、子どもを高等教育に行かせようとする、そうはいかなくなる。

このあたりが、これからの人々の日常生活のありようをめぐる大きな焦点になってくるのではないだろうか。

消費生活—東京・宮崎・沖縄

(2005年9月1日)

ワークショップのために東京にでかけた。そして帰りに息子夫婦がいる宮崎を訪れた。三番目の孫の出産予定日の数日後なので、孫が見られると期待してだったが、予定日より遅れているので、1、2番目の孫と楽しむことが中心になった。そして沖縄に戻る。

そのなかで感じたこと。東京にいと、一日で沖縄生活の一週間分以上のお金を使い、お金に結びつかない行動が考えられないほどである。それに対して宮崎の新聞折り込み広告にあった土地・家の価格の安さに驚いたというか、ほっとした。2000万円がゆとりが十分にある土地付き住宅が購入できる。20歳代でも購入しているという。宮崎の中心部への通勤20分くらいの地域でも、沖縄の玉城の価格と同じといった感じである。

宮崎は、ゆったりしている。「のどかさ」という感覚がぴったりくる雰囲気、都市中心部近くでも感じられる。沖縄のほうがむしろごたごたしている感じがする。

数年前、愛知を離れる「作戦」をはじめたころ、「田舎暮らし」の本をみたりしてなどで、沖縄以外に心ひかれた所として、大分と宮崎があった。とっても美味しい地鶏づくし料理を食べたが、東京だったら多分2～3倍の価格はするだろうな、と思う。

このついでにいうと、こうした消費生活を宮崎や沖縄でして、支出を減らすことは新たな生きかた追求のうえで大変有効なのであるが、そのなかで切り縮めることが困難な支出の一つに教育費、とくに大学を中心とする中等後教育費がある。一人の大学生にかかる支出約1000万円は、東京をはじめとする都市生活者にとってのイメージと、宮崎や沖縄の生活者にとってのイメージとはすさまじく異なる。年収200～300万円の親には、子ども一人を大学にやるために、田畑を一つ売ることが求められるという話が現実味を帯びる。

しかし、そんな宮崎だが住む人は多くない。たまたま立ち寄ったお店に就職情報誌があったので、のぞいてみたら、飲食店のアルバイトと愛知を中心とする自動車産業への季節工・派遣社員の募集の二つで大半を占めていた。沖縄でもそれに近い状況である。

その背景にあるのは、商品消費中心の生活スタイルとそのために必要な収入の確保である。宮崎や沖縄といった「田舎」から離れて都市生活を求めるのは、そうした事情があろう。都市にいったら豊かな発見をともないつつ、多様な人々と出会いつながりあい創造しあうという感覚ではない。商品消費的豊かさを求めざるをえない「流れ」のなかに生きるのが中心になっているといえよう。

そしてそれには、「商品消費」「収入」の他に次のキーワードがつかまとう。「競争」「忙しさ」「ワーカホリック」である。それらのなかには、人間同士の豊かな出会い・共同、そして自然との豊かな出会い・共同が稀薄である。さらにそれらには、「不安」がつかまとい、「癒し」願望が根強く存在する。それにもかかわらず、生活スタイルを変えないで「癒し」だけを求め、「癒し」ができれば元の仕事・消費に戻るのである。

こんな話のおりに、ロナルド・ドーア「働くということ」（中公新書）を読んでいたのも、興味深く読んだ。たとえば、こんな指摘が書かれている。

「アメリカ人は自分たちが生産するよりも5.5%多く消費し、生産するより少なく消費する他の（特にアジアの）国民が、あまった生産品をアメリカに輸出する。それで得たドルをアメリカに投資する形でアメリカ人に貸す。こういうからくりで世界の景気は保たれています。輸出部門の繁盛によるわれわれの繁栄は、アメリカ人の軽率といえるほどの陽気な浪費によるものなのです。」P17

「1975年から1995年の間の労働生産性の大幅な上昇を日本の国民がどういう形で消化したかというところ、4分の1は余暇時間の増加、4分の3は消費の増加でした。ところが、これは過去の話です。」P18（再び労働時間の増加へ）「週60時間以上働いている人が1995年から2002年の間に、15%から21%に増えました。」P28

こうした指摘のように、生産性の上昇は、主として商品消費の増大となり、いったんはとりはじめた労働時間の縮小も再び拡大へと向かっている。そして重要なことは、商品消費が、すでに限度を越えている自然の搾取をさらに拡大してすすめられていることである。

かつこうした動向は、ドーアもいうように、自由競争の形をとっている。「働けば働くほど」忙しくなり、商品消費に追いかけるという実態をうみだし、それがまたアメリカのきわだつ「豊かさ」をうみだす構造になっている。そして、そのなかで福祉国家的施策は削減され、かつ自然搾取がどんどん進行していく悪循環構造が世界規模で進行させられている。

こうして人々の生活次元における労働と消費に、世界経済の問題構造が具体的に表れている。しかし、こうした悪循環は、巨大な「流れ」を構成し、それにのるのが当たり前になっており、そこから離れることは大変困難だというイメージを与えている。私のいうストレーター構造もその一つである。

生活スタイル・人生スタイルにかかわって、一人ひとりがそうしたものにどこで異議申し立てをし、異なる道を少しでも歩みだせるかどうか、それはミクロポリティックの重要な焦点テーマの一つとなっている、と思う。

「下流社会」に「強者」になることをよびかけるのか (2005年9月25日)

三浦展「下流社会—新たな階層集団の出現」(光文社2005年)を読む。タイトルに興味を覚えて衝動買いしたものだ。興味ある指摘もあるが、それらの問題へのアプローチ、打開方向は私とは全く異なる。首都圏のいくつかの世代へのアンケート調査をもとにしたものである。その回答を「上」「中」「下」に分けて分析しているが、その方向性として、新自由主義的な競争社会のなかで「強くなること」を求め、「下流」におちこまないようにとのメッセージを潜ませているものである。最後に、「下流社会化を防ぐための『機会悪平等』」という、アメリカでいうアフーマティブアクションの提起をしているが、それはつけたりの影響を受ける。

刺激的というか、挑発的な各章タイトルをいくつか列挙すると「年収300万円では結婚できない!?!」「自分らしさを求めるのは『下流』である?」「『下流』の男性はひきこもり、女性は歌って踊る」といったものである。

この本の前提にあるのは、商品中心消費の拡大を基盤にした経済成長を前提とする新自由主義的な競争社会である。そして生き方教育に焦点を絞っていると、私の用語を使えば、少数に限定されてきている「ストレーター」型生き方を「下流」のものも断念せず意識的に追求しないと大変なことになる、という発想である。かなり「脅し」的なトーンを含みつつ。

商品消費中心の経済拡大を前提にしないで、「ストレーター」型生き方からいかに脱出し、新たな生き方創造を追求しようとする私とは対照的である。それにかかわって注目されるのは、男性のなかに「ロハス系」と命名された「健康で持続可能な生活様式」「スローライフ志向」の一群が登場していることを指摘していることである。かれらはかなり「上」に位置づけられている。かれらは新自由主義下の強者ともいえる「ヤングエグゼクティブ系」と対照的に位置づけられている。しかし、この本ではそれ以上の言及はなく、事実上「ヤングエグゼクティブ系」をモデルとする生き方の強調が基調となって述べられていく。

また、「下」に位置づけられているものに、「自分らしさ」へのこだわりが強いことが指摘され、かれらに対して、そこから脱出するようメッセージをおくっている。「団塊世代」で「自分らしさ」にこだわったのはかなり「上」の層であったが、それが「団塊ジュニア世代」では「下」に著しいと述べている。そして「自分らしさ」へのこだわりが否定的に描かれ、「自分らしさ」にこだわらずに、あえていうと競争社会のルールをできるだけ早く駆け上がることに「自分らしさ」を求めよ、というメッセージになっている。

無論、今日「自分らしさ」を追求する若者たちは、商品・マスメディアに誘導され、そのなかでの選択にしか「自分らしさ」が追求できない状況が広くみられ、また人間関係下手状況がみられる(それを「ひきこもり」型と三浦は名付ける)。それにしても、かれらが「駆けのぼり」型生き方からはずされ、あるいはそれを拒否しようとしているありようを受けとめ、そこからどのような展開をするか、そこに私の言う〈生き方〉を創る教育の課題がある。そして、三浦によって「上・中・下」のどこに位置づけられようとも、商品消費拡大・経済成長を前提とする強者をめざす競争的な生き方から、他者との共同のなかで、エコロジカルな生き方・スローライフな生き方へとどのように転換するか、そのなかで「自分らしさ」をどのように創造していくか、ということである。

コミュニケーション能力が弱く、「ひきこもり」になりがちだとされることにかかわっていうと、そのコミュニケーションのありようを問うていかななくてはならない。わかりやすくいえば、競争的討論であるディベートに勝利するようなコミュニケーション、あるいは営業社員として営業成績をあげるようなコミュニケーション、あるいはファーストフード店の応対マニュアルにあるようなコミュニケーション、そうしたものが新自由主義下では強調される。私の考えでは、それとは異なる、発見・創造的な、あるいは物語的な、あるいは身体的・スピリ

チュアルなレベルを含んだコミュニケーションこそが重要である。

ところで、三浦分析は首都圏での調査を前提にし、首都圏以外の人々、および消費社会から距離がある人々をはずしている。そのため、首都圏的ありようを前提にする、あるいはスタンダードにすることに陥っている。沖縄の、しかも田舎に住む私には感覚的にかなりの距離感を覚える。この本の分析でいくと、沖縄の若者などは、「下」ないしは「下以下」に位置づけられるものが圧倒的多数になってしまう。それでも、愛知の大学で出会う大学生を理解するうえで、とくに商品文化と「ストレーター」型生き方のなかで模索している学生たちを理解するうえでは、多少の参考にはなる。しかし、経済的パフォーマンス性が東京について高い愛知にしても、「上」に位置するのはブランド大学卒業のなかのさらに限定的なものに限られ、首都圏感覚よりももっとずれる。

そして重要なことは、こうした状況の継続がこれから先何年保障されているのだろうか、という問いかけである。私はそれほど長くはないと見る。三浦やその他の論者がいうように、格差社会の進行は早く、日本の若者の多くは「下」か「下以下」に置かれる可能性があるだろう。

さらに重要なことは、この書籍も含めてだが、多く階層論者は、アジア諸国をはじめとする世界の若者を視野に入れないことにある。日本在住のそうした人々も視野に入れていない。今、日本の経済は、国内外のそうした人々の労働力を踏み台にして動いている。その意味では、「強者」である「上」を追求するということは、世界の支配層を形成するということなのだが、そのことの自覚がない。そしてそうした支配層の利害追求が、地球をめぐる否定的状況をつくりだしている。

だから、「下」もしくは「下以下」に位置づけられるような人々が、世界の「下」「下以下」に位置づけられるような人々とつながりつつ、新たな「自分らしさ」の追求を、多様な出会いのなかで、「敗者」をつくらないような生き方、自然および自然の一部である自己の身体を搾取しないような生き方を発見・創造していけるかどうか重要である、と私は考える。

カール・オリイ「スローライフ入門」(ソニー・マガジンス)を読む (2005年10月10日)

本書は、日本では6月に発刊されたばかりだが、原著は2004年であるにもかかわらず、すでに22ヶ国で発刊されベストセラーになっているという。食卓・都市・運動・医療・セックス・労働・レジャー・学校など、多様な分野での「スロー」をよびかける。

本書の特徴は、現在、ファーストに生きている人々に対して、そのパフォーマンス性を落とさずに、スローなありようを実現する方法を提示するという点にある。「スローにしたほうがかえって効率がよくなるよ」というメッセージさえうかがえる。その意味で、現に高い効率性を求めてファーストに動いている人々に対して語る本といえよう。生活のありようを本格的なスローな生活へとラディカルに変えることを求めるわけではない。その「穏健さ」がベストセラーの一つの理由かもしれない。スローにするというよりも、スローを含めて自分のペースで生活していくこと、時間に拘束されて生活するのではなく、時間を自分なりに管理して生活することを求める。

多様な世界でのスローな動きをかなり広く紹介しており、まさに「スローライフ入門」となっている。その意味で、広汎な人々がスローライフをはじめるときかけとなるという点での有効性があるだろう。とはいっても、この本で紹介されているスローライフのなかの一つぐらいいはすでになじんでいる人も多いだろう。

そうしたスローライフ入門的なありようから、次にどこに向かうか、という点に注目していきたい。社会全体のスローライフ的転換へとどうつながっていくのか。「持続可能」は今日ではどこでも使用される用語だが、すでに「持続可能」を保障する枠を超えた事態が広汎に存在している以上、その枠そのものを大胆に縮小しなくては「持続可能」は実現しないという指摘があるように、すでに徹底してファーストになっている社会のありようそのものを大きく転換させるということとつながったスローライフの実現を求めたい。そうでないと、スローを実現する「余裕」をすでにもっている人だけのスローライフになりかねないからである。

森岡孝二「働きすぎの時代」(岩波新書)を読む (2005年10月29日)

今日の日本における働きすぎ状況を、「世界に広がる働きすぎ——グローバル資本主義の逆流」「家庭も出先も職場になった——情報資本主義の衝撃」「消費が変える雇用と労働——消費資本主義の罨」「労働の規制緩和と二極分化——フリーター資本主義の大波」の四つの視点から分析している。

私の関心事・主張事と共通することが多く、学ぶこと大の本であった。とくに過剰消費状況の指摘、労働時間の二極化の指摘、スローライフ・ダウンシフトの提起などは興味深かった。そのなかでも、小貫雅雄さんがモンゴルに示唆を受けて提起している「菜園家族レボリューション」構想の紹介は興味深い。週二日を従来型の資本主義セクターないしは公共セクターで働き、他の五日は菜園ないしは自営の仕事にたずさわるといのである。今日の時代では、すべてスローライフだけではうまくいかず、ファーストライフとつきあわざるをえない局面が多い。その意味では、ファーストライフに「専念」する人と、スローライフに「専念」する人に二分化するのではなく、一人の人が双方をもつ、という発想は興味深い。

また、スローライフのために沖縄移住をする人々の激増も記述されている。こんな話を読むと、まさに私自身の話だ、と感じる。このごろの私は、非常勤講師の授業と、各地でおこなう講演・ワークショップが、週あたりに換算すると2~3日で、自宅での菜園・庭仕事と執筆・読書生活が4~5日であるから、まさに「菜園レボリューション」的生活であるし、沖縄移住者なのである。

ところで、このところの働きすぎは、「身体」の問題として表現されることが一般的である。身体が働きすぎを拒否し、鬱・自殺を含めて多様な心身の病の形で表現している。そうした状態に陥る原因として、冒頭の四つの視点にかかわることがある。その意味では、心身の病は、個人の問題ではなく社会の問題であり政治の問題である。にもかかわらず、そこに開いていかない状況がある。政治の世界では、そのことがイシューにならず、「保守二大政党」は、むしろ上記の四つの視点をいかにおしすすめるかを競い合っているという感じさえする。しかも、人々はその二つをいかに選ぶかという選択肢のなかで、政治を考えるというのが一般的ですらある。個人の問題から出発し、かつ政治を人々の共同の形で創造していくという形へと展開していつていないのである。

そうした状況があらわれた時代として歴史的にみると、1930~40年代がある。また、高度経済成長期にもそれに近い状態がみられた。こうした状況とは異なる状況がいかに開かれてくるか、そこに関心をむけて考えたい。

夢想「人生創造産業」 (2006年3月24日)

先日の「人生ユンタク」で、脚光を浴びている近隣の農産物共同販売所の花野果村の方が、以前に私が「人生創造産業」「人生創造ビジネス」ということを話したことが紹介され、かなり重要な会議でそれを提起したとのことであった。

いいだしっぺの私としては、多少はそれについて語らなくてはと思う。そこで、このあたりでありえそうな「産業」「ビジネス」について、ならべてみよう。かなり「夢想」的であるが。

- 情報誌づくり (ネット形式と紙形式)
- 観光相談 (本土ツーリストとの提携も含めて)
- 本土からの修学旅行対応
- コンピュータ相談 (高齢者をはじめとして不慣れの方々のために)
- ガイド (環境、平和、その他)
- 出版
- 若者塾 (近隣の若者対象と、本土から来訪する若者対象)
- ホームステイ仲介
- 学習塾 (従来のものとは少々異なった)
- ミニコンサート (自由コンサート)
- オペラづくり
- カフェ・文化喫茶
- 田舎暮らし相談
- 歴史発掘
- いやしワークショップ
- ギャラリー
- 高齢者福祉

これらは飛行機のなかで思いついたものだ。でも、あまり収益があるものではない。だから、ビジネスにならずにNPO的なものになるのかもしれない。空き屋を活用して、会員制ですすめるような類かもしれない。公設民営でもいい。上記の一つだけでは成り立たないので、こうした「産業」をつなぎ促進したりする、いわば「スロービジネス連合会」のようなものが現実的なものかもしれない。

こんな話をしたら、本土のある高校教師から、修学旅行対応はすぐにでも実現してほしい、といわれてしまった。

「人生ユンタク」のおりには沖縄野菜のことが話題になった。ハンダマ、フダンソウ、にがな、サクナなどである。これらは近年あまり栽培もされず、スーパーの店頭にもならないことが多い。しかし、最近は薬用植物として話題になることが多くなってきた。最近、こうした野菜を我が畑で栽培しはじめたが、料理法がわからず、インターネット検索したりしている。

こんな野菜を使ったレストランがあってもいいのではないかと、思う。近辺には、おしゃれなカフェ、琉球料理店、薬膳的な店は増えているが、また沖縄ソバ店や庶民的な食堂などはあちこちにあるが、伝統的な沖縄野菜を使った親しみやすい店はまだまだ少ないからである。こんなのも、新たな人生創造産業になればいいと思う。

異質協同論から生き方創造論への私の研究展開—階層・格差問題をめぐって

(2006年8月27日)

1) 生き方創造論は、2004年刊行の『<生き方>を創る教育』(大月書店刊)にひとまず集約したが、まだ途上であり、今後かなりの間研究テーマとして続きそうである。この生き方創造論は、発見・共同創造論およびワークショップ論と並行して展開してきたが、その前に位置する研究関心は異質協同論であり、その異質協同論の展開として、発見・共同創造論およびワークショップ論だけでなく、この生き方創造論があるといってもよい。その異質協同論を軸に研究作業を展開していた80年代後半から90年代半ばまでのころに、生き方創造の問題に関心を強く抱くようになったが、そのきっかけというか、アプローチの一つに階層・格差問題がある。それらをめぐって、研究の流れと生活体験の流れの双方から述べていく。

2) 80年代末から90年代初頭、教育社会学の方々が階層に焦点をあてた分析を展開していたことが一つの刺激を私に与えてくれた。今では「格差社会」問題としてなじみのあるテーマであるが、当時は「平等」に対する強い支持があるなかで、階層を論じること自体が避けられる傾向さえ存在した。しかし、社会学の示唆があるにしても、教育実践者たちが現場から報告する厳然たる「階層」的事実をどのように把握するかは避けてとれない問題であった。そのこともあって、当時、神保映さんや鈴木和夫さんの学級を訪問し、学級の人間関係にかかわる階層問題についての詳細な分析を展開したのである。

3) そうした子どもたちの階層をめぐる事実把握に対しては、いかなる教育実践を構想するのかという問題が出てくる。それへの一つの回答は、「平等」を重視し「格差をなくす」発想にもとづくものである。そしてそれは、教育実践上多くの問題が発生しているのは、「標準」からはずれ「下」の階層に「追いやられた」子どもたちであるという把握から、「上」にある「標準」に、「下」も含めてすべてのものを合流させていく方向性を追求するという発想につながりやすい。

こうした問題追求には、福祉国家的ありようを求める流れとどのように連動するのか、しないのか、という検討問題が並行する。こうした発想は、権利要求の足掛かりになるのだが、日本の「水準」は、地球的視野でみるなら、先進国としての「水準」、いいかえるなら、地球上の「上流」社会における水準確保、既得権確保になるのではないかと、という疑いが発せられる。

4) 3)の方向とは異なり、単純化して表現すると、「下」に合流する方向性での構想がありうる。この方向性は、なじみにくい発想かもしれないが、日本の水準が地球上の「上流」に位置するという客観的事実をふまえる時に、現実問題となる。

80年代半ばから教育実践の場でも「教室における南北問題」という形などで、このことが論議されるようになってきた。私自身も、90年代半ばに、友人の神保映さんを中心にしてたちあげた「ネパール教育支援の会」にかかわり、ネパール訪問もしたこともあって、直に触れる問題として、さらに1999年のトロント在住生活のなかで考えることの多い問題でもあった。

「お金」と「偏差値」の威力が巨大でさえある「愛知での生活」も、こうした思いへの共鳴を生み出した。たとえば、自動車購入の際に、それまでと同様に1300CCくらいの日本車を購入しようとしたら「大学教員に

ふさわしい自動車ではないが、それでもいいのか」と念をおされたのがひどく印象的であった。そんな折に、専任教員と非常勤講師との待遇格差に強い関心をもちはじめたのである。

※ 沖縄にもどって、愛知の自動車産業に季節労働者として「出稼ぎ」に行き、沖縄の生活感覚からすれば、かなりの給与を確保し、沖縄での現金収入不足に対応している多く人と出会う。そんな発想をすると、私も愛知にかなり長い季節労働にいつてきたのか、とってしまう。

5) この両者の方向性とは異なる方向性を構想する、というものもありうる。「下流」における貧困問題、「上流」における競争至上主義のもたらす様々な悲劇的問題のいずれも拒否し、新たな道を探るというものである。

その一つのアプローチは、社会総体としてエコロジカルな生き方を追求するというものである。別のいい方をすると、環境問題の追求を自らの生き方の問題としても実践するということであり、産業主義への批判を前提としている。

私自身のこのアプローチは、90年代後半にグローバル教育とかかわりをもつなかで深められていった。さらに個人的にいうと、近年の私自身の「健康」の問題への関心と実践、自ら定年を区切り、新たな人生創造に向けたこと、「田舎暮らし」実践などとしてアプローチしている。亡くなったオヤジの「教え」を引き継いだ、私のケチ発想（カナダでは、「スティンジー」といわれた）もこのアプローチとなぜかつながってしまった。

そうしたアプローチをするなかで、エコロジカルな生き方を含めて多様な生き方をしている人々との多くの出会いがあり、そのなかでの異質発見のなかから、地球発見・自己発見があり、また共同創造・生き方創造ともつながってきたのである。

そして、これまでの産業主義的な生き方への「異議申し立て」にとどめず、多くの人、さらにはすべての人がそのような生き方にかかわるように求める流れへの展望を探求していくことになる。

飲酒事故キャンペーン、ストレスを減らす、ライフスタイルを変える（2006年9月20日）

このところ、飲酒運転事故にまつわるキャンペーンがすさまじい。しかし、統計的に飲酒運転が増加しているとの報道はみえていない。それよりも、飲酒運転防止キャンペーンが主導していると思われる。少年犯罪が増加しているわけではないのに、あたかも増加しているようにキャンペーンをはって、厳罰化への流れをつくりだしているのと似たものを感じる。

無論、飲酒運転はいけないし、防止すべきことである。だが、この課題と並ぶ、考えようによってはもっと重要な課題がある。それは、ストレスを減らすことである。ストレスの解消解決のために飲酒に頼ることが日常的にあるにもかかわらず、そのストレスを減らす営みについては、キャンペーンがあまりはられていないことを問題にしたいのである。近年、人々のストレスはますます増大している。だから、飲酒や飲酒事故の基盤はますます増大しているともいえる。ストレス増大のなか、飲酒をおさえこむキャンペーンが増大するとしたら、ではどこでストレスを解決解消すればいいのか。ここに大きな問題がある。

飲酒キャンペーンは、そうした社会的問題を個人責任の問題として追及していることにも一つの特徴をみることができる。そして、厳罰化すれば解決できるとみている点にも特徴がある。その点でも少年犯罪キャンペーンとも似ている。その流れでいくと、ストレス解消も個人責任の問題にされる。今日のストレスは社会的性格が濃

厚であることに重要な特質がある。「働きすぎ」に代表される仕事をはじめ生活のありように、質的にも量的にも、一人の人間が耐えうる限界ストレス、ないしは限界を超えた<過剰>がある。

ちなみに、「のんびりしている」と思われている沖縄県の一カ月あたりの労働時間が全国で男第四位女第二位になっていることは、沖縄もストレス社会になってきていることを示しており、とくに男性の平均寿命が劇的に低下していることと関係があると私はとらえたい。

さて、ストレスを生み出す原因としての<過剰>は、人間個人レベルだけでなんとかできる、という問題というよりも、社会的に解決しなくてはならない問題であるし、さらにそれは地球的な問題でもある。自然に対する過重負荷はすぎまじい状態へと進行していつている。無論、人間個人のレベルでもなんとかしなくてはならない。その際、その個人レベルからなんとかしつつ、さらに社会・自然へと発信していくことが大切である。

この事態は、学校教師をめぐってもいえる。そこで私は、『生活指導』10月号の「今月のメッセージ」という短文で、「『自分を守る・はずす・つながる・独自の実践をつくる』サークルを至るところに」というものを書いた。それは、近年学校教師が過剰な忙しさのなかで、かつ管理統制の過剰強化のなかで、これまでにはあまり見られないようなストレス状態に置かれ、多くの教師が精神不調状況を訴えながらも、それへの対応が異常なほどに不十分である状況を見てのことである。

ストレス過剰の原因が社会的政治的問題にあるだけでなく、ストレス過剰状況での黄信号赤信号状況に適切な対処をとらないという問題も社会的政治的問題として存在している。飲酒事故と同程度に、「〇〇会社の労働時間は一日あたり12時間が普通で、それはサービス残業になっている」「△△学校は、教師の2割がストレスからくる精神不安定状況になっている。」「労働行政は、□□問題をいつまでも放置するのか」などというキャンペーンをはってはどうか。と同時に、近くにいる人々が寄り集まって、個人的悩みにとじこもっている人と悩みを共有しながら、対処策を考え、行動していくという、いわば「社会運動」の展開が求められている。そんなことの足掛かりとして、教師サークルの役割は大きいのではないかと10月号では述べたのである。

「生活指導」は「生き方」にかかわることであり、その一つのスローガンとして「民主的生き方」という用語も使用されてきた。だが、そこには「繁忙を避けること」「休む」「精神身体をいたわること」などがほとんど含まれていなかった。状況の厳しさを打開するために「がんばろう」ということで、さらに繁忙のなかに入り込むことさえ普通であった。自己犠牲的に「がんばる」という人生観がかなり広く見られる。無論「それはおかしいのではないか」という疑問が「陰の声」として存在してきたのだが。

私は、以上述べてきたようなストレス対処への異常な不十分さは、「病」的であると思う。それは、個人の病であるだけでなく、人々の生き方の病であり、社会の病であり、さらに人間が生み出してきた地球の病と並行しているのとらえてはどうか。

今日の繁忙さを生み出している直接な原因は、何よりも企業社会的ありようであると考えますが、それに対して、政策レベルで戦うが、ライフスタイルレベルでは闘わないという傾向さえある。「生き方」変更、ライフスタイルの創造ということが、今日では「持続可能性」を追求する社会運動としても決定的に重要な課題である、ということが認識されていないのである。ライフスタイルの変更・創造は、個人の問題にされているのである。だから、移住とか田舎暮らしの問題は個人の問題の枠内に、またそれに関連する産業の問題の枠内に置かれている。移住・田舎暮らしには、ストレス社会とは対照的なライフスタイルを追求する「社会運動」的性格が反映していると考えたい。

こうした問題への注目は少ない。そのなかで、この随想のなかでも紹介した「働きすぎの時代」（岩波新書）

の執筆者である森岡孝二さんも含めた経済学者たちが共同執筆した、池上惇・二宮厚美編『人間発達と公共性の経済学』（桜井書店2005年）という本は、私の以上の考えと響きあう部分をもっている。とくに藤岡惇さんの「ディープ・ピース」という論稿は注目される。この本には30年あまりの蓄積があるのだが、今後のさらなる展開にも注目していきたい。

2. 2007～2009年

「中流」的生活を問う (2007年1月27日)

私が15年ほど前にいただいた疑問の一つは、「こんなに給与をもらっているのだろうか。」ということにあった。当時の年収は税込みで1000万円の大台にのっていた。

その疑問の背景の一つ。日本の40歳代の大学教員としてはやや高い方であるにしても異常に高いというものではなかったが、地球的規模で見ると上位10%以内どころか、5%以内に位置する高収入である。そのことにかかわる疑問である。

もう一つは、月給換算で1コマ20000万円台の大学非常勤講師給与で計算すると、週に30～40コマ以上の授業をしなくてはならない額である。専任と非常勤とは異常な格差がある。無論、専任には授業以外に業務はあるが、それを勘案しても異常な開きである。だから、専任の給与を減額しても、非常勤講師の給与を大幅に引き上げるべきだという考えを周囲にもらしたこともある。

※ 補注 1コマ20000万円台というのは、愛知のことだ。沖縄では1コマ150000万円以下だ。地域格差が明瞭だ。

最近、和田秀樹「新中流」の誕生（中公新書2006年）に目を通した。「ポスト階層分化社会を探る」という副題、「フィンランド、スイス、世界の勝ち組は皆「新中流」だ」と帯に書かれているように、かつての「中流」の崩壊が進み、「上流」と「下流」に階層分化しつつある日本の状況を「新中流」を生み出す方向で提案するものである。そこには、国内消費を支える「中流」を生み出す必要があるという考えがある。

日本の「中流」イメージには、終身雇用制の正規雇用のもとで働き、40代ともなれば中堅幹部になるコースを歩んできた人々、私の用語でいうと、ストレーター秩序を確実に歩んできた男性たちとその家族である。和田氏的にいうと、その層が日本の国内消費を支えてきたのである。以前住んでいた愛知でのイメージでいうと、年収1000万円前後、ないしはそれ以上で、3000～4000万円以上の持ち家を購入・建設し、200万円以上の自動車を持ち、子ども2～3人を大学に入学させ、都市型消費スタイルの暮らしをするというものである。

ついでになるが、日本の大学進学率は、先進国のなかでは低い方に位置する。高い授業料、奨学金制度の不十分さのなかで、日本では年収が800～1000万円以上ないと、子どもの大学進学には無理がはらむ。そんなことが、進学率上昇をおさえこんでいる一因といえそうである。そして、子どもを大学進学させるかどうか、今日では「中流」に乗れるかどうかの分水嶺になっているのかもしれない。こうした分水嶺は、今日の「格差社会」状況が続けば、あと数年のうちにくっきりとみえるものになる。

そうした「中流」生活を実現するためには、実のところ、競争のなかで年間2500～3000時間というワーカーホリック状況を耐え抜くことが求められている。その状況に耐えることの困難さが、40代50代男性の鬱病や自殺、そして健康不全として表現されているのが現実である。そして、それらへの個別対策として、鬱病や自殺防止策がいろいろと講じられるのであるが、肝心のワーカーホリック改善には関心が向けられない。それどころか、労働時間制限の撤廃さえ画策されている。

私の年来の主張である、人生後半期に入る40代の時に、人生計画と人生そのものの新たな創造が必要な時期に、ますます会社とこれまでの仕事に縛りつけられる状況があるのである。

確かに社会構造的にいうと、この時期にその流れからはずれることは困難であるという事情もある。そして、当の40代男性にもそれとは異なるありようを探究する動きが大変少ない。ワーカーホリック状況が、大変困った事態を引き起こしているという信号が、たとえば身体のどこかにあらわれているのに、ワーカーホリックでいいのか、という問いを意識的に追求することにはいかないのである。

「新中流」というなら、実はこのところを問題にすべきである、と私は考える。「地球にやさしく」「地球との共生」ということは誰しも支持するキャッチフレーズであるが、そのことを自らの生活にあてはめて考えることにはいたらない。そしてまた、その生活を支える高消費生活そのものが、「地球にはやさしくない」とは考えない。リサイクルまでは思い及ぶが、リユース、リデュースにはいかない。大量消費そのものが「地球にはやさしくない」とは考えないのである。大量消費しなければ、今の日本経済はもたない・発展しない、という考えを無意識に受け入れているのである。

そんな風であるから、職場での非正規雇用者の労働条件や給与については考えが及ばない。大学教員のなかでも、非常勤講師の待遇の悪さに関心を持ち、その改善に取り組もうとする人は少ない。むしろ、そんな非正規雇用者にはならないようにと、わが子に「檄」を飛ばし、フリーター・ニート叩きに乗っかかるのである。

さらに、世界的にいうと、日本の「中流」は世界の「上流」どころか、それ以上であることには考えが及ばない。もし、世界中の人々が日本の「中流」的生活をしたら、「地球がもたない」ことには考えが及ばない。

「中流」的生活をする人を増やすことではなく、「中流」的ありようの変更こそが必要なのである。

そして、ワーキングプアといわれる人々、貧困水準にある世界の人々、全体を引き上げる視野のなかで、自分の生活のありようを問い直していくことが必要だろう。だが、残念なことに、その問題が人々の前に現実的な課題として浮かび上がっていない。ワーキングプアや貧困は、競争に敗れた、競争にのらない、その人たちの問題であるから、競争に負けないようにがんばろう、という方向に力を注ぐのが、「中流」の大勢ではなかろうか。そして、政治の世界でも、こうした問題が争点にならないことの異常さこそを問題にしなくてはならない、と思う。

大人の男性が平日昼間散歩するのはカッコ悪い？ (2007年2月25日)

定年退職した男性からこんな話を聞いた。平日の昼間散歩するのはカッコ悪い。だから、どこかに仕事に行かなくては、というのである。

私は30代の時から、平日の昼間から散歩してきた。「大学教師は暇でいいですね」といわれたこともある。そこで「まあ、作家のようなものですから」とこたえてきた。原稿書きなど文系の研究の仕事は、机の前に座ってばかりでは、頭が働かない。散歩とか庭・畑仕事をしていると、発想がぐんぐんわいてくる。だから、私は机の前と外の歩き回りとを交互にしている。これは30代から今にいたるまでそうである。

でも、「生き方」の問題として、働きづめ・ワーカーホリックの男性は多いし、外見を気にする男性は多い。働いているフリをしなくては、と強迫神経症的になっているのである。もっとゆったりと、スローライフ的で、もっと多様な生き方・働き方があっていいのではないか。その点、女性のほうが豊かである。

学長になる方々 生き方に思う (2007年4月6日)

ある大学から新学長就任挨拶状をいただく。大学時代の同期あたりになり、よく知っており、いっしょに仕事もした方である。最近、同期ないしは少し上の年齢の方で学長になる知人が結構いる。

私の第一感想。「ご苦労さま」である。大学サバイバル時代によくぞお引き受けになった。よくスカウトされて、学長になる方がいるが、私の知人たちはそうではない。

ふっと、どんなタイプの方が就任なさっているのか、共通点を考えてみた。

- 1) まじめ
- 2) よく働く
- 3) その大学が好きである。勤務年数が長い人が多い。

かつてのように、「名誉職」的な雰囲気はなく、大変な激務である。それをやりこなせる人たちである。そしてトップに位置するといっても、組織の歯車のなかでのことだから、思うように仕事ができるとは限らない。

ひるがえって私のこと。私も40歳くらいまでは、結構「〇〇長」と名のつく仕事をやっていた。一時にいくつも引き受けていたことさえある。しかし、40歳過ぎて、それを避けるように動きはじめ、とくに50歳過ぎると、避けるための作戦さえ考えた。

皆さんにいろいろと考え行動していただくきっかけとして、「問題提起」「異議申し立て」をすることが私のスタイルになってきたといえるかもしれない。それにフリーがよく似合う生活ぶりかもしれない。

といっても、興味津々のことであれば、リーダー的役割を絶対にとらない、というわけではなく、検討したこともありはするが、最近では、依頼しようとする側の方が「ひいて」くださっているようだ。

ロハスはケチではなく、ぜいたくな生活 (2007年6月22日)

ロハスという、ケチケチ生活をイメージする人がいるかもしれない。私はその反対にぜいたくな生活だと思っている。言い方を変えると豊かで充実した生活だと思う。

なぜなら、時間をかけて、自分なりの「健康で持続性」を手作りする生活だからである。だから、金はかけないが、時間をかける。モノを金で買うぜいたくではなくて、モノを自分なりに「てまひま」かけて作ったりアレンジしたりすることを楽しむ生活であり、その過程を楽しむ生活である。だから、都市でそれをしようとする、大変である。どうしても無理があったり、手に入れるためにかなりの金を使わざるをえなかったりする時もある。しかし、田舎暮らしで、商品購入への依存をできるだけ減らす生活は、自然体でロハスな生活になる。

自分自身の体と心の健康・持続性、そして地域・南城さらには地球の健康と持続性、人びとと自然の健康と持続性を追求する生活なのである。だから、それは自分一人だけ孤立してできるものではなくて、人びととつながりながら追求する生活となる。

だから、専門用語を使うと、経済資本の豊かさに依存するのではなく、文化資本の豊かさに依存する。ロハスのための文化資本の豊かさは、人類史のなかで蓄積されてきたが、近年、金・商品支配の進行のなかで、急激に失われつつある。ロハスは、それをあらためて現代風に再創造する生活でもある。

＜新版モーレツ会社人間＞物語——日本経済新聞社編『働くということ』（日本経済新聞社2004年）を読む

(2007年6月28日)

激動の今日では3年前の書籍は少々古いといった感じかもしれないが、興味深く読んだ。日本経済新聞に連載された、多様な働き方をしている方々の短いドキュメンタリー風の記事を再編集したものである。

この新聞の特徴がよくあらわれて、大部分の登場者は次のような特徴をもっている。民間会社で働く人びと、ないしは会社をやめて起業している人びとといった方々。男性が圧倒的に多い。モーレツに働く方々。会社内外で、転職を積極的に展開している方々。平均年収がかなり高い方々で、生活に困るレベルのケースは稀である。

そして、リスクを含みつつ、新たな課題にチャレンジする方々というのが、ほとんどの場合の共通項である。かつサクセスストーリー風がほとんどである。それだけに、かなり興味深いケースの続出である。こうした志向性をもつ読者をひきつけてやまない本であろう。これまでの停滞した慣習やしがらみ的人間関係を打破して、新たな課題に創造的に挑んでいる方々である。だから、記事タイトルを＜新版モーレツ会社人間＞物語としたのである。

本の帯には、「手がかりを見つけて下さい 働くことが生き方を決める。若者から高齢者、フリーターから正社員まで自分探しの時代が始まった。様変わりした日本人の働き方を生き生きと捉える」と書かれ、この本のメッセージとなっている。

一言でまとめていうと、今日の社会のなかで、強者である方々、強者たろうとしている方々へのメッセージである。

それだけに、私なりの「人生創造」のテーマ・角度からは、ずいぶん異なる世界である。それを並べていうと、こうなる。

1) ワーカーホリックである。それに耐える気力・体力のある人である。ガンバリズムの人ともいえる。そして、科学主義的合理主義的な知力がある人でもある。かつてのように、与えられた枠組み（ルール）・課題を突っ走るとは異なって、自ら独創的な道をつくってモーレツにがんばるという形である。

2) 人生が、「働くこと」に収斂し、生活は「働くこと」中心にまわり、それ以外は「働く」ことを支える補助的なものとなる。あたかも仕事にだけ打ち込める「独立人」である。家事と人間関係を豊かにもつという世界が見えてこない。もし家族をもっているとする、その人を支えるために献身している家族なのか、その家族から「離れた」存在になっているのではないか、と思わせられてしまう。なにせ、一日10数時間、土日を返上してまで働いているという雰囲気が伝わってくる。

3) 多少収入は減っても、働きがい・やりがいを第一に追求する

4) 強靱な体力が前提となっている。私などは、こんな生活には体力上、到底ついていけない。だから、身体ケアとか自然との交流といったテーマは浮かび上がってこない。ファーストライフであるから、スローライフ・ロハスといったことは、テーマに浮かび上がってこない。

5) 競争主義的な人間関係観が強く、共同して働くとかイメージは背景に退く。当然「弱者」のイメージはなく、「強者」であるか、または「強者」になっていこうとする人びとである。だから「弱者」の視点に立つこと

は入り込まない。

6) 教育にひきつけて、私がいつてきた「ストレーター秩序」ということでは、強者側からの「ストレーター秩序」破壊である。だから、いまだに「ストレーター秩序」にしがみつくとが大勢を占める今日の学校秩序とは、大いにミスマッチングである。その意味で、これらの人びとが今日の学校に対して、どのような問題提起をするのか、それに対して、教育政策推進者の方々はどのように反応するのであろうか、が注目される。

7) この本にはなぜか沖縄の例は出てこない。沖縄の官庁を含むリーダーを自任する人、とくに会社関係者は、ある意味で参考になると思う。沖縄のリーダー的な人は、とくに教育界では、既存のルール、私のいう「ストレーター秩序」をより早くより高く走ることを強調しているが、それとは対照的な発想の事例が圧倒的である。今朝の新聞に、沖縄の天下りの話が掲載されていたが、それとは真っ向から反する生き方の創造話ばかりである。日本経済新聞が出すのだから、ある意味、日本の経済界の有力な提案という意味ももとう。「沖縄のリーダー」的な方々は、それとはかなりズレているのではなかろうか。

「格差社会」 (2007年8月19日)

「格差社会」をめぐるのは、実に多様な論調がたくさん出ている。それは教育実践のありようにも、また生き方のありようにも大きくかかわることである。そんなことで何冊かの本を手に入れて読んでいます。

その一つ、二宮厚美「格差社会の克服 さらば新自由主義」(山吹書店2007年)を読む。

実に多様な「格差社会」論の全体図が、著者の視点からわかりやすく提示されており、参考になる点大であった。

ところで、この著も含めて、「格差社会」論が、私の関心事である次の問題にどのような提案をするのかを期待している。

1) この著の副題は「新自由主義」にかかわっているが、それは、日本国内に限らず、世界的レベルで進行している。「先進国」も、そうでない国・地域をも巻き込んで進行している。日本国内でいうと、貿易などでかかわるとともに、「外国人労働者」問題などの形でもあらわれ、この著もそのことに多少は触れている。金額上、世界的にみると、日本は世界人口のなかでは、トップ1割以内に入るような収入支出の生活を送っている人がほとんどである。しかし、世界的な「格差」の問題との関係で、日本国内における格差問題を本格的に論ずるものには余り出会わない。この問題は、かなり現実的実践的問題になっているにもかかわらず、である。

2) 商品(貨幣)依存度が高い状況、限りなく100%に近い状況を新自由主義はおしすすめ、日本でも都市生活者はそうした生活を送っている。それに対して、依存度を低める生き方をしている人がいるし、そうした志向性を追求する動きが存在する。ロハスとかスローライフなどということにもそれがあらわれることが多い。そして、私自身もそうであるが、社会運動的アプローチとしてそうしたものを考える動きがある。いつまでも経済の拡大、経済の「成長」を求めるありように対して異議申し立てをしようという動きとからむ。それは新自由主義とは対極的な位置にあるとも言える。そして現実には、日本経済は、拡大再生産から縮小再生産の方向に舵を切ることさえ視野に入れなくてはならないと思う。

そうしたことに対して、「格差社会」論はどういう発言をするのだろうか。私たちなどのように、また、私の近隣の方々のように、年間消費支出100～200万円、さらにそれ以下で、「人々と自然とつながって豊かに生きる」ありようについて、どのように論じるのだろうか。

アウル仕事研究室 興味深い組織 (2007年9月20日)

OWL (あうる) 146号というのを送付していただく。私の本『〈生き方〉を創る教育』に興味をいただいでいただき、紹介文が掲載されたのが同誌である。

同誌を発刊されている、OWL仕事研究室というのは、

「人生にとって仕事・職業とはいったい何だろう、現代社会の中で価値ある主体的生き方・働き方とは何だろう等、主体的仕事人生 (Original Working Life) をテーマにして活動しておられる。

そこには多彩な人々が集って、研究会などを開いておられるとのこと。場所が大阪なので、私にはなかなか参加したいが、近ければ、参加して論議に加わりたいと感じる組織である。

大量生産大量消費 働き過ぎへの疑問 私の環境問題への関心 (2008年3月27日)

私なりの独自アプローチで環境問題への関心を持っているということを話すと、「へーっ」という感じで受け止められることがある。

私の環境問題への関心のもち方は、まずは健康のアプローチがある。小さい時に、大病をしたせいか、病弱で、いくつもの病気とともに生きてきた。中学高校時代は、好きなスポーツができずに、体育授業さえ「見学」しなくてはならない時もあった。大学入学したときの健康診断は、他の人は一日の簡易な検査で終わったのが、私は何日も精密検査を受けつづけた。

たとえば、呼吸器が弱いので、排気ガスを浴びるとすぐにおかしくなる。そんなことが、私の環境問題への関心の原型の一つである。

そして、虚弱だったから、働きすぎるとできめに病気になる。ここ50年ほどの日本では大量生産大量消費のありようが一般的になり、それは働きすぎと結びついていると私は考えているが、そうしたことに対して、私は鋭い拒否反応をもつ。他の人から「ケチ」といわれるのは、親父の生活習慣をうけついでいるかもしれないが、大嫌いな大量消費を避けたいためでもある。リサイクル・リユースといったこと以前に、大量消費をやめたいと思ってきたのだ。

健康に敏感で、大量消費が嫌いな私だが、90年代に入って、エコロジーの考え方に会ってから、一層その生活姿勢と考えを強めた。日本にいるときもそうだったが、カナダに一年間いたときに、その考えを一層強めた。そして、理論的にもエコロジカルな視点からの環境問題への関心を深めてきた。その仕事の一つは、共編著した『グローバル教育からの提案』(2002年日本評論社)のなかに表れている。

だから、私の環境問題へのアプローチは、「生き方」問題という性格を色濃く帯びている。そんななかで、徐々

に、今でいうロハススタイルを作り上げてきた。そして、早期退職し、玉城での生活を始めたのである。

そして、人々とのつながり、自然とのつながりを大切にした生き方をしたいということで、昨年の今ごろ出版した「沖縄田舎暮らし」（アクアコーラル社）のサブタイトルに、「人々と自然とつながる人生創造」と言葉を使ったのだ。

大和田順子・水津陽子『ロハスビジネス』（朝日新書）を読む（2008年5月24日）

店頭で見つけた本。タイトルが示すように、「ロハスビジネス」をめざす人のためのガイドブックのような本である。といっても軽い本ではなくて、本格的な調査によってえられたものをまとめた本である。具体的なビジネス例、地域例が豊富だ。そして、かなり深く考えられた本である。

ついでに思いついたことをいくつか書こう。

1) ロハスに関する本は、個人がロハスとしてどう生きるかをテーマにした本が多いなか、ビジネスというアプローチは興味もたれる。とすると、ロハスに対して、行政からのアプローチ、NPOなどの組織としてのアプローチなどと、いろいろなアプローチがこれから多様に追求されていくことだろう。

2) ロハスを検討する際に、圧倒的に都市生活者の目からスタートすることが多い。そうではない角度からのアプローチがあってもよいだろう。

3) この本もそうだが、ロハスというと、文化資本が高く、経済資本が平均よりかなりある人がターゲットに考えられているようだ。10年ほど前に環境問題に意識的に取り組む人びとにはそうした層が多いといわれたことがある。

そのあたりをどのように越えて、もっと広がりのあるもの、あるいは異なった層からアプローチのものをどのように築いていくのか、といったことが問われていくだろう。

4) ビジネスだけに「お金」をかなり重視して考えなくてはならない。今日の問題の大きな背景に、大量生産大量消費があるのだが、この本は、その発想には批判的ではあるが、なお「お金」の問題にこだわらざるをえない立場にある。そうしたものとどまらず、生産と消費の規模縮小をどのようにはかるのか、という視点があってもいいのではないか。

5) この本のなかで興味をもった一つは地域起こしと結びついた事例である。そうした事例は、かつてのような「開発至上主義」とは異なるのだが、さらに多様なアプローチが紹介され、交流されるようなことがあってもいいだろう。

OWL仕事研究会のコミュニケーション誌（2008年11月14日）

OWLというのは、Original Working Life の頭文字だ。大阪で10年以上にわたって、地道に研究会を開いておられる。そして、この情報誌を作成されている。私の書いたものが、この運営者編集者の四木さんの目にと

まり、情報誌に何回か掲載していただいたことがきっかけで、おつきあいはじまった。といっても、この情報誌をいただくだけのものだが。

この研究会・情報誌は大変興味深い。仕事をめぐる多様な状況を、これまでの仕事のとらえ方の枠をくみかえつつ、とらえていき、仕事をめぐる様々な提言を出している。

10月号も、武田晴人『近代的労働観の意味』の紹介からはじまって、「引きこもり若者の再出発・就業支援など」を行っているNPO代表西嶋彰さんの論考など、小冊子ではあるが、中味が濃い。西嶋さんのものは、「正社員になる」ということが「大企業、一流企業、ホワイトカラーでなければならない」と思い込まれていることについて問うている。

ところで、「OWL仕事研究会 第二期の構想」というメモ書きがあった。そのなかで、仕事(個人と社会を結ぶパイプ)の断面図が、哲学・人生・企業・教育の四つの関係で示されていた。

最近、私は、人生起こし、地域起こし(沖縄起こし、仕事起こしともいったりする)、地球起こしの三つを並べて発言することが多い。それは、私も共感することが多い、スローライフとかロハスとかいう表現で最近知られるような生き方、それらは、地球起こしと地域起こしを含んだ人生起こしだからである。そしてそれは、景気とか給与額だけにこだわるのではない、生き方創造を含んでいる。

ところで、今、政府の行う給付金が話題になっている。そのなかで、2000万円以上の高額収入の人は「辞退」してほしい、とのことだ。一体2000万円以上の収入者がどれだけいるというのだ。私の住む南城市でいうと、1%に満たないどころか、0.1%もいるだろうか。2000万円以上が高額収入者だという感覚そのものを問う必要があるようだ。

「経済危機」とスローライフ

(2008年11月24日)

今、アメリカのプライム・ローン問題をきっかけに世界的に経済危機が叫ばれている。

話はすごくトンでいるようだが、私は、この問題を考える時に、人々のスローライフへの移行ということと結びつけて考えたい。

経済危機は、素人にはわかりにくいのだが、その道のプロにも予測がつきがたいようだ。株価の急激な低下・乱高下や為替相場の急激な変動が、それを物語っているだろう。ついでだが、私にとってとくにわかりにくいのは、為替相場が、円高に大幅に動いていることだ。なぜ、経済危機の際に、日本円がこんな「強い」のかがわからない。

それはともかく、こんな状況の下、「景気回復」が中心テーマとなって、いろいろな動きがある。とくに政治がそうだ。2000年春、一年間のカナダでの研究生生活を終えて、日本にもどったら、どの政党も「景気回復」を主張していたことに出会った時も、そのことを思った。

だけど、それでいいのか。

私は、90年代はじめのころから、いずれ世界はいつも「拡大、拡大」の「右上がり」コースではなく、「縮小、縮小」の「右下がり」にいつか転じる必要があるし、そうなると語ってきた。

「景気回復」というのは、経済成長を前提にしているから、「右上がり」なのだが、どうして、こんなに多くの人が、その方向で事態の打開を考えるのかが不思議でならない。

自然との関係で、人類は余りにも自然破壊、自然収奪、自然搾取をしすぎてきた。そのツケが環境問題という形で、すでに明瞭にでており、それを解決するには、「右下がり」を必要とするのだ。

それに、日本を含め、「先進国」の大半はすでに人口減少状況にある。だとしたら、「右下がり」は当たり前のことだ。

だから、「右下がり」を受入れ、どのようにその道を歩むのかが、人類にとっての最大のテーマになっているはずなのに、その議論が少なすぎるのが気になる。

「景気回復」ではない道、人類が自然とともに豊かに暮らす道を、おのおの場で創造していくこと、を中心にしないで、と思う。

すると「豊かさ」を、これまでのように、金銭・商品依存過重で考えることから切り換えることがとても大切になる。

私は、人々の暮らし・生き方において、とくに日本では、そしてとくに都市では、金銭・商品への過重依存症にかかっていると思っている。現代社会では、それらに依存せざるをえないが、過重に依存していると思う。その過重依存からぬけでいく方向をいろいろと工夫するという課題に直面しているのだ。

収入金額が減ったからということで、受身で対応することは、多くの人がしていることだが、そうした受身ではなく、積極的に過重依存からぬけでいくようにしてほしいのだ。

そして、金銭・商品過重依存は都市生活につきもののようだ。その意味では、田舎暮らしの方向が検討対象になってくる。

スローフード発祥の地はイタリアだが、「イタリア人の半分近くが人口五万人以下の小さな町や村に住んでいるという」

これは、今読書中の辻信一『スロー・イズ・ビューティフル』（平凡社）のなかの一節だ。私自身の田舎暮らしも、こんなことに深くかかわる。

こんな角度——スローライフ追求ということが一つのキーワードになるのだが——から、「経済危機」を考えたらどうなるだろうか。

辻信一『スロー・イズ・ビューティフル』（平凡社）を読む（2008年11月28日～12月9日）

若い知人から、この本をプレゼントしていただいた。辻信一さんの名前は、2年くらい前、中村隆市「スロービジネス ナマケモノボックス 02」（ゆっくり堂2004年）の編集を担当した方からいただいた、その本を読んでからであった。

その本のなかに、辻さんが登場してきて、印象深かったのだ。まさに「スロー」にこの本を読んでいる。興味津々というか、共感するところが多い本である。そこで、少しずつコメントしていくことにしよう。

I. スロー

まず「まえがき」だ。

「成長、景気、GDP、効率、競争、大量生産、大量消費、大量廃棄、開発、科学技術、IT、遺伝工学。思えば、これらを合い言葉とするぼくたちの社会は、実はぼくたちの身体性や日常生活や文化をめぐる夥しい数の否定形によってこそ可能になったのです。それまでのぼくたちの慎ましやかな経済は、生業は、生活の技術は、伝統的な知恵は、食生活は、人と自然とのつながりは、人と人との結びつきは、愛は、美意識は、身体性は、あまりにもスローなものとして否定され、卑下されて、いわばそれらの残骸の上に、「豊かな社会」という名の怪物は栄えました。

(中略) だからぼくたちの社会は、時代は、自己否定や自己憎悪という呪詛に満ちている。」

なるほどと思い、共感を深くする。

そして、青春時代の私は「自己否定」という言葉を愛していたことを思い出す。同類の「克己」「克服」という言葉もそうだ。ノートの表紙に「自己否定」というタイトルをつけたこともある。

そして、それらは、「努力」「頑張る」という言葉とつながっていた。

時代は、高度経済成長に移行する時期だ。

そして、「田舎」から「都市」に出た私は、カルチャーショックを受けながら、必死になって「ガンバリ」、このコースのなかを競争的に、必死になってつきすすんでいった。

そしてまた、「社会にめざめ」「社会の改革」を志すようになって、同じトーンというか、ますますこんな言葉に彩られるライフスタイルで「がんばった」。体が弱い私だったから、「身体からの異議申し立て」がしょっちゅうであったが。

第一章で、ドネラ・メドウズの引用だが、こんな一節がある。

「世界を危機から救わなければならない、と思っている人たちというのは解決策を売り込もうとみんな忙しく駆け回っていますね。(中略) 確かに熱狂は変革者の心に性急さ、過労、不寛容、あせり、いらだちを生み、内面的な平和をかき乱す一種の暴力ともなりますよね。内面の平和を知らない人に果たして、人の世の平和がイメージできるものかしら。」

まさにその通りである。私は忙しく駆け回ってきた。

1972年からの沖縄生活は、私を少しは「スローダウン」させたし、またこうした問題に気づき、1990年代の初頭に「休む」ことに関する論文を書いたのだが、それらにもかかわらず、忙しく駆け回ることはずっと続いていた。

本気になって、自分の生活をスローにしたのは、世紀移り変わりの2000年の後半からだ。身体が明瞭にストップをかけたのだ。それでも、スローな生活への移行にはずいぶん抵抗を感じた。外からのまなざしとしてそう感じたこともあるが、それまでの私自身の生活のなかで染みついた私自身のまなざしからも抵抗された。

ようやくスローな生活をしていると実感できるようになったのは、玉城生活をはじめの2004年ころからのことである。それでも、時々、忙しく駆け回るスタイルが顔をのぞかせたりするが。

こんな調子で、この本のなかで印象深いところについて、連載で書いていくことにしよう。

Ⅱ. 目標のために今を犠牲にする「準備社会」

中村隆市からの引用だが、「将来のために今を犠牲にするのはバカげている」という若者の感覚は、必ずしも「今さえよければそれでいい」という投げやりな刹那主義とは同じではないはずだ、と述べる。そして、中村によると、現代社会は『準備社会』だとのこと。

その『準備社会』は、現代社会が『保険社会』であることと深く関係しているという。つまり「広い意味での保険によって、我々は『今』を削り、切り縮めては『将来』を購おうとしているのだ」と述べる。

そして、「よく耳をするのは、今の若者が目標をもっていないことについての懸念で、彼らの生きがいとなるような目標を与えることが社会に求められているとする。しかし、そうだろうか。社会はこれまで子どもたちに目標を押しつけて、そのために今を犠牲にすることを強いてきた。そのことが多くの不幸せな若者をつくり出したのだ、ぼくには思えるのだが。」と述べる。(P 25~28)

なかなか鋭いし、大いに考えさせられる指摘の連続だ。

この指摘を読みながら、私自身の『<生き方>を創る教育』(2004年大月書店)で論じたことと深くつながることに気づかされる。と同時に、私の論をもう少し掘り下げて述べなくてはならないと思う。

同書で、私も今日の若者たちが、とくに日本の若者たちが、「将来」志向を弱め、現在を「楽しむ」ことにシフトしているという調査結果に触れつつ、論をスタートさせた。

1960年代に「エリート」に限られていたものから、誰しもが享受するものとして一般化した「青年期」は、自分なりの将来計画にもとづいて、自分の進路を創造選択していくものであるはずだった。しかし、実際には、1970年代半ばには誰にもわかるようになったのだが、乗って走ることを強制された「よりいい高校→よりいい大学→よりいい会社」というトコロテンコースによって進路選択させられることを意味していた。そのコースのなかのどのレベルを歩み、どういう進路選択するかは、偏差値によって決まることになっている状況を告発したものだ。つまり、「目標」を若者たち自身が創造選択するものではなくて、「社会」が「トコロテンコース」と「偏差値」によって、「目標」を若者に「押しつけた」のである。

そして、若者・子どもたちへの進路創造・生き方創造の教育は、実際は「偏差値教育」に代替させられてしまい、そのことが若者・子どもを受動的にさせ、「未来からの逃走」を生み出していると指摘したのだ。そしてそれは、現在を犠牲にするのではなくて、現在の充実と将来の充実を重ねてとらえることを求めるものだった。辻がいうような「準備社会」「保険社会」的発想を批判するものであった。

だから、私の著書は、現在の<生き方>と、将来に向けての<生き方創造>との双方を、若者自身が取り戻すことを求めるような教育についての提案であったのだ。

Ⅲ. 「問題を生きる」「答えを生きる」

前回紹介したもののすぐ後に、自然農法で知られる川口由一を紹介しつつ述べる個所がある。

環境運動などについて、「それらの問題をたててその解決に取り組むことが、いつの間にか、『生きる』ということのかわりをするようになってはいないか。問題を追いかけることに忙しく、肝心の『生きる』ことがおろそかになってはいないか。」 P 29~30

私自身「うちあたり」する指摘だ。40代前半までまさにそのような生き方をしてきたし、その後このことに少しずつ気づきはじめたにしても、『生きる』ことを大切にすることを実行できはじめたのは、50代後半からであり、いまだに「問題を追いかける」癖は強烈に存在している。

さらに、川口によりつつ、次のように述べる。

「いのちはおおもとのところでは無目的で、無方向だ。」

「今を生き、目的なく営み続けるのみだ。そこには終わりも始まりもない。過去、現在、未来の区別もない」

「かつて人々は、目的をたて問題をたてながらも、生きること自体を何かさらに大きな目的のための単なる手段だと考えたり、生きるということがあたかもひとつの問題であるかに感じて思い悩んだりすることはほとんどなかった。なのに我々の時代は、人々が必死に生きがいを求め、存在理由をさがし、役割を模索し、それが思うようにうまくいかない時には生きる気力を失ってしまうという時代だ。では、以前はどこが違っていたか。『生きる』のに理由など要らなかった。『生きる』ということに過不足はなかったのだ。」

「『今』はいのちの表現であり、『答え』。その『今』を、その『答え』を人間をひたすら生きてきた。『今』が未来と切り離されるまでは。そして単なる未来の手段だと見なされるようになるまでは。」

「社会運動家や環境活動家も、『未来の子どもたちのために』といった美辞麗句ですませておくわけにはいかないはずだ。」

「問題を『答え』ととり違えてはいないか。『答えを生きる』かわりに問題を生きてはいないか。『今』は未来の手段に成り下がってはいないか。ぼくたちの『今』は空しく、宙に浮いてはいらないか」 P 30～32

これらの叙述は、私には強烈なパンチに近いものがある。

「近代」の産業社会は、それ以前の当たり前のことをこのように大変化させたのだ。この叙述は、目的をもち計画・課題をもって生きることを否定しているわけではないが、そのことで、『今』『生きる』ことを結果的にないがしろにしている状況を鋭くついているのだ。それは、人生後半期、とくに人生「終盤」の人には、「名を残す」などといったようなこと以外に、「生きがい」がないことにしてしまう。そして「やり残した」、あるいは「無用だ」といった認識を広汎なものにしているのだ。「生きる」こと自体、「生きて、生活する」こと自体、そのなかで、私の本のサブタイトルではないが、「自然と、人々とつなが」っていること自体に価値があるのだ。

IV. 「時間を省く」

著者はこう述べる。

「『時間がかかる』ことはいつから問題となったのだろう。文明批評家で環境運動家のヴォルフガング・ザックスによれば、『時間と空間は克服されるべき障害』とするところにこそ近代という時代の特徴がある。(中略)

そういう時代の中で人々は常に時間的、空間的な制約に対して闘い続けることを強いられる。(中略) 時間を省くことで、その省いた分の時間をもっと有意義なことのためにとっておくため。しかし、だ。ハイテクが省いてくれたはずの時間は一体どこへ消えてしまったのか。」 P 94

まさにそうだ。私自身は長年にわたって、「時間管理」をすごくするタイプであった。それは生活習慣になってしまっている。常に計画的にやってきた。その計画は日々の時間管理から成り立っていた。だから時間の無駄を省こうとし、電車のなかで読書するのは当たり前だった。

その時間管理がだんだん「おおまか」になってきている。ここ3~4年、交通機関のなかで読書するのはやめにしている。地下鉄では、まわりを観察することが多い。ケータイ、読書、睡眠でたいていの人は過ごしている。時間を節約しているともいえよう。

私自身、こうした時間に「追われる」生活から抜け出してきたのだが、「時間管理」の癖からなかなか抜けきれない。でも、時計を見ることが大変少なくなってきた。そして、「今」を味わいながら行動することが増えてきた。

著者はこうも述べる。

「『時間がかかる』ことの中でも、直接生産や金に結びついていないように見えるものは「雑事」とか「雑用」とか「野暮用」とか呼ばれる。家事全般がそうだ。それは『できることなら無しですませたい』厄介事であり、それに携わることは一種の無駄だと見なされ・・・」P102

「我々は『留まること（ステイイング）』の価値を忘れがちだったようなのだ。（中略）「雑事」の数々はどれも「留まること」に関わる、『留まる者』たちならではの技術（アート）といえるだろう。」P103

その通りだ。最近、散歩もウォーキングと呼ばれ、かなりのスピードがあることが健康にいいとされる。私の散歩はまさに散歩。「留まる」ことが多い。人に出会えば話し、動植物で印象深いものがあれば、そこに留まり、海や空をながめてぼんやりする。コースはその日次第だ。決まりきったことをだんだんしなくなってきた。

こうしてコンピュータに向かっている時も、向かいたくなかったときに、向かうということが多くなった。無理をしてでも向かうということがなくなってきた。

ということで、カミキリムシ？を見つけたら、おもしろいと思って、写真にとり、ブログに載せるなんてことをしてしまう。

V. 「疲れ、怠け、遊び、休むことの復権」

著者は、バートランド・ラッセルの次のような指摘にもとづいて述べる。

・「世の中には、仕事や労働はそれ自体が立派なものだ、という信念のようなものがあって、これが社会に多くの害悪をもたらしている。」

・この考え方は、「かつて生産物を力づくで奪い取った支配者たちが、生産者たちに労働の尊厳という道徳をもたせることによって、搾取の構造をおおい隠したことに由来する」

・「一生懸命に働くことが道徳的であると生産者たちに感じさせる」

・「資本主義では必要のないものをたくさん生産し、一部の労働者を過度に働かせることで、失業者を生み出す。機械を導入しても労働時間を減らすかわりに人員を削減し、残った労働者をさらに駆り立てて生産をあげる。それでも、労働の尊厳という神話が維持しにくくなると、どうするか。『戦争する』」

・「『戦争の世紀』としての二〇世紀。数々の戦争を貫くものとして『生産主義』と『競争主義』があって、それを『労働の尊厳』神話が支えていた」

- ・『都会人の快樂は、おおむね受け身になった』
- ・『現代人は、何事も何か他の目的のためになすべきで、それ自体のためになすべきではないと考えている』

こうしたラッセルの指摘をうけて、著者は、「何かのためになるのでなければ、それは意味がないとする社会。そこでは、『今』はそれ自体のためではなく将来のために投資されねばならないだろう。」と述べる。

そしてさらに、多田道太郎の以下のような指摘にも共鳴して述べていく。

- ・「経済学ばかりが流行って、なぜ怠惰学がないのか」
- ・「日本における勤勉思想の根はそれほど深くない。徳川時代の二宮尊徳をはじめとした日本の勤労道徳は権力者によって上からおしつけられた比較的新しい、一時的な思想にすぎない。」

こうした指摘にもとづいて、著者は「ブラブリズムのすすめ」を行う。

「無駄な時間は悪時間」とする発想を批判し、「まず目的へと伸びるまっすぐな道を外れて寄り道したり、遠回りしたり、道草をくったりすることを自分に許すことだ。」と述べる。

そして、さらに「休む」ことと「疲れ」を結びつけて述べる。現代日本人の多くは「心地よい疲れのかわりに、我々が手にしているは過労」だと指摘し、「疲れと休みと眠りは互いにはぐれて迷子になっているみたいだ」と語り、「動物や植物が感じるように疲れ、それらが休むように休み、それらが眠るように眠る。この根源的な快樂に立ち戻ったところで、もう一度自分の欲望や欲求の棚卸しをやってみる。その上で、またひとつひとつ積みたいものはゆっくり積み上げていく」と提案する。

こうして読んでいくと、私自身が、『生活指導』誌1993年8月号に書いた論文「『休』を『教える』——『休』にとまどう学校のために」（のち、『転換期の生活指導』1997年青木書店に再録）の趣旨と大変近いものであることを思い出す。

それは、労働・家事・学業、社会的活動、余暇（レジャー）、休息の四つが未分化に存在していた時代から、近代の産業社会のなかに入らななかで、これらが分離されて他者によって支配されるようになり、長時間労働、「働きバチ」がつくられていった経緯を検討しながら、次への展望を提起するものだった。また、「学校五日制」実施のなかで、「休」とまどう状況というか、「休」むことを考えたことがなく、いわんや「休」を教えたことがない学校に対して問題提起するものだった。そして、文化の共同創造・自己実現のなかで、「休」を追求することを提案したものだ。

その論文のなかで、「休まなければならない」ではなくて、「理屈なしにとにかく遊ぶ、休む」ことを提起し、そのなかで、分離された四つのものを、自分たちのものに取り返していくことを提起した。

また、フランスや日本の例を文献によりながら、この『スロー』の本と同様に、近代の産業主義のなかで、「勤勉」「長時間労働」が形成されていったことにもかなり言及した。

著者にしても、私にしても、異なる世界に生きながら、同時代を生きているためか、同じようなことを考え、提案している。と同時に、日本で「働きバチ」「長時間労働」の問題が叫ばれて、もう長い期間になるのに、こうした論調と実践が、まだまだ一部に限定されていることを悲しく思う。

産業主義のほころびが見えやすいこのごろだが、それを「景気悪化、景気回復」という見方からではなくて、

産業主義からの脱皮が求められているという文脈で考え、実践する人が増えることを期待したい。

VI. さまざまな時間 体の時間と社会の時間

近代物理学の時間は、どこでも一様であるのに対して、生活に結びついた時間は、地域によってさまざまだと述べる。日の出と日の入りで時間を決めるありようが、人類の長い間の主流だったが、そんな時代では、一律の時間ではないことを思い起こせば当然だ。そして、冬の沖縄の日の出は7時を過ぎるが、それが北海道では異なるのも当然だ。著者は、時間は「本来地域ごとに異なり、多様であったはずだ」と述べる。その通りだ。生活のなかで生きてきた時間は実に多様であるほうが当然だ。

しかし、近代以降どこでも一様な時間になったのだ。それで、「時間の刻みで労働を計ることができるように」なり、「時間が商品の価値の基準にな」り、「時は鐘なり。そして金なり」と述べる。

こうした指摘を受けると、改めてハッとすると。

そして、「インディアン・タイム」をはじめ、世界中にはいろいろなタイムがあるが、そうしたところではしばしば「約束の時間」に遅れることにおおらかである、という。沖縄タイムもそうだ。1972年に東京から最初に沖縄にきたころは、これが私をいらいらさせた。そのことにおおらかになれるのに、何年かかったことや。

恵美子と出会ったころ、3時の約束時間に、私は5分前に到着していたが、恵美子は3時に出発していた。

原稿執筆締切りをほとんど守ってきたそんな私だが、この日曜日、原稿締切りが過ぎているといわれて、「ああそうだったなあ」と気づいた。やっとなんか私流の時間を歩みはじめたかもしれない。私の個人史でいうと、高度成長期直前に農村から都市に出た私は、近代基準の時間に合わせて自分の行動を律してきたが、今は逆に、自分なりの時間をとりもどしつつ行動しはじめたといえるかもしれない。

ところで、こうしたインディアンタイムにかかわって、著者は「自分たちに押しつけられた侮辱的なステレオタイプである『遅さ』や『のろさ』を表面的に受入ながら、それを逆手にとって、主流社会における機械的で融通のきかない時間の感覚を揶揄している、とぼくには思える。」と書く。

なるほどと思いつつも、そこまで解釈してもかまわないが、そんな解釈を聞いたなら、「そんなに力んで解釈しなくてもいいんじゃないの」、とおおらかに微笑み返す光景を思い浮かべるのが私だ。

著者は、さらに男女の時間の違い、そして動物の時間に違いに目を向けていく。動物の時間について本川達雄を参照しながら、「動物の時間は体重の四分の一乗に比例する」と述べる。そして「動物においてはエネルギーを使えば使うほど時間が速く進む。」「本川によれば、我々現代人はますます莫大なエネルギーを消費して時間の速度を速めているのだ」という指摘になってくる。そして、さらに本川によって「エネルギーを使って時間を速めて金を得る」のがビジネスだという。

さらに「現代日本人はヒトという動物が生きていくのに必要な量つまり、食物として摂取するエネルギー量の約四〇倍ものエネルギーを消費している。」「体の時間は変わっていない。心臓は昔ながらのペースで打っている。・・・こんなに速くなった生活のペースに、はたして体が無理なくついていけるものだろうか。」と本川は述べ、「『体の時間』と『社会の時間』の間に生じた巨大なギャップにこそ、現代における危機の本質が表れていると考える」とのことだ。

きわめて説得力のある提起だ。

それにしても、こうした提起を「現役」の働く人、とくに男性にいうと、理論的な反論はないとしても、「そんなこといわれても実際の生活では対応できない」と、鼻で笑われるのが普通だ。そのこのところをなんとかこえてほしいのだが。

今のところ、大病をわずらって、そのことに気づく人が例外的にいる。つまり「体の時間」が「社会の時間」を説得してしまった人の場合だ。それでも「病に克つ」のだと頑張る人も結構いるが。そんな人には「闘病」という表現が似つかわしい。

「過剰」から生じた経済危機を、「弱者」切り捨てで乗り切るな (2008年12月15日)

このところの報道は、「金融危機」「経済危機」でいっぱいだ。この「金融危機」は、ある意味「バブル」であり、「過剰」の結果だ。アメリカでの「バブル崩壊」が世界に広まり、「弱者」に「しわ寄せ」以上のものを及ぼしている。

そして「弱者」切り捨てで「危機」を乗り越え、「景気回復」し再び「バブル」状態をつくりだそうとしていると、私には思える。そして、危機解決策として、何十・何百兆円という、わけがわからないくらいの資金が、まさに「バブル」的に投入され、それが後代の借金として残される。それは、後代の人を「弱者」に陥れるだろう。

こんなことを思う私だが、その理由は、次のようなものである。

1) 地球環境的にいうと、すでに人類は「過剰な」搾取・収奪を地球に対して行っている。だから、地球を維持するには、この「過剰」をなくし、人間の経済活動を「収縮」させる必要がある。今日の危機の背景は、経済の危機だけでなく、ないしは、経済の危機というよりも、地球とそこに生きる人類の危機である、という把握が、私にはある。

2) だから、経済を縮小して、地球が持続可能になる規模にまでいく必要がある。ポイントは、地球と人類を「持続可能」にすることであって、「経済」を現状のまま「持続可能」にすることではない。「景気回復」とは、それ以上の「経済発展」を「持続可能」にしようとするものだ。つまり、三つのレベルがあるのだ。私たちに必要なのは、経済、いわんや「経済発展」の「持続可能」ではなくて、地球と人類の「持続可能」だと思う。

3) この地球と人類の「持続可能」には、「経済」上の問題だけでなく、人々の暮らし方・ライフスタイルの変更が必要だ。とくに「先進国」の生活レベルを、経済的な「上」レベルを基準にするのではなく、地球と人類の持続可能なレベルにまで、縮小していくことが大切だ。それは、「経済的に」下げることだが、生活レベルでは、貧困になることではなく、豊かになることだ、という発想が重要だ。たとえば、労働時間の短縮など、働きすぎを「適切な量」にまで減らしていくことが必要だ。また、金銭や商品に過剰に依存する生活のありようをいかに切り換えていくか、について模索する時代だと思う。

4) 「経済」的困難の解決策の中心は、「派遣」・パート解雇にみられるように、「弱者」切り捨てに中心がある。企業、とくに大企業はその方策を中軸に据えている。経営者や基幹社員を守ることが中軸になっている。

だから、「格差拡大」どころか、「弱者」は「生き残り」の外側に置かれる。

私は、年収2000万円以上は不要だと思う。ここまでいうと叱られるかもしれないが、1000万円以上も不要だとさえ思う。それらの額以上は、まさに過剰だと思う。ところが、大企業はそうした収入を得ている社員を守り、その半額にも満たない人々を解雇しているのだ。

そして、年収2000万円どころか、すさまじい収入を得ている人が増えている。沖縄には高級ホテルが増えている。我が家近くにも一泊5万円というところがつくられようとしている。そして、その周辺に住む人々は、年収200万以下の人たちがごく普通なのだ。500万円ぐらいなら、すごくいいのである。さらに自動車産業に「季節」でいていた人たちが、いやおうなしに帰ってくるだろう。

このインバランス。なぜか、東南アジア・太平洋の島々の観光地の状況を思い浮かべてしまった。

こんなありようを変えていくことこそが必要なのではないか。

浜田久美子『森の力』(岩波新書2008年)を読む

(2008年12月21～28日)

1. 感情・森

10月にこのブログで紹介した後藤伸『明日なき森』を読んだことも刺激になって、森に一層の興味をもつようになった。そんな時、店頭で目に入ったのがこの書だ。森とかかわりながら生きる人々を、多様な角度から紹介しつつ、たくさん問題提起をしている本だ。

第I部は「育つ」というタイトルで、その第1章は「森の幼稚園は五感のゆりかご—感情を深くためるからだに」だ。タイトルが示すように、感情について、ステキな指摘が続く。たとえば、

「喜怒哀楽と称されるそれぞれの感情には、本来、良いも悪いもない。むしろ、一つひとつそのつど自分の感情を十分感じ、味わい、そして何らかの形で『放す』ことで、自然と落ち着くことができるんだ」と述べる。

まさにその通りだ。

「森が他の環境より優れてコミュニケーション能力を引き出す場になる理由」として、森では「感情や感覚を刺激される機会が多いことだ」と述べる。

まさに生き方の問題として、森に象徴される自然のなかで、リクツなしに、人々が感情・感覚を豊かに伸ばしつつ過ごすこと、このことの有効性は、近年の私が感じていることその通りだ。

この本は、そうした感情・行動を豊かに展開することから、人間的感覚を取り戻し、豊かにしていく、それらのことを人々をつながりながら展開していくこと、などについて、私の『沖縄田舎暮らし—自然・人々をつなぐ人生創造』とまったく同じトーンで書かれている。

そうしたことのなかに、生き方・人生創造があるのだ、ということであらためて共感しあう本だ。

2. 『木の建築を否定した日本の歴史』

第8章は、ショックを与えるような記述が続く。

- ・「大学では木の勉強できんよ」

- ・「日本の木造建築が明治以降否定されてきた」
- ・「一見不安定そうに見える日本の木造建築物が、地震多発、台風頻発、温帯モンスーンでもろもろ腐りやすいという過酷な風土の中で何百年も保持されえたのか、という根本的な研究が置き去りにされたまま日本の建築は否定されることになった」
- ・「欧米の、壁によって耐力をもたせる壁工法は、剛構造と呼ばれ、『揺れても動きません』とする真っ向勝負型。一方の本当の日本の軸組みは、逆に揺れて力を逃がすことによって倒れない、柳に風型の柔構造。つまり、揺れることで倒壊を防ぐ。」
- ・「揺れて力を逃がす柔構造に、筋かいと金物という固定をつけることは相対立する。固定するために力がある一点に集中してしまい揺れが逃げられない。しかし、この建築基準法によって定められたやり方は、『在来工法』と呼ばれてあたかも日本の昔からの建て方を継承しているかの如き誤解を招き、この工法が常識となった」
- ・これらの根底にあるのは、基準がすべて工業製品の等質性・均一性におかれていることと、その基準を異質なものにまで押し通して不思議と思わない無知だ。」

私自身、これらのことのほとんどを知らなかった。「在来工法」というのが、実は「在来」ではなく、欧米建築のやり方に沿うものであったなどは、驚かされた。

沖縄でも近年木造建築を時々見かけるようになった。それらが「在来工法」なのか、それともそれ以前からの知恵にもとづいたものか、関心をもってみたい。

沖縄では、100年あまり前までは、瓦を載せる本格的な木造建築は富裕な支配階層に限定されていた。その意味では、明治半ば以降に広がった、庶民のための木造建築がどのようにつくられたか、などにも関心をもちたい。

自然と対抗して「闘う」という発想が、建築のなかにも深く浸透し、自然とともに生きるという非常に長期間にわたって蓄積されてきた建築の知恵が、わずか100年あまりで根底的に崩壊させられてきたのだ。

同じことは、農業でもいえよう。そして私達の生活・人生・生き方でもいえよう。

そんなことに思いをいたすとき、これらの記述は、私には衝撃的でさえあったのだ。

3. 森の現代史と行方

「おわりに」で、著者は森の現代史を描きつつ問題提起をする。わたしなりにまとめてみよう。

大量に飼育されていた牛馬の飼料用の草地を含めて、「戦後しばらくまでの日本の山は、生活密着資源と産業用燃料の比重が高く、建築用木材としての人工林は、専門の職業人によって造られる山、と言ってよかった。」

しかし、雇用対策を一つのきっかけとして針葉樹の人工植林政策が展開していく。そして、1960年ころを転機として、人と森のかかわりが変化し、里山が「無用な山」になっていく。そして、「未利用だった奥地の広葉樹を大量に伐採し、利用した後、もっと『稼げる』予定の針葉樹に変えていく」「拡大造林政策」が進行していく。

しかし、その後「手入れ不足」が明らかになり、今日の状況に至る。それは、山の荒れを引き起し、災害を促進さえしていると思う。

拡大造林の時期に、今日の「手入れ不足」を予測しなかったのか、という著者の問いに対して、「魔法のよう

な未知の科学への絶大な期待感」があったという。

ここで、わたしは先に紹介した後藤伸『明日なき森』のなかの「巻枯らし」を思い出した。人工林を自然林にもどすために、素人のボランティアでもできる方法としてある「巻枯らし」の運動が紹介されているからだ。大規模予算と機械技術に依存するのではなく、自然の流儀にそって、自然を復活させるこの取り組みは、おおいに興味をもたれる。

同じことは、農地にもいえるのではないか。大規模農地化がいわれている今日、それがアメリカの農地の荒れの再現になる危険性がないとはいいきれない。また、自動車や電気機器への依存症的状況になっている今日の日本の生活のありようにも同じことがいえる可能性がある。

『持続可能』が、ここ20年来の流行後になっているが、それは「経済成長」「商品・金銭への過剰依存にもとづく消費生活水準」の「持続可能」ではなく、「地球・自然」「自然と人間とのかかわり」「人間」の「持続可能」でなくてはならない。そのためには、人々の「生活・生き方」を視野に入れて、考えていく必要がある。

松井孝典『地球システムの崩壊』(新潮社2007年)を読む

(2009年2月11～16日)

I. 「宇宙的スケールで論じる、知的刺激に満ちた文明論」

私は、宇宙構造・宇宙認識のことに関心をもっていたが、ここ10年は関係書籍にほとんど目を通していない。この分野はすぎまじい勢いで研究が展開しているので、10年前の知識などかなり古びたものだ。ということで、店頭で見つけたこの本を読む。

しかも、帯に「宇宙的スケールで論じる、知的刺激に満ちた文明論」とあるように、注目すべき問題提起も含んでいそうなので、購入したわけだ。著者は、私と同世代で、大学院生時代に会ったことがあるような気がするし、そうでもないような気がする。

さて、当然ながら、最近の宇宙認識の蓄積が豊富に紹介されているが、それを紹介・コメントする立場に私はない。それでも、今後の宇宙・地球・人間の行く末にかかわる、次のあたりは紹介しておきたい。

「地球に限らず、宇宙も生命も、その歴史の本質は冷却に伴う分化にあるといえる。」

「(地球が冷えるにつれて) 今後大きく変化するのは地表付近の物質圏である。地表温度が、これまでの下降という長期的傾向から変化し、上昇に転じるからである。」

「人間圏はこれからも拡大を続けるであろう。するとその拡大に伴い、例えば地球環境問題に代表されるさまざまな文明の問題が深刻化する。そこで、地球史という時間スケールでは人間圏がまず破綻し、消滅することが考えられる。人間圏が消滅すれば、地球システムはシステムとして、人間圏誕生以前の段階と同様のメカニズムで、太陽光線の上昇に対し応答する。(中略) 生物圏が消滅する。(中略) 大陸地殻も激しい浸食により消失する。(中略) 表面が膨張してふくらみ、いわゆる赤色巨星という段階に至る。(中略) 膨張してきた太陽に飲み込まれ、ガスとなって銀河系空間に散逸していく。地球の未来とは、これまでの地球の歴史を折り返すように進行するということだ。」 P 114～6

壮大なストーリー把握である。

人間圏がきわめて早いスピードで展開していることが人間圏自らの消滅を早めるのだから、現生人類、つまり私達ができることは、そのスピードを下げる事。それは多少のことではなく、すさまじく下げる事である。それがサステイナブルに近づくことであろう。といっても、人間圏維持という意味でのサステイナブルには、ほど遠いだろう。

この本では、「学の統合とか、総合とか、文理融合とかは、いずれもこれまでの科学の基本的考え方である二元論と要素還元主義を超克しなければ、達成しえない。」「これは別に科学の世界に限ったことではない。そもそも学校教育が、そのようなこれまでの方法論的な考え方に基づいて構築されているために、あらゆる“分かる”ということの理解が全て、それに基づくようになっていくから厄介なのである」という問題提起を行っている。

この二つの考え方は、すでに20世紀に明らかになってことだと書かれている。その通りだと思う。にもかかわらず、科学の世界も学校の世界も圧倒的にこの二つの考え方のもとにある。それどころか、沖縄教育界などのように、それを追いかけていっているのが圧倒的ですからある。

このことが広汎に気づかれるのは、いつごろのことだろうか。すでに「時すでに遅し」なのに、もっともっと「時すでに遅し」になるのにもかかわらず、である。

Ⅱ. 人間圏 地球システムの物質循環のコントロール

現生人類のありようを地球史的視野から、興味深く説明する。私がコメントする余地はなく、まさに学ばせられることばかりだ。要約してみると、おおよそ以下ようになる。

現生人類は、ネアンデルタール人などとは異なっている。現生人類の女性が、それまでの人類と異なって、生殖年齢を過ぎて生き続けるようになったことなどもあって、数万年前までは共存した二種の人類の一方である現生人類は、爆発的に人口を増やし、繁栄したとのことだ。

そして、「生物圏内部の物質・エネルギー循環を利用する生き方」である狩猟採集の生き方を、一万年前ごろから、「地球システムの物質・エネルギー循環を利用する生き方」である「農耕牧畜」の生き方へと移し、「地球システム論的には、生物圏から分化し、新たに人間圏という構成要素をつくらせて生きはじめ」たという。

それは「生物圏のなかに閉じた種のひとつという存在ではなく、構成要素のひとつとして地球システムと直接かかわり、それに影響を及ぼす存在となった」ということである。

こうした移行自体、地球環境問題など、「地球システムの物質・エネルギー循環に擾乱をもたらす」ということなのである。

そしてさらに、「地球システムの駆動力に依存する段階」を越えて、「人間圏内部に駆動力をもつ段階」にいたった。それは、「我々はその欲望に応じて、地球システムの物質循環を自在にコントロールできる」、「我々の欲望に上限がなければ、地球システムから人間圏への物質の流入量に上限がない」ありようにいたっているのだ。

近年の人類の状況、現生人類の文明とは、そのようなものなのだ。つまり、地球をほしいままに搾取・収奪する存在として、現生人類が描かれる。

このように、今日の人類のありようを地球史的に把握している点で、大変興味深い。こうしたありようそのも

のが、もはや地球システムのサステナビリティを破壊しているということになる。

Ⅲ. 右肩上がりから右肩下がりへ

私は、1990年代から、繰り返し、今日は「右肩下がり」「縮小」が求められる時代だといひ、人々の暮らしをそのようなものへと切り換える必要があることを語ってきた。そして、自分自身の生き方もその方向に切り換えて進んできた。

そのことを、この本は地球規模の視点から、大変わかりやすく説明している。たとえば、以下のように、

「20世紀は、人間圏がまだ、地球システムのなかで制約条件なしに拡大できるという、特殊な境界条件のもとにあった。それは、農耕牧畜の選択により生物圏から人間圏が分化して以来、地球システムのなかで、右肩上がりで拡大を続けることが可能な、最後の世紀であったのだ。」 P19

「右肩上がりで拡大を続ける人間圏は20世紀で終了した。しかしその誕生以来続く右肩上がりの信仰の慣性は大きく、容易にその方向を転換しえない。二一世紀はその矛盾が露呈し、それらの共同幻想に基づく人間圏の内部システムが崩壊する最初の世紀だろう。」 P19

「右肩上がりではなく、水平あるいは若干の右肩下がりでない、地球システムと調和的な人間圏は設計できない。構造改革とは本来、人間圏の内部システム(社会の仕組み)をこのように変えるためでなければならない。」 P23

私の認識でいえば、この境界は20世紀から21世紀への移り目ではなく、さらに数十年早くすべきだったと思う。そして、「水平」ではなく、「右肩下がり」にするのは当然であるし、それも「若干」ではなく「かなり」のものにすべきだと思う。

松井本の各所にみられる分析は、そのことを要求していると思う。その意味では、松井本は「楽観的すぎる」といえるかもしれない。

「人間圏が100年存在するとは、地球システムの、他の構成要素の存在期間に換算すると1000万年、一万年存在するとは、10億年存在することに匹敵するのである。このように比較すれば、我々の存在が地球環境問題、あるいは地球に汚染をもたらす理由も、納得がいくだろう。汚染とは、地球システムに人間圏という新しい構成要素ができたために、地球システムの物質やエネルギーの流れが変わった結果なのである。豊さとはそういうことなのだ。」 P28

「これまでと同様の発想で右肩上がりの豊さを求めて人間圏を営むとすれば、人間圏の存在時間は100年ほどだろうと考えられる」 P29

人類が持続可能であるためには、こうした認識をいかに人類が共有し、行動に移せるかにかかっている。つまり「かなりの右肩下がり」を実行していく必要がある。

にもかかわらず、いまだに「景気回復」「経済成長」を話題にしている、世の中の情報交換のありようの異常さが問われなくてはならない。

IV. 「人間圏の存続時間あと100年」にどう答えるのか

上で紹介したように、「これまでと同様の発想で右肩上がりの豊さを求めて人間圏を営むとすれば、人間圏の存続時間は100年ほどだろう」という予測。

きわめて重大かつ深刻な問題提起だ。100年といえば、3～4世代後のことだ。そして、それに向けての予兆時期があるだろうが、それはすでに始まっていると私は思う。いくら「鈍感」な人でも、私達の子や孫の世代は、この問題に現実感を帯びてくるだろう。

それへの回答は大きく分けて二つの選択肢となる。

一つは、「右肩上がりという共同幻想から逃れられず、従っていずれ地球システムから人間圏へ流入する物質・エネルギーが不足する事態に直面すれば、それらの必要物資の調達を、地球規模から太陽系規模へと拡大せざるをえなくなる」P22と書かかれているものだ。そして「さらに続ければ、次の段階の文明は銀河系文明ということになる」という具合に続く。

この選択肢にはいくつかの重大な問題がつきまとう。

まずは、そんなことが可能なかどうか、という問い、あるいは可能だとしても、100年でそうしたことを可能にするほどの「科学技術」が生まれるのか。もし可能だとしたら、それにつきまとう「危険」の回避ができるのか。「想定外」の「危険」があるのではないか。

また、人間文明と異なる文明との衝突はないのか。それまた、これまでのように、人間による他のものの「征服」「使い捨て=収奪」によって解決しようとするのか。そこには倫理的問題も含まれてくる。

もう一つの選択肢は、前にも紹介したが、「右肩上がり」ではなく「水平あるいは若干の右肩上がり」という道を歩むことと書かれていることにある。それについての私のコメントはすでに書いた。

このことについての著者の別の個所での説明を紹介しよう。

「時間を早める生き方をどのようにスローにするかという問題であり、我々とは何かをチキウ学的に追求すること（チキウ学的人間論の構築）である。つまり、人間中心主義的な考えではなく、地球システムと調和した人間圏を追求することである。

それは、あるいはレンタルの思想の追求といってもよい。（中略）現代とは、個人があらゆるものを所有することを求める時代ともいえる。このアンチテーゼがレンタルである。

我々は自分の身体ですら自分の所有物のように思っている。しかし、それは生きている間、地球から借りている（レンタルしている）にすぎない。」P37

私は後者の選択肢をとる。

そして、後者の選択肢を現実化するためにこそ、「科学技術」は必要だと思う。それには、強烈的な倫理意識のもとづく必要がある。それは、自然、つまり地球システムに即した生き方——自然の生き方——の再創造という課題だともいえる。

そうした「右肩下がり」の道を「自然の生き方」へと進んでいくための「科学技術」、なによりも生き方の創造が、ここ100年の焦点的課題ではないか。

100年という短期間での「人類絶滅」に近い事態を追求するのか、それとも人類発生以来の数百万年と同じくらい維持していくのか、少なくとも現生人類発生以来の10数万年ぐらひは維持していきたいのではなからう

か。

にもかかわらず、そうしたことは異常に遅れている。政治や経済の分野では、ほぼ不在とさえいえよう。「拡大」「上昇」が「生活習慣病」になっている。いまだに「景気回復」がテーマになっていることがそれを象徴している。

その「生活習慣病」から脱けだして、従来の概念での経済では、「縮小」に向かう道の創造、それは地球・自然とともに歩む道であり、私にとってはそれこそが豊かな道だと思うが、その道を追求創造していかなくてはならない。

瀧井宏臣『農のある人生』を読む (2009年2月16日～)

1. 「農業体験農園」

ここ2ヶ月あまりの読書生活の一つのテーマは、「地域起こし」「人生起こし」と「農」だ。その読書ラッシュも、まもなく区切りがつきそうだ。あと一ヶ月もすれば、私なりのイメージがでてきそうな気配がする。この本も、そうしたテーマにぴったりなので、店頭で購入したものだ。

副題は「ベランダ農園から定年帰農まで」とあるように、さまざまな「農のある人生」を、各章ごとに焦点をしばって、6章書いている。中公新書で2007年刊行だ。

この本は、自分自身がどういう「農のある人生」をつくろうとするか、という関心から読む人が多いだろう。それだけでない。現に農を職業としている人、あるいは農業地域が、「地域起こし」「仕事起こし」をしていくために、「農のある人生」を求めている人たちにどういうメッセージを送り、どういう行動を起こしたらいいかアドバイスするという角度からも読める。

第一章の「農業体験農園」は、「市民・農家・行政、三方一両損ならぬ三方一両得の取り組み」の紹介だ。

「農業体験農園というのは、市民が農家の指導を受けながら種蒔きから収穫までの農作業をトータルに体験できる農園のことだ。」

東京都の練馬区の例を参考にして書かれているが、練馬区・東京都・国の補助金も活用されている。「練馬区にとっても、従来型の市民農園に比べて管理運営面での負担が少なく、農業に対する市民の理解もえられるのでメリットは大きい」とのことだ。

そして「農家にとっても、市民からの入園料や収穫物代金と区からの補助によって経営が安定するだけでなく、農作業を多くの市民が分担してやってくれるわけだから、手間や時間を省き、新たな事業展開をはかることができる。」ということだ。

先日、宇共同作業(草苺)の折に、現在は耕作されていない、元畑があった。だれかが、「市民農園にでもすればいいんじゃないの」といっていた。

このあたりには、そういう畑地が結構ありそうだ。そういう土地を、市民農園とか、この章にある「農業体験農園」にするのも、一つの有効なアイデアのように思う。

それに、那覇や浦添などから週末ドライブにくる人なども多い。そんな人をターゲットに開設してみたら、と思う。南城市内にも、そういうものを希望する人は結構いるように思う。リピーターになっている観光客のなか

には、滞在型になり、こうした農園企画にのってきそうな人もいるかと思う。

2. クラインガルテン 週末農民

第二章は、多様な市民農園、そしてその一つであるクラインガルテンを紹介している。

今や広く普及している市民農園には、いくつかの形があり、自治体が開設するものが多いが、その他、JA、農家自身、企業・NPOなどが開いている。南城市でも開設する条件はいっぱいあるように思う。関係者のご検討を期待したい。

クラインガルテンは、ドイツ語で小さな庭という意味だが、「村起こし」として、その取り組みを長年にわたってすすめてきた長野県の旧四賀村の例が出されている。農園には、滞在可能な宿泊施設も付設しており、都市からの希望者が殺到しているようだ。

第三章「週末農民」は、千葉県の手賀田オーナーシステムなどを紹介している。週末に都市から手賀田の稲づくりにくるのだ。無論、専門農家が指導する。

いろいろな形の農業へのかかわりがあり、ここ10年あまりで急激に広がっているようだ。

3. 半農半X 団塊帰農 企業センス農業の問題

第4章は、塩見直紀さんが提唱した「半農半X」についての事例紹介だ。半農半ヘルパー、半農半陶、半農半歌手、半農半デザイナー、半農半著など。私がもう少し農業に時間を注ぐと、半農半フリー（著、研）になるだろう。

週2～3日に勤務し、他は農業を含めた自給自足生活に勤しむという提案は、別のところでも読んだ。こうしたありようは、これからの大きな流れになってほしいものだ。次の塩見さんの言葉は、印象的だ。

「老後感覚、隠居感覚で定年退職後に田舎暮らしを楽しむ元企業戦士たちも多く、反農半年金などという人もいますが、ぼくの意図しているものとは全く違います。半農半Xは、小さな農にこだわりつつ、自分の独自性を活かし、オンリーワンの仕事をするすることで、自分を社会に役立てる生き方のことです。」

第5章に紹介される例には、対照されるありようが多いだけに、注目される。私の場合は、両者の要素が含まれるのだが、どちらかというところ、半農半Xの方に近いだろう。

第5章は、「団塊帰農」である。個人としてだけでなく、組織としての展開事例も紹介されている。そのなかでの注目点をいくつか紹介しよう。

一つは、山本一典さんの「移住して農業をやるような人は自分の人生を創ろうとして来るわけですから、自分のスタイルにこだわり、まわりが見えない人が多い。一方、田舎は生活共同体ですから、どうしても地元の人たちとぶつかり、撤退せざるをえないケースもでてきます。」と述べていること。

そうだと思う。それは農業をする人には限らない。移住者一般にいえることだ。だから、私は「沖縄田舎暮らし」の副題を、「自然・人々とつながる人生創造」としたのだ。自然とつながることだけ、あるいは景観・気候にだけつながってだけで、移住しようという人が結構多いのだ。

そういう人には、都市生活習慣をそのまま田舎に持ち込む人が多い。「コンビニがないなんて」ということで、移住生活を断念する、という話を聞いたことがある。コンビニ使用が月に一回あるかなしかの私などは、「コンビ

ニがないからいいんじゃないの」と思ってしまう。

こういう方は、企業センスに優れているかもしれない。そうした角度から農業をするなら、いわば株式会社の農業だろう。しかし、現実の田舎での農業は、そういうものは滅多にない。政府の農政はこの方向に向かっているようだが、現実の農業の大勢はそうになっていない。私の周辺では、そういう例は見ない。多少は企業センスが必要だとは思うが。

それにしても、企業センスとは異なる農業がこれまで続いてきたし、これからもそうだろう。そしてそのほうがいいのかもしれないとさえ思う。

4. 「生き方の転換」としての、「農のある人生」

5章の最後あたりに、帰農を支援する「JA甘楽富岡」「NPO法人ふるさと回帰支援センター」「飯山市ふるさと回帰支援センター」などの事例が出てくる。たとえば、「NPO法人ふるさと回帰支援センター」が提示するのは、こういう手順だ。

「まず短期のツアーやイベントで都市住民と農村との交流をはかり、次の長期滞在する機会をつくり、最後に移住や二地域居住へとステップを踏んで到達できるしくみの構築を進めている」

また、「飯山市ふるさと回帰支援センター」では、「飯山まなび塾」「百姓塾」「ふるさとへの出発点」（農家民宿に長期滞在して農作業）「セミナー事業」という四つのメニューを用意している。

しかし、都市の金銭感覚で定年帰農を実現することは大変難しい。年間売り上げ一千万円、所得五百万円という平均的農家が農業だけで食べていく目安が示されるが、その実現は並大抵ではない。だから、「年金プラス年間百万円の所得で楽しく暮らす」というライフスタイルが提起される。といっても、沖縄ではそれまで農業をしてこなかった人が、このレベルにまで達するのは大変難しい。専業農家でさえ、そのレベルに達することがたやすくはないからだ。

とはいえ、「生き方の転換」として、「農のある人生」を選びとることは、重要な意味をもつ。それは都市の金銭感覚から距離を置いて、「地球にやさしく」「自分の人生にやさしい」方向へと、「生き方」を転換させることだからだ。

この本にも、「ふるさと回帰の運動は、日本という国が持続可能な国となるためのラストチャンスだと考えています」という言葉が紹介されている。

そして、「第6章市民皆農の時代」では、「自然生態系農業の里づくり」「一坪菜園運動」などを展開して、地域起こしで著名になった宮崎県綾町の事例が紹介される。そして、末尾には、次のように書かれる。

「かつての国民皆農は自分や家族を飢餓から守り、何とか生き永らえることが目的だったが、新しい市民皆農は市民自らがいきいきと生き、豊かな暮らしを取り戻すことが主眼となる。」

先に紹介した松井本によれば、農業でさえ地球システムを破壊する営みにつながるのだが、それでも、農業を重視し、さらに地球に「よりやさしい」方向を志向する農業を展開することが、地球と人間にとっても、大きな方向転換になるだろうし、また、人々の「生き方転換」の重要なターニングポイントになりうるだろう。

地球と人類が一挙に持続可能なレベルへと転換することは、今日の時点ではとてつもない無理があるといえようが、少しでもその方向へと、人々の生き方を転換していくことが、少なくとも必要だといえよう。

そうした方向を模索するうえで、この本はいくつものヒントを与えている。私のいう「地球起こし」「地域起こし」「人生起こし」に深く結びついているからだ。

退職できる条件があるのに、退職できない人生後半期の人 (2009年4月7日)

私が退職したのは56歳だった。田舎暮らしで、お金を使うことが少ない生活をすればやっていけるという計算があった。つまり、退職できる条件があった。そして、他の大学に移るわけでもなく「田舎暮らし」で「人生創造」するのだと明言し、退職後実際そうした。

ところが、同僚をはじめ、周りの人たちはなかなか信じなかった。他の大学に移るための「口実」だろうというのだ。退職し、「二人で月10万円で暮らせる町・村」のテレビ番組にでたころから、「浅野は、言う通りのことをしている」と信じてもらえるようになった。

そして、会う人に「うらやましい」といわれる。お金の心配をしなくてもいい同世代以上の人たちだ。「じゃあ、あなたなりにやってみたら」と言葉を返す。すると、言葉につまる。そして、「大学教員以外の仕事は考えられない」という。大学教員の仕事にさんざん愚痴をこぼしているのに、である。

「習慣」で大学教員を続けているのかもしれない。実際、「やめたい」と思いながら、他の生き方・生活の仕方がイメージできないから、やめない、という人に出会ったこともある。

その人がやめれば、もっと若い人が就職できるのになあ、と思う。経営者的に言えば、人件費が安い人、場合によっては二人分雇える。「後進に道をゆずればいいのに」と思う。

でも、どうやら、まさに「習慣」で定年まで働きつづけるようだ。それは、大きな組織・流れのなかで生きる生き方しかイメージしたことがないためのようだ。

「自分の人生を自分でつくる」というのではなく、「組織・流れ」に入って、そのままに生きるという感じだ。そういう人は、退職後、残念ながら「濡れ落ち葉」的生き方、「しばんでしまう」生き方になりやすい。自分の権威が「組織」にもとづいて成立していたことに気づいて、まわりには誰もいなくなっていることに気づくという例も結構あるようだ。

退職というのは、いやおうなしに、「自分の人生を自分でつくる」ことに移行させる。とすれば、退職数年以上前から、退職後の次のステージを考え、準備しておくことが大切になる。

退職できる条件があるのに、退職できない人には、別のタイプがある。「私でなきゃやれないのだ」「他の人にはまかせられないのだ」というタイプだ。そうした姿勢は、他の人たちに、その人への依存体質を生み出す。無意識のうちに「ワンマン」体質化してしまう。結果的に、「若い人」を育てられず、ずっと続けてしまい、「若い」人に愚痴をこぼしつづけることになる。自分の問題なのに、若い人の問題にしてしまうのは、その弊害だろう。

私は、人生後半期の方は、次の自分の人生を自分でつくっていく営みに、できる限り早くかかわることが不可欠だと思うのだ。

忙しく働く人と仕事がない人の二極分化 大学教員の例 (2009年4月7日)

失業率上昇が話題になっている。対極的に忙しく働く人がいる。その人たちのなかには、ストレス過剰で、精神的身体的に黄信号赤信号がともっている人がかなりいる。

この二極化のおかしさが問題にされない。雇用問題が話題にされるが、他方で働きすぎ人間が大量につくられているおかしさだ。

働きすぎの人に焦点を絞ってみよう。とくに大学教員に焦点をあててみよう。

大学改革の嵐が吹き荒れはじめた90年代以降、大学教員はとても忙しくなっている。ここ数年、さらにそれに輪をかけているようだ。一つは担当授業コマ数がすごく増えている。倍になっている大学・学部も結構多い。高校教員と比較してみよう。高校教員は教える科目は基本的に一つの教科で、同じ内容を生徒に合わせて工夫しながら教える。ところが、大学教員は授業が違えば科目も異なる場合が多い。だから、7コマ教えるとするば、7コマ分の授業内容づくりをしなくてはならない。高校教員に換算すると週14時間の授業を7種類教えることになる。

加えて、近年では、事務的業務がかなりの量になっている。それに、研究活動がある。研究は夏休みだけと決め込む人もいる。しかし、研究業績量も評価され、そういうわけにはいかない。

こうしたことにすべて対応するとすれば、過労死に至りやすい年間3000時間以上の労働に追い込まれるレベルにある人が結構いる。

その対極の一つに、非常勤講師がいる。生活に必要なだけ、非常勤の授業を担当するとすれば、10コマ~20コマという人間ワザをこえた数やらないとならない。それに、予算削減を、非常勤講師の授業を縮小することで解決しようとする大学が結構多い。それは非常勤講師の方々の生活を直撃している。

対極のもう一つに、大学教員予備軍の人たちがいる。大学教員の仕事がこれだけ忙しくなっているなら、数を増やせばいい。そして、予備軍の人たちを採用すればいい。しかし、オーバードクターの数が年々累積していつている。40年あまり前からオーバードクターの問題がいわれているが、その数が、いまや桁が一つか二つ多いレベルなのだ。

この忙しさに対してどうするか、単純なことは仕事量を減らすことだ。しかし、その方向への改善はほとんど進んでいないのが、日本の実情だ。その結果、忙しい人がますます忙しくなるという事態、その結果身体的精神的不調に陥る人が激増している。小中高校教員だけでなく、いまや大学教員もそうなってきた。

そして、このことに対して「ノー」という当事者が余りにもすくない。この繁忙さをひきうけてしまうのが、私には信じられない。私自身もかつてはワーカーホリックだったが、もともと身体が弱い私は、何回かパニックに陥って、周りにも迷惑をかけてきた。だから、黄信号がでたら、できる限り早く対応して、仕事量を減らす作戦にできるようにしてきた。

組織とか流れにのっているから、そんな風にできない、しにくいと言う人が多い。だからこそ、組織とか流れもそのように変える方向を提案しながら、自分の仕事量も減らすような提案と行動をしていくことが大切だ。そういう声と行動がたくさん出てこない、事態はますます悪化するだろう。

モーレツ起業家の「働き方革命」 (2009年8月7日)

駒崎弘樹「働き方革命」(ちくま新書2009年)を読む。店頭で見つけた本だ。まだ20代の若い方が、こうしたタイトルで書いているのに魅かれたのだ。

彼は、学生時代から起業し、今はNPO代表をつとめている。何人もの人が、そのNPOで働くことで生活しているので、私近辺のNPOとはわけが違う。その前は、自ら起業したIT関連の会社社長をしておられたが、そんな雰囲気NPOだ。とにかく、よく働く。残業が常習化していて、東京のフツの会社と同じ雰囲気だ。違うのは、どんどん「改善」をすすめていくところだろう。このモーレツぶりに最初は圧倒される。

そして、アメリカに行って、ある人と出会ってから、6時に退社する、家事を分担する、姉妹や親との付き合いをするなどをふくめて、「働き方革命」をする。

その際、仕事量、労働量を減らしたわけではない。時間管理、会議の持ち方など、仕事を合理化して、6時までの退社を実現する。

そんなわけだから、ビジネスの世界の人には、格好の手引書になるのだろう。彼は政府のこの関連の委員まで勤め、その会議模様が本書冒頭にでてくる。

だから、スローライフ型の「働き方革命」ではない。だから、いまの私とはずいぶん距離がある。対照的ですからある。

それでも、なぜか懐かしいものを感じる。というのは、私も、50歳過ぎまで、職種は異なるが、「モーレツ」に働いてきたからだ。彼がしている時間管理とは異なるが、私流の時間管理をして、仕事があまく回る工夫はずっと続けてきた。違うのは、病気がちの私と、モーレツにやっつけていける彼との、体力が異なることだ。しかし、そのかれもスポーツジムで、体力検査で指摘をうけて、びっくりしている。

20~30代のモーレツ型「働き方」は、早晚破綻し、転換が必要となる。実際、20~30代のかかりの人が、こうした世界から、肉体的精神的理由で身を引いている現実がある。

だから、仕事の総量そのものを減らし、経済・経済発展の持続可能ではなく、地球と人生が持続可能な働き方にしていくことが大切だと思う。

「発展拡大」神話にとりつかれている人々

(2009年9月9日)

——この数十年間、あるいは100年以上にわたって、人間社会は「発展拡大」し続けてきた。「右上がり」だ。とくに経済において。——

と思いこんでいる人が通常だ。だから、このことに疑いをもつこと自体が重要だ。しかし、今回は、それを「前提」にして書く。

その「発展拡大」神話が崩れてきていることを、認める人は多い。たとえば、地球温暖化問題で、地球の持続というテーマに取り組むことは、「従来の経済がなお発展拡大し続ける」というとらえ方を問わなければならないと考える人は多い。

にもかかわらず、排出二酸化ガスの大胆な削減は、経済の発展拡大を押しとどめ、景気回復ができず、人々の

暮らしは悪くなると考える人も多い。そこで、科学技術の発展に期待する人も多い。それは、依然として「発展拡大」神話のなかにある。「右上がり」は行き詰まっているが、形を変えて、「右上がり」が続くことを期待するのだ。

私は、すでにかなり以前から、人間社会は、地球維持の限界を超えた活動をしていると考える。そして、そのために、さまざまなブレーキを働かせ、必要なレベルにまで縮小する営みが求められている、と考える。「右上がり」ではなく、「右下がり」を平和的に進めるといってもよい。

だから、少子化社会になっているとあって、「産み育てる」ことを奨励することには違和感を覚える。食糧自給のことが話題になっているが、食糧自給していた時代は、沖縄では19世紀までであった。20世紀になると輸入移入しはじめる。そのころの人口は、50万に満たない。今や130万以上だ。日本全体でもそれに近い状況にあったろう。

とすると、「発展拡大」から、いかにして「縮小」へ、「右上がり」から「右下がり」へ移行して、安定的な環境をつくるのがテーマとなろう。にもかかわらず、こうした思考に全く慣れていない。だから、無意識に「拡大発展」の構図のなかで思考してしまう。

同じことは、命についてもいえる。医療が「発展」して、以前なら信じがたいほどの長寿社会になっている。にもかかわらず、どんどん長寿をめざして、「病」「死」を受け入れがたい「悪」とみなし、それらと闘うことを求める。

そうした考えが根強いだけに、かえって「病」「死」をどのように受け入れていくか、という考えが排除され、当事者はジレンマに陥る。一定の年齢以上になったら、自分の体が「右上がり」から「右下がり」になり、いずれは終息するというを受け入れた構え・考えが求められる。

同様なことは、組織についてもいえる。ある組織が立ち上げられると、もっぱら、「拡大発展」が追求され、その「縮小解散」は語られにくい。その当事者になることは避けられる。そして、結果的に、倒産や瓦解という形で終わりを迎えてしまう。

ところが、皮肉なもので、人生上、「縮小」過程にある、一定の年齢層以上の人が、「社会」「組織」の発展拡大、少なくとも維持を強調し、一定の年齢層以下の人が「白けてしまう」ことが結構多い。

こうしたことが、現在の世代間ズレの背景にあることに注目しなくてはならない。一定の年齢層以上にとっては自明な「右上がり」は、一定の年齢層以下の人にとっては自明ではないのだ。だが、一定の年齢層以下の人たちでも、「右下がり」をどう平和的にすすめていくかということが必ずしもテーマになっていない。無意識に感じているとはいえ。

『子どもの貧困白書』

(2009年12月7日～17日)

1. 一人親家族における貧困問題

子どもの貧困白書編集委員会編「子どもの貧困白書」(明石書店2009年)を読む。大判で350ページ余りのすごい本だ。でも、2800円と大きい割には安価だ。いろいろなところに置いたらいい本だ。

今年の9月発刊されたばかり。まさに「白書」の名にふさわしく、実に多様な角度・場・問題から、子どもの貧困を「白日の下に」さらす本だ。

私自身も初めて知る事実、あるいは、再発見する事実、あるいは捉えなおす事実によく出会った。おそらく「子どもの貧困」に日常的に出会っている人でさえ、こんな事実・捉え方があるのか、と再発見することが多いだろう。

まず一人親家族についてだ。

- ・離別母子世帯では、遺族年金が使えない。

「母子世帯の防貧に重要な役目を持っていた公的年金制度の遺族年金制度の機能が相対的に衰えてきています。」

P 2 0

- ・ダブルワーク、トリプルワーク

「母子世帯は「経済的な貧困」にあえぐだけでなく、「時間の貧困」にもあえいでいる」 P 2 4

こうした状況は世界共通ではないのだ。

- ・「母子世帯の貧困率は66%と突出しています。この数値は、OECD諸国の中でも第2位の高さ」 P 2 1
- ・「就労しているひとり親世帯においても、これほどまでに貧困率が高いのは日本のみです。ほとんどの国において、ひとり親世帯の就労率は40%以下であり、60%に近い日本は特異です。多くの国においては、就労していればひとり親世帯であっても貧困率は10%以下となっています。「ワーキングプア」この言葉は、まさに、日本の母子世帯の状況を表しています。」 P 2 5

2. 一人親家庭の苦労と自己責任論

上で紹介したように、困難な状況にあり、政策的支援が必要となるケースが多い一人親家庭に適切な政策が行われているのだろうか。

- ・2002年母子家庭等自立支援対策大綱「所得保障による支援から就労支援による自立を促進する政策への転換が提起された」 P 3 0

- ・「政策主体の関心が「子どもの貧困の解消」、言い換えれば「子どもの福祉」にあるのではなく、「母親の自助努力」に向けられるもの」 P 3 1

「自己責任」論がはびこるなかで、事態は悪化しているといわなくてはならないようだ。

一人親は、母子だけではない。父子もあるが、あまりにも知られていない。

- ・「男性が養育の主体であることを前提としていない社会では、父子家庭を形成すること自体が困難となり、祖父母と同居ができなければ、児童養護施設に子どもを入所させる等「親子分離型の父子家庭」の選択とならざるをえない場合もある。」 P 3 3

- ・「日本にも父子家庭がいることを知ってほしい」—父子世帯当事者の切実な声である。」 P 3 3

今日の日本は住み分けが進んでいる。多様な家族が混ぜこぜに集落に住んでいるわけではない。新興団地が典型的だが、似た所得・年齢・文化の人たちが集まって住む例が増えている。そのなかでは、自分たちが「普通」

だと考えがちだ。「貧困」状態にない人たちは、「貧困」状態にある人たちの状況がイメージしにくいし、その生活困難を推理できず、「同情」「共感」を持ちにくい。その結果、「貧困」状態は、「本人」たちの努力不足であり、「自己責任」で、その苦境を引き受けるべきだ、という考えに陥りやすい。

病気・事故・倒産・解雇などで、当人がいつ同じような逆境に陥るかもしれない、というのに、だ。その苦境にも対処できる余裕のある人は大変限られているというのに。そして、そんな苦境は、真面目に努力している自分には来ないとでも思いこんでいるかのようだ。

それはひいては、「富裕層」「中間層」の生活のありようをも問いなおすものになる。自分たちの「幸福」は、はたして、自分たちの「努力」だけで得られたのか、と。社会的連帯・共同の希薄さを問わなくてはならない。

しかし、貧困問題を問うときに、こうした問いが希薄だ。なぜだろうか。

3. 女性をめぐる貧困

女性の貧困問題にかかわって、私が再発見したことを続けよう。

・DV被害者支援 女性シェルター利用者の変化 中間層や富裕層の女性から 「施設に保護される女性はよりハンディキャップの多い層へ、より自立が困難な層へとシフトした。」 P 2 3 7

・「女性のホームレスは、男性のような段ボールハウスのイメージとは違って、さまよい転々としていることが多いので発見されにくい。」 P 2 3 8

・「国際的組織犯罪防止条約」の人身売買議定書

「これらの基準では、暴力や威圧で抵抗を奪い、意に反した搾取的労働を強要することが要件とされている。少女たちを暴力や威圧で黙らせて抵抗を封じて売春を強要し、対価は「返済」と称して搾取り、「売春」を恥じる被害者の気持ちにつけ込んで逃げられないようにするという手口は、この定義そのものだ。背景には、親の経済的な貧困や、子どもへの過剰な期待による抑圧や虐待等の精神的な貧困から逃れようとする子どもたちの居場所のなさがある。」 P 2 5 3

次は、女性に限定されないことだが、ここで紹介しておこう。

・「子どもの年齢が小さいほど貧困率が高い」

「比較的小さい子どもを抱えている若い親の雇用情勢が悪化しているから」 P 2 2

・「子どもの貧困率に大きく関係しているのは、子ども自身の年齢というよりも、親の年齢と考えられます。」

「若い父親を持つ子どもの貧困リスクが高い」 P 2 3

このような困難な事態を示すだけでなく、困難のなかではあるが、次のように前向きの事態に向き合っていく例も紹介されている。

・10代出産。出産希望者の増加。「新しい命を誕生させることで、意図せずとも原家族の力動を変え、子育てをとおして親との出会い直し・家族の再構築をもたらす例が少なくなかった。」 P 2 4 9

・「産みたいあなたへ」という冊子 「これは支援される側と見られていた10代のママさんたちが、自分たちの妊娠からお産までを振り返り、これから出産する10代に向けて「あなたは孤独じゃないよ」というエールを届けたいという願いが形になったものだ。」 P 2 4 9

4. 教育費と家計

以下の事情は、多くの人を持っている事情だが、意外に知られていない。それだからこそ、「子どもの教育」のために、ということで、個人的に、「自己責任」論をもって奮闘する親が多い。

・「国民金融公庫の教育ローンを借用している世帯で、小学生以上の子ども全員にかかる在学費用をみますと、年収200～400万円の層では実に家計の55.6%（400～600万円層で33.8%、600万円以上層では25.9%）が教育に関わる費用に占められています。」P39

・「18歳未満の子どもがいる世帯の収入はここ11年間下がり続け、その平均値は1996年から2007年までで90万2000円の減となっている。（中略）大きく増えたのは300～350万円を中心に200～450万円未満の収入階層である。」P215

・「阿倍彩氏は貧困を「相対的剥奪」という視点でとらえた場合、境目となるのは年収400～500万円であろう、と推測」P217

・「正規雇用置き換えられて急増した派遣等の非正規は、フルタイムの比率が高くその賃金は家計収入の中心であることが多い。「主婦パート」の従来のイメージとことなり、こうした「フルタイム・自立生活型」の非正規が急増して正規雇用置き換わったのである。ちなみに、2008年秋からの「非正規切り」は、主としてこれらのフルタイム・自立生活型非正規雇用を対象としたものであった。」P218

この境目の400～500万円ということは、沖縄では半数、ないしは半数以上が該当する。個々の家族の問題をはるかに超えて、沖縄全体の構造的な問題なのであり、それを打開する「県民運動」的なものさえ必要になるだろう。そして、それは沖縄に限定されずに、多くの地域が該当していくだろう。

その際、次の指摘にも注目したい。

・「新自由主義の言説は、社会の成員を分断（私事化）し、特定の集団を排除（他者化）し、現実の様相を隠蔽（換算化）する言語なのだと言っている。」P62

・「「子どもの貧困」という問題は、単にそれが子どもの「自己責任」ではないという意味で「自己責任論」を免れる問題であるばかりではなく、子どもの養育者に責任を還元したところで問題が改善されるわけではないという意味で、「自己責任論」そのものを根底的に問い返す意味をもった問題なのだと言っている。」P63

しかし、こうした問題に対応すべき政策は、逆向きになっている。

・「日本が、OECD諸国の中で、唯一、再分配後の貧困率が再分配前の貧困率を上まわっている国である」「政府の「再分配」によって、子どもの貧困率は悪化」P26

5. 若者の経済的困難と高校

1970年代から1980年代にかけて、「一億総中流」という言葉が流行ったが、当時から、実態とはかけ離れていた。しかし、経済的な豊かさをエンジョイし、「一億総中流」を信じる人が多くいたことも確かだ。

それを基盤にして、「標準的な生き方」＝「ルール型」人生を歩まなくてはならない、と考える人が多かった。親も学校も、多くがその方向をおすすめしてきた。現在も、50代以上の人には、そのことを無意識にもって発

言する人は多い。そして、現在の40代、30代にしても、それに囚われている人は多い。

だが、「一億総中流」にとってかわって、「格差社会」的イメージが2000年以降ひろがっていく。それは、「一億総中流」を支えた企業社会の繁栄が、90年代以降、非正規雇用を激増させたことに象徴されるように、「下層」を犠牲にすることで、「継続」させられてきたからだ。

そして、その「下層」がどんどんふくらませられ、経済的な将来展望を築けない若者を拡大させた。すでに80年代にあっても数%以上の若者がそうであったが、いまや半数前後の若者がそうした事態のなかに組み込まれている。そのなかで、日々の生活さえ困難である若者たちが大量に出現している。

そうした困難にある若者を、一時的にしる支えられる親の層が、50代以上にはまだ一定程度存在するが、現在の40代半ば以下には、そうした層はやせ衰えている。

「ルール型標準」では当然とされる大学・専門学校進学を可能にする資力のある親は激減し、高校進学さえ経済的に支えられない親が激増しているのだ。

そうしたことの中で、次のような事態が出てきた。

・「2009年3月27日、大阪府内で、公立の定時制高校の志願者が急増し、167人という前代未聞の大量の不合格者が出た。(中略)教育のセーフティネットである定時制が、狭き門になっているというゆゆしき事態が各地で起きている。」P106

・「2008年の中学新卒者数は1996年と比較すると約35万人減少しているにもかかわらず、定時制高校への中学校新卒志願者数は96年より増え続けている。そのため定時制への新卒志願率2.39%となり」P109

・「定時制を卒業して15年目の同窓会を開いてみたら、多くの卒業生が病に伏していた、多くの卒業生が生活保護を受けていた。」P111

そうした経済的困難に直面する若者にとって、経済的困難を補うものとして人間関係があるが、それさえ危うい状況にある。

・現場の高校教員からは中退者の多い高校は、「シェルター(避難所)的存在」という指摘があった。家庭が崩壊し、地域とのつながりもない中、友だちに会える学校に来る。だからこそ友人関係がこじれたら中退する。」P104

6. 大学進学と経済力

10年前盛んに行われた大学サバイバル論議のなかで、大学進学希望者数が入学定員数を下回るのは、少子化で18歳人口が減るというだけでなく、子どもを大学進学させられる親の経済力低下問題でもあると私は予測し、問題を投げかけてきた。それは、当時の30代の経済力を見てのことだった、彼らの子どもは、いまや18歳になりつつあるが、まさにそうした状況を示しつつある。

・「私立大学新入生の家計負担調査2008年」

「仕送り額から家賃額を引いた生活費は3万6000円で、1996年の6万8000円からほぼ半減し、日額1200円となっている。」P256

・「全国大学生協連調査」

「仕送りゼロの下宿大学生が8.3%、1か月の食費は30年間で最低の2万4430円となった」P256

そして、10年前に30代であった1960~70年代生まれの親の子どもたちについて、次のような指摘がなされている。

・「子どもたちの半数近くが今、『高校は卒業するけれども、大学・短大には進学しようとは思わない』という考えをもっているという現実がある。日本の高等教育進学率は55.3%（2008年度）と世界的に見ても有数の高水準になっているが、この水準は平成の少子化世代の大学進学意欲が高まらないため、もはや拡大することはないと予測されている。」P48

私は下がっていく可能性さえ強いと思う。その理由は、親の経済力低下の中で、奨学金に頼り、将来の返済を子ども自身が行う必要が高まってきているからでもある。しかし、その奨学金も次のような状況にある。

・「日本においては、高等教育の学費が高いにもかかわらず、奨学金を受ける学生の割合が低い、というきわめて特殊な国である」

「奨学金の内訳をみると、日本においてはほとんどが「学生ローン」ですが、他国では無償の供与が多い割合となっています。」P29

そして、現に奨学金返済に困る卒業生が激増している。

その大学進学は、世代の中の分断線を作るといふ、次のような指摘がある。

・「日本のように、大卒か非大卒かという分断線が社会の中央部分を切り分けている社会は、韓国やカナダのほかにはないという事実である。むしろ学歴の分布が上・中・下の3類型で構成される国が一般的である。」

「これらの社会にあっては中卒相当（義務教育終了）という学歴は必ずしもごく少数というわけではなく、下層には位置づけられるけれども何らかの社会的役割を受けもっているのである。これらの国と比較して考えると、日本の中卒層が学歴の上下の序列でも、数の上でもマイノリティに追いやられている状況がいかにも特殊なものであるかがわかる。」P49

カナダは、日本よりはるかに福祉国家的である。その意味で、韓国とならんで日本は、今後深刻な事態が出現しそうだ。

親の経済力低下により、全日制高校進学困難になる例については、前回紹介した。そして、大学・専門学校進学困難の事例が、ここ数年、急激に表面化してきている。大学サバイバルは深刻、というよりも現実問題となり、一般化さえしていくだろう。そして、奨学金返済不能の卒業生も激増するであろう。現在の政策が続く限りは、ではあるが。

7. 経済上の貧困と人間関係上の貧困

貧困を考える際、経済上の貧困、人間関係上の貧困、文化上の貧困を視野に入れる必要がある。ここでは、経済上の貧困、人間関係上の貧困について考えたい。

かつては、「お金はないけど、人間関係が豊かだ」ということが広く見られたが、金銭をもとに商品購入によって生活が支えられる程度が深刻なほどにまで進行する社会にあっては、この両者の関係は深い。人間関係さえ経済によって支えられる様相を呈する。人間関係が豊かと思われがちな沖縄でも、その傾向は強まっている。

本書では、こんな指摘が登場する。

・「特別な支援が必要な子ども」と「社会性を身につけられない若者」は、地続きであることが理解されなければならない。」 P 231

・「人間関係をつくるのが苦手な生徒」「そういう生徒は販売や接客には向かないと自覚しているので、県外の製造業に応募する。ところが不採用になる。「明るくない」というのがその理由である。(中略)人間関係をつくる生徒が落とされる理由はもう一つある。製造の工場にはパートの従業員が多く働いている。正社員は年配のパート従業員のリーダーとしての役割を課せられているからである。」 P 271

貧困克服には、経済対策だけではなく、人間関係の豊かさを築き上げていく必要がある。

その際、両者が単に関係が深いというだけではなく、経済的豊かさが、人間関係の豊かさを破壊することもある、という視点が必要だ。

金銭・商品過剰依存は、人間関係さえ金銭に従属させるだけでなく、人間関係を少なくし、孤立を進行させる傾向を持つ。その意味で、金銭・商品万能の社会のありよう、そうした生き方の克服をも視野にいれる必要がある。

経済的貧困に焦点をあてる本書にも、今後そうした視野が期待される。

8. 「迫られる自立像の転換」 中西の指摘

以上紹介してきたこととも関連して、本書のなかで、中西新太郎は「迫られる自立像の転換」を、以下のよう

に提起する。

・「若者イコール「社会的自立を遂げた存在」という前提が今日の日本社会では通用しないこと、経済的自立も生活上の自立も現代社会の青年層にとってはきわめて困難な課題となっており、自立の像と基準とを組み替えないかぎり、若者はいつまでも社会人としては扱われず、「子ども」に閉じ込められることになる。」 P 257

・「ワーキングプア水準におかれた青年労働者の増大は、必然的に離家を遅らせ、未婚率を押し上げることになる。30代前半男性の半数が未婚にとどまる事態は、生活上の自立が従来のしかたではとらえられないこと、またそうすべきではないことを示している。」 P 258

・「「働き方の貧困」は自立を阻害する（働き方の貧困には低処遇のみならず、社会的孤立・精神的困難といった要素も含めて考えるべきである。貧困現象は複合的な形で現れ、若年層ではとりわけ孤立やうつ状態等の精神的困難が鋭く出現している）。

これは、勤勉でないこと努力しないことが貧困をもたらすという偏見に満ちた通念とは逆の事態である。働いても働いても、ますます自立から遠ざかってしまうのである。」 P 258

・「アルバイトの延長線上で高卒後の仕事を決めるような「キャリア形成」は、進路指導が想定する職業的自立からかけ離れているが、そうした「選択」は貧困の中で何とかやってゆかねばならない子どもたちにとっては自然

の成り行きである。」 P 258

・「学校から社会への移行過程に貧困問題がくい込んで移行の困難が広がるとともに、職業的社会化の正統と見なされる経路とは異なる、もう一つの経路が出現しているといえよう。」 P 259

鋭い指摘の連続である。

こうした議論に、小さい形ではあるが、これまで私なりに参加してきた。「ルール型」「ストレター型」「トコロテン型」などといろいろな表現を使用してきたが、1960年代に形成され、1970～80年代にすべての子どもたちを覆ったかのようにみられる秩序の部分的限定、ないしは崩壊が1990年代にはいつて表面化してくる。

この秩序がなかなか一般化しなかった沖縄でも、1980年代後半から、教育界・親を圧倒していく。しかし、そうでない生き方が事実として広く存在してきた。

こうしたなかで、従来の「標準型」とは異なるものを、どのように把握・提起していくのか、それが課題となっている。

9. 学校と子どもの貧困

本書の最後に「文献紹介『子どもの貧困』を読む」があるが、私が未読の興味深いものがいくつかある。その一つは、次である。

・「久富は、貧困問題が教育にとっての外在的な問題であり、学校教育はその被害者であるかのような論調を退け、むしろ学校制度こそが世代を超えた貧困の再生産を中心的に担っている事実を指摘する。」 P 348

同感である。8の記事でも書いたが、子どもに「ルール型」生き方を与え、もっぱらそれに乗ることのみ求め、それに乗らないことは問題だとし、結果的に、そうした子どもたちのあきらめを作りだし、さらに結果的に排除してきたのは学校だ。そのあり方を、いかに変えていくかが課題なのだ。

その課題にかかわって、次の紹介は興味深い。

・「本田が貧困状態にある子どもの「不器用さ」に対する教育可能性を重視し、学校教育を通じて専門性を身につけさせることによって、社会に適応することも視野に入れるべきであると唱えるのに対し、河添は「不器用」な者に「器用さ」を要請することによって、その流れに乗れない「不器用」な者が排除されてしまう危険性を懸念する。河添はむしろ「不器用」な者を受けとめてきた受け皿が減少している現代の社会状況こそが主要な問題であるとして、たとえ「不器用」であっても生きられる社会の必要性をあくまでも訴えるのである。」 P 349

双方とも理がある。両者をどのようにからませて展開していくか、そこが今後の論議の焦点なのだ。

10. 「貧困」に立ち向かう共同の取り組み

こうした「貧困」に立ち向かうには、政策的な措置を要求していくことなどさまざまな営みが必要だが、興味深い実践が、次のようにいくつか紹介されている。

・小学校3年生 算数の問題を作らせる

「ぼくのお父さんは、家を建てる仕事をしています。朝5時に出て、夜11時ぐらいに帰ってきます。1日何時間働いているでしょう。1か月26日働くと、何時間働きますか？」 P 82

・「ホームレス問題の授業づくり全国ネット」 p 332

・「アルバイトで労働条件通知書をもらう」 高校実践 P 330

・「児童館で子どものための炊き出し」 P 340

・「生活保護世帯の中3勉強会」 釧路 P 343

「福祉のユニバーサル化」「循環型地域福祉」を追求する実践 「集う場」「暮らす場」「働く場」の創設 P 344

これまで存在していた取り組みスタイルでは気づかない実践が、とくに共同の取り組みが展開されていることが注目される。

こうした問題に取り組む際、制度的対処を求めることと、個々の家族・個人の取り組みという二本に集約されがちだ。学校と家族というのもそうだろう。国家と個人というのもそうだ。

それらとは異なって、多様な人々の交流・共同で実践していくということは、「貧困」問題が、人々が共同して作っている社会・地域・組織の問題でもあるということから考えると、重要なアプローチだと言えよう。

3. 2010～2011年

「ソトコト」初めて買う (2010年2月17日)

「ロハスピーブルのための快適生活マガジン」というキャッチフレーズがついているこの雑誌は、前から気になっていた。しかし、店頭で見かけるぐらいで、手にとって読んだことはなかった。

そこで、先日一冊買ってみた。

大判だが、字が結構小さい。これを読み続けるのは大変だ。見出しだけを見て、溢れる写真を楽しむようにして、ざっと目を通してみた。老眼がそんなにすすんでいるわけではなく、老眼鏡ももっていない。きっと、細かい字を読める若い人を対象にしているんだろうな、と思う。

「ロハス」という言葉が、急に普及してきたようだ。この雑誌は大判170ページで、写真一杯なのに、800円だ。きっと売れているんだろうと推理する。ロハスへの関心の高まりが反映してもいるのだろう。

広告も多いが、ロハスに関わる広告が大半で、本文のなかに広告が溶け込んでいる感じ。大企業の広告が多い。今やロハスはマイナーではなく、メジャーになったようだ。そして、産業化されているのだ。そして、まだ大量生産大量消費とは縁が切れていないような印象だ。

また、都市生活者中心の感じがする。

ざっと、こんな印象だ。目を通しながら、どういうロハスなのか、どういうスローライフなのか、という問いが改めて必要な気もした。

好きなことだったら働き過ぎてもいいか (2010年4月25日)

何人かで、働き過ぎについての会話。

「働き過ぎさせられるのは問題だけど、自分が好きなことを、自分の判断で働き過ぎるのはいいのじゃないか」という発言がでる。

私も長年この発言を否定はしていなかった。

私も働き過ぎていた。しかし、他の人ほど働き過ぎることはできなかった。体力がないからだ。徹夜などすれば、病気になるのは目に見えていた。それでも、自分の体力現実以上に働き過ぎていたことは確かだった。そして、働く中身は、大半が自分が好きなことで、自分の判断であった。たとえば、トロントにいた時、出会うものが何から何まで新鮮で興味深いことだったので、結果的に働き過ぎて、体調を崩した。

そうしたことを、20代から50代半ばまで繰り返していた。自分なりに、仕事量をコントロールしていたつもりだった。しかし、そのコントロールは、自分の体力に不釣り合いの基準だったのだ。そのことにかかなり鮮明に気付いたのは最近だ。

アメリカンスクール・イン・オキナワ校長の時も、自分の体力を考えて、ある量の範囲内で務めることを約束していたのだが、実際は、その倍以上の仕事になり、結果的に体調不良になり、早期退任になった。約束以上の仕事をしないわけにはいかない状況にあったことは確かだが、それを容認してしまった私自身の問題でもある。

そして、ようやくこの1年、仕事量コントロールに成功したというのが実のところだ。

こんな私の経験から言うと、「自分が好きなことを、自分の判断で働き過ぎるのはいいのじゃないか」というのには異議をはさまなくてはならない。それは、私たちの働き方は、社会的なものだし、関係の中にあるものだからだ。いいことだと言っても、自分一人だけのことではなくて、社会的関係的なものだからだ。そこで、社会・関係を変えることが焦点になるのだから、それに取り組むことを主眼にすべきだ、という論がでてくる。

それもそうだが、自分の働き方には、社会や関係だけでなく、自分なりの責任もある。そして、その責任には、現在の自分に対してだけでなく、将来の自己にたいする責任もある。いずれにしても、今日の構造的働き過ぎ状況を克服する課題は、社会レベルだけでなく、自分自身の課題としても存在するのだ。

もう一つ、体力がある人が、自分の経験をもとにして語り行動するという、「強者の論理」がこの問題には潜みやすいことも指摘しておきたい。

また、人間の働き過ぎによって、地球という自然を搾取収奪して、地球の持続を保障するバランスを崩しているという指摘があることにも、耳をかたむけなくてはならない。

C. ダグラス・ラミス、辻信一「エコとピースの交差点」本を読む

(2011年2月14日～3月9日)

1. 経済成長と「減らす発展」

大月書店から2008年発行された本で、店頭で見つけた。二人の対談で作られた本で、読みやすい。

「はじめに」で、辻さんは次のように述べる。

「日本版パックス・エコノミカがどのようなものか、について、その著書を通じて語ってきたのが、イリイチとも親交の深かったダグラス・ラミスさんだ。彼は、「平和」や「自然環境」ということばを、「成長」や「発展」や「進歩」や「豊かさ」といったことばから引きはなし、解きはなとうとつとめてきた。

たとえばラミスさんは、『経済成長がなければ私たちは豊かになれないのだろうか』(平凡社)というぼくの大好きな本で、そのためには戦争も自然破壊も正当化されるという経済的な豊かさなるものが、たんにはた迷惑なだけでなく、じつは、それを手に入れた少数の人びとをさえ幸せにしない、という事実に着目した。そして、幸せへの道は、むしろ「経済成長がなければならない」という思いこみから自由になったときにこそ開かれる、とラミスさんは説いた。

『経済成長がなければ～』の新書版のために書かせていただいた「解説」の中で、ぼくは次のように述べた。

恐怖ではなく、安心や愉しさをこそエネルギーにして発展するような「スローな」社会の姿をラミスさんはぼくたちに想像させてくれる。物質的な豊かさではなく、本当の意味での豊さにあふれる社会をつくる、それは経済成長などという物語よりも「はるかに面白い歴史的プロジェクト」なのだ、と。そのプロセスをラミスさんは、

これまでの「開発」や「発展」に対して、「対抗発展」と呼ぶ。彼によると、対抗発展は「減らす発展」だ。それは、エネルギー消費を減らす、経済活動に使う時間を減らす、値段のついたものを減らすことを意味するだろう。その代わりに、経済以外の価値、経済活動以外の人間の活動、市場以外のあらゆる楽しみを増やし、発展させることを意味する。」 P 5～6

私の考えと共振するところが多いし、こうした問題について試行錯誤的に考え試行している私には、大きな示唆がいくつも出てくる。

2. 希望と物質的豊かさ

「希望をもとう」「希望を実現しよう」といったように、希望ということを肯定的に考えることが普通になっているなか、希望を客観的にとらえ、希望のとらえ直しをするうえで興味深い次のような対話がある。

辻 でも、「希望があるから貧しさがつらくなる」、という言い方もできますね。もともと伝統社会の文化的な豊かさの中で、物質的な貧しさを貧しさと感じないで生きていた人たちが、最近までたくさんいたわけです。その人たちが、むしろそこから抜け出すという希望をもつことによって、絶望していったのだと思うのです。だって、希望がないところに失望も絶望もないですよ。だとすると、60年代の日本人がもっていた希望が、じつは曲者だったと考えることもできる。アメリカンドリームもそうでしょう。それがなくなるときにはみんなある種の満足感の中にあっただのに、新しい夢が現れることによって、それを得ることができないほとんどの人が失望する。つまり、物質的なレベルにおいて貧しいことが不幸せなのではなくて、むしろ、自分がいる状態を他人と比較した結果、自分が否定されたように感じる。あるいは夢をもつことによって、その夢を基準に自分がいかに悲しい状態にあるかを感じて不幸せになるのではないかと思う。(中略)

ラ (中略) 辻さんがおっしゃるとおり、希望というのは、階級的に高くなるとか、金持ちになるという希望であれば、絶望する人がとても多い。でも、若い人がいつか好きな人と結婚して、家族をつくりたいとか、自分の子どもを育てたいとか、伝統的な生活の枠の中で、こういう位置づけになりたいという、そういう意味の希望はやはり大切だと思います。狩猟文化であれば狩りが上手になりたいとか、彫刻が上手になりたいとか。希望というのかどうかわかりませんが、これらはたしかにアメリカンドリームとはちがうドリームです。

辻 そうですね。そこには自分の否定や、自文化の否定がともなわないですよ。

ラ 自分の否定の代わりに自分の成長です。どういう人間になりたいか、知らないことを知りたいし、大人になりたいし、そういう希望は必要です。」 p 41～3

いくつかコメントしよう。

1) 「曲者」だった「60年代の日本人」と書かれた、まさにそのなかで私は青年期を送った。「物質的な豊かさ」と結びついた「希望」が膨らんだ時代であり、それ以後、その延長線上で日本社会は進んできたと言えるかもしれない。その希望の一部が実現する一方で、かなりの部分は失望・絶望になる。そしてそこからはいあがって再び希望を追求し、希望の一部が実現し・・・ということの繰り返しかもしれない。

と同時に、そういう思考方法・行動様式から少しずつ距離を置くが増えてきたようにも思う。

2) 60年代における「希望」ということでいうと、競争勝負とむすびついて「希望」が登場することが多い。当時から日常的に見られるようになった高校大学への受験競争、企業間競争など、社会生活の広汎な場に競争勝負的なものが普及する。スポーツもその一つである。

3) 対談では、伝統社会ではそうしたものがなかったような感じだが、60年代ほどではないにしても、存在していたように思うがいかがであろうか。とくに社会支配とからんで、競争勝負的なものが多用される場所では、希望・失望・絶望といったものが、人々の世界に入り込んでいたように思う。戦国時代の下剋上、徳川時代の年貢取り立てなどをめぐっては、競争的な様相も持ち、物質的なものをめぐっての希望・失望・絶望が存在したのではなからうか。とはいっても、現代の様相とは異なる。このあたりは考えてみたい事である。

4) この対談で重要だと思うのは、「自分の否定や、自文化の否定がともなわない」希望についての指摘だ。よくいわれる、日本の若者はアメリカ・中国・韓国などと比べて自己肯定感が大変低いということとからんで考えてみたいことだ。

また、競争勝負が標準・基準を設定することで、一つの文化を絶対化し、他者他文化を否定する方向へ誘導しやすい、という問題がある。それは多文化共生型とは対照的だ。

いずれにしても、これまであらためて考えることが少なかった「希望」という事を再考させるきっかけになる対談だ。とくに、教育界では、希望とか夢とかを過剰使用する傾向があるだけに、なおさらだ。

3. 動きまわることととどまること

本書の次の一節は示唆的だ。

辻 (中略) 今まではモビリティ、つまり動きまわることが進歩であって、ひとところにとどまっている人はちょっと頭が悪くて能力の低い人だと言われてきたけれど、考えてみれば、動きまわる人たちの食べものをつくってきたのは、とどまっている人たちでしょ。また、動きまわる人たちが動きまわったのは、これまでただみたいな低価格で、石油を湯水のように使うことができたからにすぎない。そのつけが回ってきたのが環境問題だ、と。これからは、とどまる知恵、とどまることによってある場所に蓄積されていった知恵、積みあげて質を深めていくというローカルな知恵のあり方が見直されていく時代だという気がします。 P 122

検討に値する。世界のここ数百年は、動きまわる方向で経過してきた。とくにここ20年は、いわゆる「グローバルイズム」の中で、劇的にその方向を強めている。それが必然であるかのごときである。ここでいわれている食べ物にかかわっても、その貿易をめぐって激しい論議が交わされている。サトウキビをはじめ沖縄農業のかなりが存続の危機にさらされるという人も多い。

「とどまる」方向は、地産地消、地域内循環、場合によっては自給自足をある程度取り入れるものだ。

「動きまわる」という表現は微妙だ。「動く」のではなく「動きまわる」だからだ。辻さんにしてもラミスさんにしても、「動く」人だし、平均的な人から見れば「動きまわる」と見られそうな人だ。そういう人が、「動きまわる」ことに異議申し立てをしているのだから、微妙というわけだ。

しかし、「動きまわる」ほどでないにしても、「動く」ことで発見創造が多いことも確かだ。「井の中の蛙」にな

らないためには、他の世界を見聞し体験することは重要で、そのことで「とどまること」の大切さを発見確認できることにもなる。

私自身も、青年期以降、つい最近まで「動きまわる」人だった。ここ南城市玉城に住み始めてから、飛行機新幹線使用が、以前の半分以下どころか、2、3割に激減した。そして「とどまること」に軸足を置くようになってきた。

4. 環境問題解決と熱狂的経済活動抑制

本書の特徴は、タイトルにもあるように、「エコとピースの交差点」であり、それは経済活動をどうとらえるかにからんでくる。

次の指摘が注目される。

「ラ (中略) 驚くことに地球ガイア理論を唱えたジェームズ・ラブロックが、「危機状態だから原発をつくるしかない」と言った。原発に対して不安がったり、廃棄物の心配をしたりしているところじゃない、危機状態なんだからと。地球温暖化に対する闘いが戦争状態のようになって、なんでも話が通せるような雰囲気を感じます。これはたしかに怖い。

辻 そうなんです。地球温暖化に関しては、あっという間にかかなりおかしい状況になってきたとぼくも感じています。

ラ だいぶ前からエコロジー運動にはそういう落とし穴があったと思う。「エコ・ファシズム」ということばが以前からあって、地球を守るために人間を全体主義的に管理するという発想を指します。エネルギーの使い方や消費を、完全に管理しないと地球が助からないというようにね。環境の名のもとに原発、原発と言う人には、エコ・ファシズムの傾向を感じます。」 P 133

「辻 政治家でも、たとえば自民党総裁選に立候補した小池百合子さんは元環境大臣で、エコロジー通で通っていますが、「安全保障としての環境問題」という言い方をしています。権力者でもちょっとばかり鋭い人なら、環境問題のスケールの大きさをとらえているんじゃないか。友人に聞いた話ですが、イギリスでも環境問題に一番熱心なのは、国防関係の人たちだそうです。

ラ 戦争状態の専門家が環境問題を取りあげることになるわけです。ブッシュ大統領もそうでしょう。石油を輸入することが国防上の問題になることを意識して、トウモロコシのバイオエネルギーを推進している。戦争政策と環境政策がいっしょになっている。」 P 134

30～40年前に「公害問題」と言われ、企業と公害問題が対抗関係にあった時代とは状況が変化している。そういえば、2、3年前だったか、宮古でサトウキビのバイオエネルギーのキャンペーンが行われた時、小泉元首相が顔を出していた。誰でも環境問題を語り、リサイクルを語るようになり、企業も環境問題で収益を上げようとさえする時代なのだ。環境をいえば、企業に対抗するというのではなく、環境を宣伝にして企業が動く時代だ。

私は、環境問題を言うだけでなく、その問題を生み出している大量生産大量消費を変えないといけな

てきた。リサイクルを言うだけでなく、消費そのものを抑えることが必要なのだ。

その点で、私の長年の主張と響き合う、次の発言に大いに注目したい。

「辻 熱狂的な経済活動を抑えることなしに、環境問題を解決することはできませんしね。反戦平和運動をしてきた人たちにも、戦後の日本が経済戦争という戦争状態の中にいたことがあまり見えていなかったんじゃないでしょうか。もうひとつ、戦争というときに、ぼくは、自然界に対する戦争ということもつけ加えたいと思うんです。このことに対する自覚がないから、人間中心主義から抜けきれず、環境問題と平和問題が結びつかなかったのではないか。逆に環境問題をやっている人たちも、牛乳パックには目はいくけど、軍需産業も含めて経済そのものが一種の戦争であるという認識がほとんどなかった。」 P 138～9

11～12年前に初めて出会い、新鮮な印象をもった anthropocentrism の和訳であろう「人間中心主義」という言葉には、懐かしささえ感じる。なお、当時の日本語では肯定的意味をもって使われていた「人間中心主義」ではなく、私は「人類中心主義」と和訳したことを付け加えておこう。

5. 「開発」「発展」とは異なるありよう

次の指摘も注目したい。

「ラ ぼくたちは産業革命がつくった世界に住んでいる。この世界は、いわゆるディベロップメント、つまり「開発」とか「経済発展」というものによってつくられた。その世界が今大きな問題をいっぱい抱えて行きづまっている。昔の革命のイメージのように武装蜂起やゼネストみたいにいっきに体制がひっくり返せるだろうか？ あるいは原発をたくさんつくるとかして、技術革命で一挙に直せるものだろうか？ 産業革命が植民地時代からはじまったとして、長い時間をかけて現在のもつれた状態になったことを思えば、そのもつれをいっぺんにほぐすことができるとは到底思えない。

ガンジーのイメージするような自給自足型の地域社会、環境破壊があまりない世界をつくるのには、産業革命で世界がつくられたのと同じくらいの時間がかかるはずだと考えたほうがいい。都会からみんなを追いだして、田舎へ行かせるという方法では大虐殺を巻きおこしかねない。ゆっくりした過程じゃないと、とても暴力的になるんです。エコ・ファシズム的になってしまう。だから、ドラマティックでもないし、即効性もないけれど、「カウンター・ディベロップメント」ということばが適切ではないかと思うんです。ディベロップメントの過程を逆流する。同じくらいのスローなペースで、だんだんと地域社会中心につくり直していく。」 P 142～4

私も、こうした探求・追求に、足を踏み入れたことになろう。だけど、この探求・追求を構想すること自体も、また試行すること自体も、とつても時間がかかるし、試行錯誤なのだな、と思う。

この論議のつながりの中でなされた次の発言にも注目したい。

「辻 (中略) 開発、発展、進歩、成長ということばの呪縛を解くというのは、時間のかかるたいへんな作業ですね。」 P 144

私が専門とする教育学には、こうした用語がとても多い。「発達」などの用語もそうだ。人間の成長・発達も、近代における産業、経済、技術などの成長・発達とアナロジーで構想されてきた色彩が濃いのだ。

伊波普猷だったと記憶しているが、make ではなく become を大切にしようという提起を思い出した。それにヒントをえて、私も、「なる」「なってしまう」「熟す」などといった用語を、大切にしたいな、と思う。

このあたりは、教育学でいうと、基本用語なので、大変な作業になる。また、「生き方」「人生」をめぐるのもそうだ。大変だが、「なる」「熟す」ように、ゆったりと模索していきたい。

これらのことは、自然との関係の問題でもあり、その点で、次の発言が注目される。

「辻（中略）現代文明がこれまでのさまざまな文明と一番どこがちがうかというと、この「自然からの自由」という考えが徹底しているところだと思う。経済の無限成長という奇妙な考えはそこから来ているんじゃないか。自然という制約がなければ、経済は無限に成長できるわけです。近代以前の「豊かさ」や「富」の概念には自然の制約という枠組みがあった。それを取りはずすことで無限の経済成長という幻想が可能になった。こういうマインドセットが根っこにあって、それが戦争や自然破壊を引きおこすのではないかと思います。」P150

その通りだ、と思う。

そのためには、「自然と共に生きる」「自然を感じる」ありようを取り戻す、というより、そのありようのなかで生きて、その姿勢・感覚を「育み」「熟させ」ていきたい。

6. 「定常」

またしても、「定常」という言葉に出会った。最初に出会ったのは、本ブログで2010年2～3月に連載した広井良典「コミュニティを問い直す——つながり・都市・日本社会の未来」（筑摩書房2009年）において、であった。次は、西川潤「データブック人口」（岩波書店2008年）で、2011年2月の記事で紹介した。

最近、あちこちで使われているようだ。本書では、次のように紹介されている。

辻（中略）ジョン・スチュワート・ミル（1806-1873）は、「定常」という概念を提唱して、無限の経済成長といった考え方に陥る危険性を予測し、どこで止めるか、どこでよしとするかこそが問題なんだと説いていたわけですね。とくにミルは、むしろ経済成長が止まらない状態こそが怖いといっているわけです。定常という状態を実現しないと、いつまでも競争して人をおしのけて進んでいくという状況はハッピーじゃない、と考えた。たとえば『経済学原理』の中で、こう言っています。

「人間性が一番よくなる状態というのは、だれも貧しくはないが、もっと豊かになろうとする者もなく、だれかが前に進もうとすることで自分がおしのけられるのではないかと恐れる理由がどこにもないような状態だ」P153～4

私が、ここ10年以上語ってきたことと響き合う。私の場合は、「先進国」では、多少は「縮小」したうえで、

「定常」状態に入るべきだとさえ、考えてきた。

この議論は、より広い分野で論議されるべきだろう。そして、その方策にまで踏み込んだ論議が求められ始めていると思う。教育学でも論議が始まりそんな気配を感じる。しかし、肝心の政治経済分野では動きは鈍い。

7. 経済に支配された「平和」

次の一連の発言に、私は強く共鳴する。

辻 (中略)「パックス・アメリカーナ (アメリカの支配の下の平和)」はみんな意識していても、「パックス・エコノミカ (経済の支配の下の平和)」を意識している者は少なかった。そのひとつのあらわれが、憲法9条と日本の経済成長との親和性です。世論調査を振りかえってみると、経済成長が好調なときは護憲意識も強く、9条支持率が高いそうです。それが日本型のパックス・エコノミカだったのではないかと。

ラ 9条があって戦争の準備をしなくてもよかったから、経済成長できたという言い方もある。

p 155

ラ 経済支配の怖さは、「支配されている」ということばが当てはまらないと思う人が多いということにこそある、と。それは、経済の動きというものを、「成長」とか、「発展」とかと、まるで法則のように必然的なものだと思いきや、いこうとすることが怖いんだ、と。

P 157

ラ (中略) 60年代にディベロップメント論が流行ったときに、各研究書の典型的なまえがきは「経済発展は大きな歴史の変化であって、歴史は次の段階に移りはしめた。私たちはそれを観察するしかないし、止めようがない」という内容だった。そして、それぞれの研究発表には、どうやってディベロップメントを起こすかといういろんな提案がある。第三世界の国の子どもの教科書を書きなおして、精神的に管理しなければいけないとか、強制力を使うべきだとか、使わないならどうやって説得するかとか。経済発展がまだ起きていない国に産業革命をどうやって起こすか。それを起こす責任が先進国にはあり、研究者にもあると考えるんだけど、その結果、たくさんの方が苦労したり、難民がでたり、環境破壊があるということの責任はとらなくていい。このふたつ——階級闘争と開発論から生まれる「無責任感」は非常に似ていると思うんですね。

辻 でもこの論理って、植民地時代からずっとつづいていきますよね。世界の隅々み未開の地に文明をもたらし、キリスト教をあたえ、貨幣経済のないところに貨幣をもちこみ、言語を強制し、学校や病院をつくり……。

P 158～9

書かれているように、日本ではこうした発想がここ数十年間にわたって根深く浸透し、人々の無意識の世界まで支配している。

2000年4月、カナダでの在外研究から戻り、日本の新聞を久々に目にした時、経済界だけでなく、政界においても、目にするほぼすべての勢力が「景気回復」「経済発展」を主張するのに大変驚いた。「先進国」の経済は「縮小」すべきではないか、という私の発言は、珍しいものに出会うかのような扱いを受けたことを記憶して

いる。

同じようなことは、2004年から沖縄に再び住み始めた時にも感じた。経済成長、景気回復が共通論調として広く見られたのだ。そして、世界の多くの「発展途上国」もそうした流れの中にある。「発展途上国」という表現自体がそのことを物語っている。

こうした発想が、世界的に広がったのは、せいぜい100年余りだ。にもかかわらず、それが普遍的であるかのごとく思われているのだ。そうした点で、本書対談は重要な指摘の連続だ。

課題は、こうした発想からどのように卒業していくかだ。おそらく時間がかかるだろう。時間をかけ過ぎると、破局的な事態がやってきて、「卒業」ではなく強制「退学」させられるかもしれない。

8. 貧困と近代化

次の指摘は、鋭い。既成の考え・ありようを根底からくつがえすものだ。

「ラ 搾取できないし、産業化のために利用できない人たちが存在した。これを「役に立たない貧困」と呼ぶとして、こういう人たちを、「役に立つ貧困」へと変えてゆくことが必要だったわけです。「役に立つ貧困」とは、人びとがちゃんと工場に勤めるなど、賃金労働をして、ものをつくって、給料をもらい、そのお金でものをかうようになること。この変化をイリイチは、貧困が「近代化された」のだと言うわけです。

辻 近代化というのは、その意味では、伝統社会の中に「欠乏」や「希少性」をつくり出すことですね。言いかえれば、近代化とは貧困の発明だった。現代の先進国の若者たちの多くが引きよせられるトピックに「格差」があります。ある意味、60年代の終わりの学生運動がさかんなころの若者とも通じるところがある。ぼくの大学でも、東南アジアに行って学校や病院をつくるとか、フェアトレードとか、そういうところにエネルギーをそそいでいる学生たちがかなりいる。でも、そこにある貧困はそもそもどうやってつくられたのか、いわゆる近代的な意味での貧困がどうやってつくられたのかという話が、なかなかとどかないんです。

ラ 南の国の貧困は、だいたい開発の結果ですからね。

辻 だとすると、若者たちが、貧しく苦しんでいる人を救いたいという善意でやっていることが、結局、貧困の近代化を促進する役割を果たしてしまうことにもなる。ぼくは、むしろ学生たちに、貨幣経済の周縁で、いまだ生態系や伝統的な文化が近代化やグローバル化によって破壊されていないような場所に行って、そこにまだ息づいている「豊かさ」をこそ見てきてほしいと思うんです。GNP（国民総生産）やGDP（国内総生産）はすごく低いのに、なぜかGNH（国民総幸福）の度合いが高いというのを実体験してほしい。」P159～160

このことを、私がこれまで使ってきた表現でいうと、日常の暮らしへの「金銭・商品への依存」の浸透ということだ。「金銭・商品」なしには、日常の暮らしがやっていけない。

沖縄田舎暮らしの私の実感でいうと、衣食住費・交通費・教育費・医療費の分野で著しい。これらのなかで、私に不要なのは、教育費ぐらいだ。都市生活と比べれば、田舎では、この中の食ぐらいは2、3割安くなるだろうか。そして、商店街・駅前・飲食店街など、商品・サービス購入機会が、都市より少ないのが「せめてもの救い」だ。しかし、若い世代はそうもいかないだろう。とくに教育費は大変だ。大学進学をさせるとなると、都市生活者以上に大変だ。

最近気づいたのは、医療費がかなりかかるということだ。現在の私の場合、直接に医療費と言うより、国民健康保険への支払いが、年間総支出の最大比率を占めている。

身近な例から離れて、本書の関連部分の大きな視野での議論の紹介を続けよう。

「ラ （中略）（『社会科学百科事典』）30年代版で、国際関係の項目を調べると、植民地主義の時代ですから、ヨーロッパ、アメリカ、日本の軍事力と経済力をすごく感じる。戦争もあるし、それぞれが南の国を支配し、植民地にしていて、政治権力や国家権力という強制力を行使していたことがひしひしと感じられる。それが60年代版になると軍事力や国家権力といった強制的な力が消えてしまったかのように感じられる。その代わりになにが動いているかという、プロセスです。工業化をはじめ、都市化、産業化、〇〇化という社会学用語で表現されるいろんな過程が進行している。

辻 英語の「XXXイゼーション」がいっぱい。それらが、一種の自然法則みたいに必然的なプロセスだと感じられるわけですね。

ラ そう、自然法則だから、そこにはだれかが権力を使ってなにかをおしつける「強制」はなにもないかのような印象をあたえる。」 P 161

「辻 そして、先住民たちはヨーロッパ文化に触れてヨーロッパ人と同じものがほしくなったんだ、というわけですね。そして、生活水準をあげたいと願うようになった、と。

ラ そんなことは歴史の事実としてなかったのに、です。でも、これは他人ごとではない。いま都会に住んでいる私たちだって、厳密に言えば間接的強制労働の状況にいるわけです。

辻 田舎の人が街の灯や文化の香りにあこがれて都市に集まったのが都市化だと言われるけど、じつはぼくたちは都市に強制収容されている！

ラ それ以外の選択肢を奪われている。

辻 イリイチのいう「根源的独占」にも通じるものですね。最初はなくてもすんでいたものが、社会のしくみそのものの変化によって、なくてはならないものに変貌する。いま強制労働といたら、みんなたぶん児童労働のようなものに目がいくと思います。児童労働は強制的でけしからんとみんな言えるんだけど、じゃあ、自分たち大人が、したくもない仕事のために一生の大部分を費やすことは、はたして強制労働でないのかどうか……。」 P 164

本書の叙述から言うと、今日の政治世界で議論されているような、「近代化」の流れの中で貧困をなくす、というのではなく、貧困を作り出した「近代化」そのものをなくすような方向が示唆される。だが、それはどのような展望なのだろうか。スローライフの追求など、日常レベルでの追求はイメージできても、世界のありようそのものを変えていく展望と言うものをイメージするのは、極めて大変だ。まさに模索段階なのだろう。先に紹介した「定常」もそのことにかかわるのだろう。

9. 豊かさを問い直す、手作りの意味変化

次の「豊かさ」と「幸せ」にかかわる一節は、興味深い。

「辻（中略）以前は経済成長をとげて豊かになって国際競争に勝っていけば、そこに住む国民は幸せになるという思いこみがあったけれど、じっさいにはそうではないらしいということが、しだいにはっきりしてきた。これまでは三つの常識があったそうです。まず、豊かな国のほうが貧しい国よりも幸せである、という常識。次に、同じ国では豊かな層の人が貧しい層の人よりも幸せである、という常識、三番目に、人は金持ちになったほうが幸せである、という常識。最近の専門家たちの研究によると、この三つの常識のどれも正しくないということが明らかになってきているそうです。アメリカでは金持ちであればあるほど心の病が深刻で、治療のためにたくさんのお金を払って雇わなくてはならないという。それで、あのブータンの前国王が提唱した「GNH（国民総幸福）」も国際的に注目されるようになったんだと思います。これまでは、豊かさを得れば、その中に幸せが含まれている、と考えられていたようです。でも、今では、豊かさと幸せが背を向けあっているような状況がたくさんあるわけです。」 P165～6

ここでいう「豊かさ」は、「心の豊かさ」とか、「生活の質」とのかかわりでの「豊かさ」といったものとは異なり、「貧しさ」と対比された、主に経済的な物量の豊かさにかかわって述べられている。そういう意味での「豊かさ」から距離を置き、そういう豊かさとは異なる「幸せ」を追求するという志向が提示される。

物質的には「貧しくても」、暮らし方、さらには人間関係や心は豊かだ、ということの中に「幸せ」を求めようというメッセージがほのめかされている。

ところで、金銭商品への依存度の高い近年の「貧しさ」は、安価なものに依存して生活する傾向を強めている。安価なものは、実は大量生産によるもの、圧倒的な物量に支えられていることを覚えておく必要がある。多品種少量生産によるもの、いわゆる付加価値の高いものは価格が高くて、経済的に貧しい人には手が届かない。同じように、職人による手作り性の高いものは高額で、富裕層にしか手が届かないものになりつつある。

たとえば、沖縄での地場産業である芭蕉布とか花織とか上布とかは、土産用の小物は別にして、衣服用には一般の人が買えるものではない。だから、手作り生産物はかえって、ぜいたく品になっている。都市住民にとっては、アタイグワ、つまり家庭菜園でさえ、そのような性格を帯びているかもしれない。手作りは、かつては「お金がないからやむをえず、する」であったが、いまや「金持ちだから手作り品を買える」になってきた。

このあたりの皮肉な現象が広がっている。アメリカあたりでは「貧困層」が肥満で悩み、富裕層は細身だ、という話を聞いたことがある。こうしたことをどう考えるのか。

物量的には貧しくとも、人間関係が豊かな人たちは、自給自足的、物々交換的に、あるいは地産地消的に、手作りの「ぜいたく品」を使うことができることが多い。「手作り」の新しい意味が出てきたのだ。それは自然な形でのスローライフになりやすい。スローライフは、とてもぜいたくなのだ。金銭的に貧しくても、生活的にはぜいたくなのだ。

もう一つ、多様さを共有し、多様な人々との協同の中で、つまり異質協同の中には、豊かさがある、と私が言ってきたことも、これからの豊かさ・幸せ追求には大切なことだと思う。

1月30日、コンベンションセンターで開かれた木村秋則講演と映画「降りてゆく生き方」上映に出かけた。会場で、両者と深いかわりのある本、河名秀郎「日・水・土」（一般社団法人降りてゆく生き方2010年）を購入し、読んだ。私も、家庭菜園のやり方をはじめいくつかのことを考えるきっかけになった。

まず、30日の二回にわたる講演映画。広い会場が満席に近い状態であったことに驚く。こうした問題に関心を持つ人が、沖縄でもかなりの数に上ることを発見した。映画。この企画を知ったきっかけは、玉城のカフェ「黄果報」にポスターが貼ってあり、チラシをいただいたことだ。「降りてゆく生き方」というタイトルに強く魅かれたのだ。

金に任せての開発至上主義・経済競争勝利をめざす生き方から降りるという意味合いが中心の映画だ。私が提示してきたストレーター型生き方から降りるも含めて、多様な人々の多様な「降り方」が多様に示され、かつその中での模索・迷いといったものをイメージしていた私の予想とはやや異なっていた。

それでも、自然と共に生きる姿を含め、ライフスタイルを変える多様な模索が提示されたものであった。

沖縄では、開発とか経済競争とかが、未だ盛んだ。多くの府県以上かもしれない。と同時に、自然との関係、人々相互の関係において、そうでない世界を多分に持っている（残している？）。それに魅せられて、ライフスタイルを変えようと、県外からやってくる人も多い。

こうした複雑なものが同時存在する沖縄で、この映画が投げかけるものは、ピントがややずれる感はありつつも、沖縄独自の関心を生み出し、沖縄独自のものを生み出すきっかけになると思う。

35年の変化・・・NHK「現代日本人の意識構造[第七版]」を読む（2011年3月10日）

NHK放送文化研究所編「現代日本人の意識構造 [第七版]」（NHK出版2010年）の終章では、調査が継続実施してきた35年間の意識変化について、次のように報告されている。

「五年間の変化量の全体平均をみると、大きく変化したのは、七三年から七八年にかけての二・三%と、九三年から九八年にかけての二・三%である。」P208

そして、その解釈として、以下のように述べられる。

「双方とも不況の時期と重なっており、景気が意識変化に何らかの影響を与えていることがうかがえる。

七三年から七八年にかけては、どの領域でもまんべんなく変化しているが、特に、基本的価値、経済・社会・文化の変化量は他の五年間の変化と比べ目立って多い。高度経済成長から一転して、オイルショックに見舞われ、これらが人びとの価値観に大きな影響を及ぼしたとみられる。

それに対し、九三年から九八年にかけて、最も大きく変化した領域は、政治の三・八%である。戦後政治の大きな特徴だった自社両党による「五五年体制」が崩壊したのは九三年、そのとき誕生した細川内閣も長続きはしなかった。その後、不況が深刻化する中、有効な対策をみいだせないまま、内閣は五つと目まぐるしく変わった。

また、政党は再編を繰り返し、これらは政治意識全般に大きな影響を及ぼしたとみられる。」P208

さらに以下のようにも書かれている。

「三五年間というこの調査の最大スパンでみると、最も大きく変化した領域は、家族・男女関係の一一・五%

である。各五年間において、七三年から〇三年までの三〇年では、家族・男女関係は全領域の中で一番目または二番目の変化量を示しており、常に変化していた。

中でも八三年から八八年にかけては三・〇%と目立っている。女性の地位向上に向けて、七六年から八五年の「国連婦人の一〇年」の活動があり、職場での男女の雇用上の差別を是正していくため男女雇用機会均等法が八六年に施行された。しかし、〇三年からここ五年においては、変化量は一・四%とこれまでで最も低い。大きく変化してきた家族・男女関係についての意識変化の速度が緩まっている。」 P 2 0 9

これらの解釈の当否はさておき、子ども・若者、教育の視点からの私なりの解釈を付け加えよう。

73—78年という時代は、企業社会秩序が確立して大多数の人々をおおようになった時代である。それを子ども若者と教育の世界でいうと、学校生活での成否が、その後の人生の大枠を決定するようになり、その成功のために、家族が力を注ぐ「教育家族」が「当たり前」になった時期である。それを私はストレーター秩序と名付けた。

それらは、それ以前から存在はしたが、それが急速に広がり、一般化したのだ。高校進学しない方が珍しくなり、学習塾に通うのが普通になった時期である。

そうしたことが、家族男女問題を中心に、人々の意識に深く影響したのではないか。

そうしたありようにひびが入り、「修正」が加えられ、人々がその影響を危惧し、対応に苦勞するようになったのが、93—98年の時期だ。教育をめぐる競争、就職活動をめぐる競争、そしてそれらに伴う困難の増大の時期だ。

この変化の激しい時期の間隔は20年となっているが、次の20年にふたたび激しい変化があるのだろうか。そんな予感がしないでもない。08—13年の時期である現時点は、「グローバル時代」のなかで日本の位置の相対的低下が鮮明になり、貧困格差問題、失業・非正規雇用の増大など、変化の必要がいわれ、変化を予感させる時期になっているが、先は見えにくい。それが、次の13—18年の時期、何か鮮明になり、人々の意識変化も激しい時期になるのであろうか。まったく予想しがたい時期である。

※ 本書は、さらに、「世代間の意識の変化は世代が新しくなるほど、小さくなっている」P221との報告も記している。これについては、どう考えたらよいか、私は思考中であり、コメントしがたい。

大災害に考える (2011年3月16日～4月14日)

1. 人々のつながり

未曾有の大災害。報道に驚きの連続だ。また、何人かの知人からの情報も入ってくる。現在のところ、私の知人が直接の被害を受けた話は伝わってこない。だが、心配なことは多い。

11日午後3時ごろ、防災無線放送が聞こえてきた。室内では聞きとれにくいので、屋外に出て聞くと、津波警報のようだ。事態を知るために、テレビを見る。宮城県に津波が襲ってくる実況が放送されていた。信じられ

ない光景だ。それ以降、ふだんはあまり見ないテレビをたくさん見た。

私たちの地域での津波予想時間、予想高さをみると、海拔25メートルほどある我が家は、避難するというより、避難先になるような場だ。予想時間に海をみるが変化は見取れない。後になって、テレビでは、佐敷干潟での津波状況が映されていた。

テレビをみていると、月曜日ぐらいから、被災者の生の声が入ってくる。視聴には勇気が必要なくらいだ。

災害をめぐっているいろいろと考える。その一端を書いていこう。

まず人々のつながりについて。

新聞によると、ロシアの報道機関が、この災害時に「略奪がない」のは驚きだ、という報道をしたという。災害時に略奪とは、私たちには信じがたいことだ。しかし、世界をめぐると、こういう事態の発生は珍しいことではなさそうだ。

人々のつながりが、人々相互の命を助け合う例は、今回も多くの報道がなされている。今回の被災地には、「田舎」が多い。都市と言っても、仙台以外は地方の小都市だ。人々のつながりが強い地域が多いといえるかもしれない。これが大都市だったらどうだろうか、と気になる。つながりの薄い例が多いからだ。

2. 支援でできること 電話は慎重に

こうした災害の時、何かできないか、と考える。しかし、遠くにいると、できることが限られる。

そこで、電話をする、ということが思い浮かぶ。しかし、私は電話をかけることにも慎重だ。電話が殺到して、かかりづらくなるからだ。また、相手側が電話対応で振り回されることもありうるからだ。必要最小限にとどめたい。知人が東北にいたとしても、何か支援できる段階ではない時には、電話をかけることには慎重になりたい。

肉親同士が安否を確認する、居場所を確認する、あるいは支援組織が緊急対応をする、といった必要不可欠な電話を優先したい。だから、そういうケースではない電話は遠慮し、後日電話する事にしたい。

実際、相手に何も応援にならず、こちら側の不安をしずめるだけが目的で、『相手の事を心配して』という理由の電話などが多いように思う。

電話が通じる状況にあったら、困っている側が電話をかけることを優先したい。困っている側の要請に応じて、こちら側が何かをする、という形にできるだけしたい。

以前で具体的なことを忘れたが、航空機事故かなにかがあつて、心配して電話をかけてきた人がいた。私がよく飛行機にのる、という理由だけであり、電話をかけられた私の方が、相手側が神経過敏症になっているのではないかと心配になったほどだった。

また、私自身の被災体験でいうと、50年以上前の伊勢湾台風があるが、一カ月後に、鉛筆ノートが配布されたことがあったが、文房具に困るという事情はまったくなく、かえって困惑した記憶がある。折角の好意だから受け取りはしたが。

何か支援をしたいという時には、何が求められているかを調べて対応したい。それがはっきりしない段階では、「義援金」を送るというような形を取りたい。ということで、私たちは、赤十字への送金をした。

3. 対抗・克服 しなやかしたたかな対応

災害にたいして、「対抗する」「克服する」という考えがある。と同時に、「天災」だから、それといかに付き合いながら、最少限の被害にし、したたかにしなやかに対応していく考えもある。この二つの考えが混然一体としてあるのが現実のように思う。

ただし、後者であっても、天災でなく人災になるようなことは許容できない。原発の場合、それに属することが多い。原発の存在自体、そうだという考え方も当然ある。

科学の考え方も関係する。「自然と闘い、自然を制覇する」という発想をもとに、ここ100～200年あまり、科学が目覚ましい成果を上げてきたものだから、「科学に基づいてやれば心配ない。科学的にやることが一番だ」という、科学信仰というか、科学主義というか、そうしたものが広汎にある。だが、科学で分かっていないことは多い。地震などもそうである。だから、科学を積極的に使うことは不可欠だが、科学に任せきる頼りきることはできない。科学を適切に使うことが重要だ。

科学以外には、本人自身の考え・判断・行動が重要だし、人々のつながりが重要だ。そして、メディアなどを通じた情報も重要だ。だが、いずれも、科学同様、プラスマイナスがある。

ここでメディア情報について、一つ述べよう。原発問題では、「不要な不安をかきたてないような配慮」が前面に出た報道姿勢が目立つが、現段階がどういう特質を持っており、先の見通しとしてどういう可能性危険性があるのかが不鮮明で、人々が自ら判断するために必要な情報が提供されていない。そのためかえって不安がかきたえられる傾向がある。〇〇^{*}までは避難指示といった結論だけが前面にでるが、それが不安を増長させる効果を持っている。

4. 体験をもとにすることの大切さと心配

災害の際、人々の体験にもとづいた対処が行われることが多い。たとえば、津波の高さ。体験では、このくらいだから、それよりは多少は厳しく考えて対応するというのが、広く行われたことだろう。東北太平洋岸は津波常襲地帯だから、他地域よりも、そうした点ではしっかりした対応が行われた事と思う。

だが、今回は、体験レベルをはるかに超えるものだった。岩手に設置された津波対処用の防波堤が M8.5 を想定して作られており、M9.0 の今回では、完全に崩れてしまったとの、テレビ報道を見た。

だから、体験は貴重なものであると同時に、『裏目』に出ることもあるようだ。

沖縄の私たちの周辺も、100年以上の単位の歴史からみれば津波地帯であるが、人々の体験からいうと、津波対処では、大変心配である。むしろ「歴史をあなどって」いるとさえ思うことがある。50年前のチリ津波の際、海岸近くまで見に行き命を落としたという例がある。今回も、海岸がよく見える我が家（海拔25メートルほど）から見ている、津波到達時刻前後にも海岸近くに人の姿が見えたりする。

明和の大津波は著名であり、八重山では大量の人々が亡くなった。その時期、歴史書を見ると、沖縄本島でも何回か、そうした記録があることを目にしたことがある。そんな歴史体験があるせいか、200～300年以上の歴史を持つ集落は、海岸線にはなく、海拔10～20メートル以上に立地しているようだ。それ以下の所は、比較的新しい集落のように思われる。近年、埋め立てがすさまじい規模で行われ、そこに住み働く人の数はかな

りだ。大変気になる。

数日前の報道で、沖縄の公的機関が、災害対策計画の見直しをすることにした、とのことだ。

災害対処の工事の歴史よりも、災害の歴史は、はるかに長い。

5. 外国関係の動きが問いかけるもの

新聞などが、外国の対応を報道する。目にしたものを並べよう。

原発から80キロの自国民を退避させる。

日本からの退去のための航空機を用意する。

原発の危険レベルを、日本の設定より厳しくチェルノブイリに次ぐ危険な事態と評価する国もある。

東京にある本社機能を大阪などに移す。沖縄に移す所もある

大使館を広島に移す。

アジアからの私の間接的知人も、家族が心配するので帰国するとのこと。

日本人よりずっと強い危機感をもっているところが続出して驚く。前の記事にも書いたが、日本政府などの発表は、危機感をいたずらにあおらないようにすることへの配慮が強いが、この先の見通しがよく分からない。外国からの報道の方が、危険なシナリオ、安全なシナリオなどいくつかのシナリオを提示してくれて分かりやすい。

日本の場合、政府や自治体が設定した安全基準はしっかりしているから、それに従えというトーンが強い。しかし、今回の津波は、その基準をはるかに超えた。想定していた最悪のものを超える事態だというのは。政府・自治体の基準の問い直しと同時に、政府・自治体に任せきりでいいのかどうかも問われる。

大災害なのに、日本では略奪がないのに感嘆するという記事に驚いた話は、先に書いたが、『風評』被害を恐れる生産者は多い。関東大震災の時は、『風評』で在日朝鮮人虐殺が行われたことを思い起こした。

外国の対応で驚いたのは、円高が進行し、協調介入まで行われる事態が生まれたことだ。素人考えで、大災害なので、円が暴落するのではないかと、思った。先日のニュージーランド地震で、ニュージーランドドルは下がったし。

このように、外国の動きには、よくわからないこともあるが、日本のありようを再考するきっかけを与えてくれるものも多い。

6. 「復興」のありよう

今回と同じ規模の地震・津波が、フィリピンプレートで発生したらどうなるのだろうか。東海地震？ 東南海地震？ 居住人口、商工業施設などの立地を考えると、被災者人口は、10～100倍にのぼるだろう。

日本のありようそのものが問われる。ここ40～50年の、経済発展中心できた日本のありようが問われる。今回の地震・津波・原発は、その先駆け的問いかけのように思えてならない。

今回のものに限って考えてみよう。たとえば、対応策としてとられた計画停電がもたらした首都圏での事態を

見ると、首都および周辺機能の低下は、たとえ一時的なものにせよ、避けられないようだ。

原発や石油への依存率をかなり下げることが求められよう。また、エネルギー使用そのものを大幅に減少させることが求められよう。

『復興』資金をどうするか。もうすでに増税が話題になっている。

日本経済は強いので、復興にそれほど時間はかからないだろう、という見方に出会う。むしろ復興需要というのさえある、という見方もある。そんな見方などが、円高を呼び込むのかもしれない。

復興計画も話題になり始めている。その際、「元に復興する」のでいいのだろうか。「元とは異なる形に復興する」必要があるのではないだろうか。

たとえば、海岸付近の立地はどうするのだろうか。「自然と調和しながら」ではなく「自然と対抗する」発想で、元以上に高い防波堤防潮堤をつくり、その地域を元と同じ形で復興するというのでいいのだろうか。原発などもそうした角度から検討することが必要だ。

※ 防潮堤などなしだが、住民協同で、被害を最小限にとどめた岩手県の海岸集落の事が報道された。
貴重で示唆的な例だ。

これまでの主流の考えのように、自然の力には、政治・経済・技術の力で対抗するという発想でいいのだろうか。そうした力対力の発想が、早晩、今回以上に甚大な事態を招くことはないのだろうか。

そうした追求は、資金的にいて、未曾有の借金財政と増税を生み出し、人々の生活に大影響をもたらすのではないか。社会保障・教育などの財政支出の大幅削減が、「災害復興」の名の下に進行しないのか。そして、災害による「危機」管理だけでなく、「災害復興」過程がもたらす「危機」管理策が登場するかもしれない。

無論、こうした問題は政府・自治体などだけに任せることはできない。人々自らのライフスタイルの復興、ないしは再創造も求められてこよう。その際、これまでのような大量生産大量消費を前提にした生活への復興とは異なる形を、どのように展開できるのだろうか、ということも考えなくてはならない。

7. 人々の生活・生き方の問い直しへ

この大災害を契機に、人々は、生活・生き方の問い直しをどう行うのだろうか。

『復興』が必要な人々は、どのような形の復興をするのだろうか。『復興』ということがテーマの前面にならない人も、今は影響がないとしても、いずれ何らかの形の影響はでてくるだろうから、それを契機に、生活・生き方をどのように見直し、再構築するのだろうか。

自給自足的生活比率が現在は2~3%しかないのを、せめて5%ぐらいまで高めよう、という人が出るかもしれない。自家だけで自給自足的生活は難しいので、近隣の100世帯ぐらいの規模での交換を含んでやれば、自給自足的生活10%近くはできるかもしれない、と言う人もいるかもしれない。自給自足的生活比率を高めるために、市民農園を借りようとか、家庭保育グループをつくろうとか考える人がいるかもしれない。

また、大量生産大量消費的な部分を何%かカットする。電力使用、ガソリン使用を10%減らすという事を目標にする人がでてくるかもしれない。

あるいは、コミュニティにおける人々のつながりが、人々を救い助けたことを教訓にして、つながり構築を重

要な柱にする地域がふえるかもしれない。

自然に対抗する事を軸にした災害対策には限度があるから、災害との付き合い方の方に、対策をシフトするありようが出てくるかもしれない。

災害からの復興を、政府自治体だけに任せることではまずいということで、住民の自主防災、家族の自主防災、さらには緊急時の個人対応について考える人が増えるかもしれない。

すでに、近くの与那原町東浜(最近の埋め立て地)の自治会は、対策のための学習会を開いたとの報道があった。多様な模索創造が続くことだろう。

2の1. 50年単位思考は、長いのか短いのか

余りにも重大なことであり、先の7回シリーズに多くの方がアクセスして下さったこともあるので、シリーズの2回目を書くことにした。

40年たつ福島第一原発が、とんでもない事態を引き起こしている。「安全だ」という言葉を叫び続けていた当事者が前提にしていた高さ想定をはるかに超える津波が来たのだ。地震の歴史研究に基づいて、想定より高い津波が来る可能性を指摘し、より高い想定での対応が必要だ、と指摘した研究者がいたが、電力会社も国も無視した、との新聞報道を読んだ。

災害をめぐって、しばしばこうしたことが話題になる。これまでの多くのものが、せいぜい100余年間の測定データをもとにして設定されている。あるいは、今日に直接つながる経済発展スタート時期からの50年間ぐらいのデータが使われることもあるようだ。それは、「自然」の問題に、「経済」の論理が優先して考えられているともいえそうだ。

こうした自然災害に関しては、どのくらいの年数を視野に入れて考えるのが妥当なのだろうか。氷河期とか縄文海進とか南九州の超巨大火山爆発とか、マグニチュード10近くの地震とかを考えるとしたら、素人の私にはよく分からないが、数千年以上を単位とする思考が必要だろう。

それより短く、歴史文書などで明らかな時期、つまり1000年～2000年単位で考えるのか。

さらに短く、「科学的データ」が残された期間、100～200年単位なのか。

さらに短く・・・？

これらの中のどれを使うのか、それは科学技術水準に関わることであるが、実際には、「採算」に基づく経済判断が優先しているようだ。「採算」の範囲内で考えるから、研究者がその「範囲」を超える危険を指摘しても、無視される。「まさかそこまでは起こらないだろう」と言うことにする。

そして想定を考えるのは、建設を推進する人たちが中心である。このところの原発ニュースを見ている、解説するのは、医師などは別にして、原子力発電を促進してきた側の人が多そうだ。原発に疑問を抱く人たちが原発の専門的研究者になる可能性が低いこともあろう。

そのためか、「直ちに人体への影響は考えられない」といった類いの発言など、「安全性」を強調する話が多い。そして、重大な危険に関わる事実は、「後出し」される。事実が分かった時に直ちに出すと、「不安を助長」という理由なのかもしれない。

この問題は、原発の問題だけでなく、津波の高さ想定にもいえる話だ。防波堤・防潮堤の高さの問題の他に、埋め立て地も含めた低地に、住宅や産業用建築物を立地するかどうかの問題が関わる。

2の2. 災害と生活指導

今回のような大災害は、人々の生き方・生活に深くかかわる。それだけに、「人々の生き方・生活」に関わる営みである生活指導にも深くかかわる。そこで、「災害と生活指導」に関して考えたい事を、次のように並べてみた。

- つながりの役割
- つながりの再創造
- 災害とコミュニティ(都市型と田舎型)
- 災害と行政
- 外部支援・ボランティア
- 情報
- 緊急対応・支援
- 災害時の生活
- 生活の再創造
- 福祉・医療・教育などの再創造
- 過去体験・歴史体験の継承
- 商品依存型生活への問い
- 安全安心
- 心・スピリチュアリティ
- 災害観

これらのなかで、すでに書いたこともあるが、まだのことは少しずつ書いていくつもりだ。

2の3. 多角的な情報収集

今回の大災害での私の情報源は、まずはテレビで、そして地元紙だった。テレビは、習慣上NHKが中心だったが、他局を見ると、トーンが異なることに気づく。

ほんの少しのインターネット検索以外は、埼玉や千葉からの玉城一時滞在者の話ぐらいだ。先日、岐阜・名古屋・京都に行き、色々な人に会って、新たな情報を得ることができた。加えて全国紙、その広告欄をみて購入した週刊誌の情報もあった。それまでの枠を超えた情報で、東北在の知人の無事も確かめられた。

情報の多角さが大切なことを改めて感じた。それにしても、日本の公的機関の情報と、それ以外が発する情報、さらに外国機関が提供する情報、それらの差異には驚かされる。

ところで、こんなときに「心を一つにして」というキャッチフレーズが良く使われるが、いささか気になる。「一つ」ではなくて、むしろ多角的な「心」を出し合いながら、協同していくことが大切なのではないか。何かが出す指示に皆が無条件で従うことの怖さがありはしないだろうか。

情報には、「誰が伝えても変わりがないもの」と「伝える人によって異なるもの」に便宜的に分けられる。便宜的といったのは、この両者の区別は、『現在のところでは、こんな風に分けられる』という性格があるからだ。「誰が伝えても変わりがないもの」と見なされるものでも、条件や立場によって変わりがあるし、時間とともに変わることがある。たとえば、原発推進の立場の人と反対の人では、同じ「事実」でも「調べ方」「伝え方」が変わる。外国メディアと日本メディアの違いは際立つ。

「誰が伝えても変わりがないもの」というのはありえないということで、情報全体を不信の目でみることも、ある意味で必要だが、その人なりに、「誰が伝えても変わりがないもの」を当面のところ設定し、その上で、「伝える人によって異なるもの」を取捨選択して、自分の判断にしていくというのが現実だろう。

このように、情報というものは、不安定な性格を帯びやすい。それだけに、「権威あるもの」に従いたくなる。その気持ちに便乗して、「権威あるもの」を前面にだして情報を提示するということが行われる。

そうした権威依存をできるだけ避け、多角的な情報をもとに、自分の置かれた条件のなかで、どんな情報を大切にするか、を考えられるようにしたい。たとえば、放射線の影響でも、年齢や体質など、個人差があるようだ。津波の高さも、地域の条件によって異なる。

政府がいうから、医療専門家がいうから、とって絶対安心というものでもない。無論、絶対危険というものもないだろう。そうした判断の際にも、多角的な人間付き合いをもとにした情報収集が大切だろう。

2の4. 対抗型とやり過ぎし活用する型

災害への対処には、「〇〇年は絶対に大丈夫」という対抗型で考えるのと、「〇〇年に一度はその災害に出会う確率があり避けられないので、その際には、被害を最小にしてやり過ぎし、むしろ災害を活用・きっかけにして、復興に力を注ぐ」という型で考える、という二つがある。

連載した岐阜物語にも、洪水を中心とする災害の話を書いたが、私が生育した輪中地帯は、災害常習地帯だった。私の自身の災害体験の記憶でいうと、1959年の伊勢湾台風と、その数年後の、堤防決壊による床下浸水がある。近くの輪中では、長期にわたる浸水体験がある。岐阜物語で写真紹介した地域でも、浸水災害があった。

近年でも、こんな具合だから、歴史的に災害常習地帯だといえよう。対抗型対処としては、300年前に、幕府が薩摩藩に命じてさせた、木曾・長良・揖斐の三川を分流させる工事がある。この地域の新田開発は江戸期以降が中心であり、その早期になされた対策と言えよう。

洪水がもたらす土は肥沃だ。だから、洪水災害と付き合いながら、洪水をやり過ぎしながら、それを活用する知恵も蓄えられていた。私の子どものころの記憶として、堤防の上には、洪水対策用具・食料などが収められた倉庫があった。最近では倉庫どころか堤防さえ撤去されていることがあり、驚いている。もっと下流域にいくと、家の軒に、船が吊り下げられているところもあった。洪水がくる前提での対策である。

でも、津波対策と言うのは聞いたことがない。私が生育した地域は、海岸線から数十キロ上流だが、今回の津波では、数十キロさかのぼっている。それに、この地域は海拔数メートルなので、少々気がかりだ。

実際のところ、この二つを合わせて対処策を考えているのが普通だろう。「絶対に大丈夫」という対策は、金が

かかるし、「100年は大丈夫」などと言えないから、どうしても、「やり過ぎて・活用する型」を併用するしかない。しかし、原子力の場合、そういうわけにはいかない。少なくとも1000年以上は大丈夫である必要がある。一万年以上大丈夫であることが必要という考えもあるだろう。しかし、現実には、「30、40年は大丈夫」と言う対策だったのだ。

「絶対に大丈夫」というのには、どうも過信があるようだ。津波対策にしても、多くがそうだ。

大部分の人々の暮らし方が、平地で都市型になっている現在、「災害対策」というだけでなく、「暮らし方」自体を問いながら考える必要に迫られているようだ。

国家公務員給与の削減 高いのか低いのか (2011年5月29日)

テレビ報道だと、国家公務員の給与の5～10%削減案が国会に提出されるという。大震災が理由のようだ。震災復興という危機対策の「どさくさ」にまぎれて、「小さい政府」づくりがどんどん進行するような感じがしてならない。国家公務員が削減となれば、地方公務員も連動してくるところが多いだろう。私立大学で、国立大学に準じる給与水準を掲げるところでも連動してくるだろう。

公務員を退職して21年にもなる私には、現在の給与がどうなっているかはよくわからないが、現役公務員から聞くと、かなり下げられてきているようだ。

我が子を大学に通わせるには、一人であれば、年収が600万円以上、二人以上であれば、年収1000万円以上必要というデータが出されたのは、もう10年以上前だが、その額はそれほど変わらないだろう。親の仕送りが減って困っている学生のニュースを最近聞いた。

そうすると、年収1000万円を超す人が少なくなってきただろう現役大学教員が、我が子を大学に通わせられるかどうか、微妙になってきそうな感じさえする。かつては、公務員は「おかたい」だけでなく、かなり高収入と見られていたが、いまや、そうでもなさそうだ。奨学金を借りればいだろうといわれそうだが、今やほとんど貸与の時代。返済できなくて困っている卒業生の話をよく聞く。そういえば、身近にも、その苦勞をしているものがある。

大企業がため込んだ内部留保は、すごい額らしいが。

余談。1970年代のある年の年末に、同年齢の友人たちとボーナス額について、話をした。東京の公立小学校教師が40万円で、東京の私立中学校教師で50万円、当時国立大学教員だった私が30万円だった。当時から公務員が高すぎるとは思っていなかったが、どんどん減額されている現役の人たちは、どういうふうにやりくりしていくのだろうか。

大震災と生活指導 生活指導学会で発見したこと (2011年9月27日～10月3日)

1. 避難移住とコミュニティ

災害で避難を余儀なくされたコミュニティは、移住先でどうなるのだろうか。コミュニティが維持されたところ

ろ、かなり維持されたところ、部分的にしか維持されなかったところ、事実上の消滅へと追い込まれたところ、多様なようだ。

そこには、災害前のコミュニティのありよう、コミュニティ成員の移住の仕方、受け入れ側の状況などがからむ。それには、自治体などの行政のありようもからむ。

たとえば、移居前、コミュニティの結合が弱いところでは、成員の多くは、コミュニティへのこだわりが少なだけで、移住先を家族単位個人単位で決めがちである。その結果、旧コミュニティは、崩壊の方向へと進む。それでも、いつかは旧地に帰還できるという見通しがあれば、成員たちは連絡を取り合い、旧コミュニティの復活の可能性は維持される。

移住の際の住民票移動をどうするか、移住後の自治体サービスを旧自治体で受けるのか、移住先の自治体で受けるのか、ということもかわりがある。

また、地域まるごと移住の際、移住先決定にかかわる自治体が、機械的に割り振ったところと、旧コミュニティの意向をうけて行ったところでは、大きな差異がでたとのことである。

また、移住先に、旧コミュニティで一緒に住んだ人が少なく、新居住地住民のなかに、ポツンと移住した場合には、選択の余地なく新コミュニティに入りこむか、いつの日かの帰住を待ち、旧コミュニティとのつながりを強く持つか、という選択になる。あるいは、大都市のように、コミュニティそのもののつながりが弱く、不特定多数の集団として地域がある場合には、他の住人と同様に、その地域への帰属性が弱いまま住むことになる、というケースもあるだろう。

なかには、こんな事例があるのだろうか。沖縄の戦後、収容所に入れられ、出される時も、基地化のために、旧地域に戻れず、戦後生まれた都市のなかで、多様な地域からの人々と協同して、新たなコミュニティを創造するという例である。

いずれの場合にしても、多様な違いを生み出す要因の一つは、コミュニティ再建創造へと動き出す志向性がどれだけ存在しているか、コミュニティ的關係をどれだけ必要とするか、ということが焦点になってくる。

コミュニティ關係を「個人を縛る」ものとして避ける場合には、コミュニティ再建創造への動向は弱いままになるだろう。

同じことは、災害とは関係なく、沖縄移住してきた人々のなかの多様なありようとも共通する問題が存在している。地域との共有感覚が弱いまま、都市的なサービスだけを自治体に要求する感覚の移住者は結構多い。

そうしたことは、今回の場合はどうであったろうか。今回は、比較的コミュニティ關係が『残っている』地域が災害にあったわけだが、仮に大都市地域で災害があった場合には、こうしたことはどうなるのだろうか。阪神震災の場合は、そうした例だろうが、そのあたりについて考えていくことが求められよう。

2. 避難所のパーティションの話など

避難所は、体育館などの大きな施設が多く、そこに多くの人が居住するので、プライバシー問題もあり、たとえば家族単位に、ダンボールやパーティションで仕切る例をテレビなどでよく見かけた。

外部から来たNPOなどがとりしきったところでは、そういう例が多かったが、旧来の地域リーダーたちがとりしきったところでは、仕切らなかったという。それは、近隣の方の様子・安否が分からなくなるのではないか、

という危惧からだ。

ここにも、コミュニティのありようの問題が登場する。あるいは、人々のつながりについての感覚の差異があらわれているようだ。

別の話

地域の中で、教員層も含めて、比較的裕福な層は、県外避難移住を早目に決め実行したという。そういう条件があったのだろう。そのなかには、我が子の成績が上位にある親も含まれていたようだ。そうした教育問題と経済条件の問題が、避難移住にも影響を与えているようだ。

また、多くの高校が偏差値序列で振り分けられてきたが、避難移住で、その振り分けとはかかわりなく、すべての生徒を受け入れて学校存続が可能になるという事態になり、学校のありようが問われる高校も生まれているという。

もう一つ別の話

震災孤児になった子どもの約半数が、元々ひとり親家庭であったという。矛盾が集中し継続する構図が見られる。

さらに、もう一つ

地域間避難移住が増えると、それまであった地域間の相互認識、相互感情の問題が表面化することもあるという。あの地域の人たちが来たから、「せっかく学力向上に取り組んできたのに、足をひっぱる」という類いの発言が出てきたりする。無論、そういった面だけでなく、これまでとは異なる地域出身の方々が新たな地域にかかわることによって、その地域の豊富化につながる可能性もあるだろう。

以上述べてきた意味では、日本社会、地域におけるコミュニティの衰弱と豊富化の双方の物語が進行していくのだろう。そして、伝統的な地域の衰弱崩壊といったことだけで、地域をイメージするのではなく、再創造の志向性をもった物語が生まれつつあるという点で、注目していきたい。

このように、普段では見られない様々な問題が表面化してきている、というべきだろう。

3. いくつか

これまで書いてきたことのほかに、報告や発言のなかで大震災と生活指導に関わって注目した点をならべよう。

1) 生活指導専門家たちも、被害者への援助者であるだけでなく、そこに住んでいたことから被援助者という体験をする。そのなかで、ふだん援助していることについて、改めて援助される側に立って見つめ直すことになる。

すると、援助される側が、援助する側の論理に合わせざるをえない立場にさせられる、ということに気づく。援助側が上に立って指示し、被援助者がそれに従うということになりがちだ。そういうことを避けるためには、少なくとも、援助者側がいくつか選択肢を用意し、被援助者側が主体的に選択決定できる配慮が必要だ。

2) カウンセラーとかソーシャルワーカーなどと、専門によって業務を使い分けるのではなく、あるいは、「心の

ケア」という以上に、「生活のケア」が求められる事態が見られた。

3) 大震災時には、普段は気付かず無意識に進んでいるが、「学校がもつ含み資産」というものが注目されてくる。

4) 「がんばれ日本」という言葉が多用されているが、被災地に向けてというよりも、日本経済への「檄（ゲキ）」のように聞こえてくる。

5) 「安全だ」「危険だ」という放射能専門家の対照的発言のなかで、どちらの見解を選ぶかが問われる。それには地域差があるが、その選択主体として地域・住民を立てる必要がある。

面倒な年金手続き 行政不行き届きに苦勞 (2011年10月19日)

胆のう手術日の12日に、私は行政的にいうと「前期高齢者」になり、いろいろと行政的扱いが変わってくる。そのための手続きが必要だ。最大のものは年金だ。

受け取り額は、これまでと同じらしいが、これまでの共済年金から、基礎年金プラス共済年金となるので、手続きが必要だ。申請書類記入もかなりややこしいが、添付物をそろえるのも面倒だ。それでも、入院前に準備していたこともあって、一応順調に進む。本当は早目に提出したいのだが、戸籍や住民票は誕生日後のものが必要なので、退院後、役所に行く。そして、受け取り金融機関に口座確認の印を押してもらう必要がある。

申請書類の中で一番困ったのは、次の個所だ。

「昭和36年4月1日から昭和47年5月14日までの間に沖縄に住んでいたことがありますか。」

47年の4月初めから沖縄に住んでいるので、わずか1ヶ月半のことだが、該当するため、「はい」を○で囲む。すると、添付文書が必要だとのこと。説明書に「戸籍の附表または住民票」と書いてある。

そこで、市役所で、戸籍謄本・住民票を取るのと一緒に、申し込んだ。すると、その書類は、当時の本籍地で取ることが必要なことが判明。7年前に本籍地を現在の南城市に移したので、以前の本籍地から取り寄せる必要がある。

「こりゃ面倒だな」と思うし、これで年金受給や年金額にどの程度影響するのか、という疑問もわいた。それだけのことをして、年金額10円ぐらいの変化だったら、面倒はしたくない、という気持ちになる。

そこで、説明書の冒頭に「年金相談は、『年金ダイヤル』をご利用下さい」とあるので、電話する。すごく面倒な本人確認、現在受給している口座まで聞かれる。そして質問する。担当者も即答できないので、調べて30分ぐらいしたら折り返し電話するとのこと。

すぐに電話があった。こちらでは説明が難しいので、近くの年金事務所に問い合わせるように、とのことで、那覇年金事務所の電話番号を聞く。那覇年金事務所に電話すると、対応が早い。20才以上の方で、昭和45年3月31日までの沖縄在住者に年金特例があるが、47年から住んだ私は、該当しないとのこと。

要するに、以上、私がした作業は無駄だ、ということだ。戸籍附表を取り寄せなくてよかったと思う。

と同時に、だったら、公式文書に、最初から「昭和45年3月31日以前に住んでいた人」と書けばよいではないか、と思う。私のように47年と45年の間に沖縄に住んでいた人で、無駄な作業をした人が結構いるのではないか。行政の無駄が、年金受給者にかかる「迷惑」事例だろう。そして、おそらく単純な不行き届きだろう。早急に訂正されることを期待する。

かくして、書類作成を完了し、年金事務所に郵送した。

宮本みち子編著「人口減少社会のライフスタイル」(放送大学振興会2011年)を読む

(2011年10月30日～2012年3月3日)

1. ポスト人口転換 人口の高止まりと減少

次の引用は、「第一章日本の人口の長期的変動」(佐藤龍三郎執筆)の末尾の結論部分である。

「今から半世紀も前に考案された「人口転換」という考え方が、人口転換完了後の姿として想定していたものは、出生率が女性1人当たりおよそ2人の子どもというちょうど人口が維持できる水準に落ち着き、死亡率の面では子どもや青壮年の死亡率が限界まで改善した状態であった。今日のように老化に起因する高齢者の死亡の劇的な減少など思いもよらぬことであった。つまり、人口転換が終わることは出生率と死亡率が再び均衡を取り戻し、人口が静止状態に落ち着くことを意味していた。

ところが、現在の日本では、この「古典的」人口転換の想定外のことが起こりつつある。つまり出生率は、人口維持に必要な水準をはるかに下回っており、他方、高齢者の寿命はさらに伸び続けている。日本人の平均寿命は、現在すでに80年を超え世界最高水準にあるが、今後さらに伸びるものと予想されている。

つまり、(中略)古典的な人口転換の見方の想定を超えた、いわば「ポスト人口転換」ともいえるべき新しい位相に入ったともいえる。それはいまだ人類が経験したことのない「超」少子化、「超」高齢化、そして急速な人口減少に直面する社会である。」 P27～29

この記述は、よく知られている事態である。にもかかわらず、それへの対応は、私にいわせれば、「微調整」的である。対応策の中心は、いまだに「経済成長」を前提にし、少子化を「克服」しようとしている。そして、年金支給開始を遅らせるといった対策が主となっている。

また、経済的財政的対応策は議論されるが、人々の生き方・働き方レベルでの問いを見かけることは少ない。その点で、そうした課題に取り組もうとする本書の4～9章に、私は注目したのだ。

ところで、「ポスト人口転換」を否定的なものにとらえていいのかどうか。「人口転換」という考え方は、今から半世紀も前に考案されたものだというのが、そこには、近代に入って生じたそれ以前の人口激増の結果を前提とする考え方であり、またそれ以降の激増をも想定しており、それらの激増の結果を前提として、「人口が静止状態に落ち着くこと」を想定していた。いわば、人口の「高止まり」を前提としているのだ。

それを、多くの人は「常識」として受けとめているのではなからうか。だから、人口減少、とくに少子化をまぎれず事態としてとらえ、少子化対策をして人口維持をはかる、というのが「常識」化しているのではなからうか。

そんななか、次の考え方はあり得ないのだろうか。激増した人口を、「高止まり」ではなく、人口激増が異常であるので、必要なレベルにまで減少させて、「静止状態」に落ち着くという考え方である。必要なレベルは、自然との関係、人々相互間の関係において、まさに地球と人類の持続可能なレベルと設定してはどうだろうか。

もしかすると、近年の「少子化」は、そうした方向への「無意識」の道かもしれない、というとらえ方があってよいのではないか。

そうした視点で、「ポスト人口転換」をとらえると、問題の見え方が随分異なってくるのではないだろうか。

2. 緩少子化と超少子化

佐藤龍三郎執筆の第2章「少子化と長寿化の要因」では、まず私のはじめて知った指摘から紹介しよう。

世界的に見ると、少子化には、緩少子化と超少子化とがあるという。

「緩少子化の国は北ヨーロッパ、西ヨーロッパの国々、それにアメリカ合衆国、カナダ、オーストラリア、ニュージーランドといったイギリス系の移民が多く移り住んだ国々である。これに対し、超少子化の国は南ヨーロッパ、東ヨーロッパの国々、旧ソ連圏諸国、それに日本、韓国など東アジアの国々である。」 P 37

「合計特殊出生率1.5を境に、緩少子化の国と超少子化の国に分かれる傾向を示している。(中略)現在、合計特殊出生率が1.5以上ある国は、過去に一度も1.5を下回ったことがないからである。また逆に、いったん1.5を下回った国で、その後1.5以上に回復した国は1つもない。」 P 38

「大変興味深いことは、合計特殊出生率が1.5を下回る「超少子化」の国が、ユーラシア大陸の東の端(日本、韓国など東アジア諸国)から西の端(スペイン、ポルトガル、イタリアなど南欧諸国)まで、旧ソ連・中東欧・ドイツなどを介して連続した一続きの帯をなしていることである。これは、「世界の超少子化ベルト地帯」とでも呼べるものであり、このようなパターンが見られることは、超少子化の原因として経済発展の水準の違いだけでは説明がつかない文化的・歴史的背景を探ることの重要性を強く示唆するものといえる。」 P 39

この一連の指摘に、私がコメントする用意は全くない。しばし気にとめて、考えていきたい。

次に、少子化の原因をめぐっての指摘であるが、私の注目個所の抜き書きをしておこう。

1) 「男女とも未婚化傾向が年々強まっているが、男性では、生涯未婚で過ごす人の割合の上昇すなわち「非婚化」傾向も目立っている。」 P 41

こうした方がまわりに「目立つ」わけではなく、ごく「普通」におられる。周りも、それをごく「普通」に受け入れる。かつてなら、「よってたかって」結婚させようとしたが、いまでは誘いはするが強力なものではない。

2) 「15歳から49歳までの女性の避妊実行率を国際比較しても、日本は先進諸国の中で最も避妊実行率が低い国の1つといえる(中略)。しかも、諸外国では、不妊手術や経口避妊薬(ピル)といった避妊効果の高い方法を用いているカップルの割合が多いのに対して、日本では2005年の出生動向基本調査によれば、避妊実行中の夫婦のうちピルを用いている割合はわずか1.9%に過ぎず、コンドームが74.9%と圧倒的多数を占

めている（中略）。日本はピルが普及することなく超少子化になったという点で、世界でもユニークな国といえる。」P42～3

「避妊実行率が低い」にもかかわらず、超少子化傾向にあることに注目しないわけにはいかない。

3) 「結婚しても子育ての経済的・心理的負担や、就業継続と出産・育児の両立の難しさが子どもを持つことをためらう理由になっているとみられ、その背景には個人や家族の生活より仕事を優先する企業風土があるといわれている。さらに近年は、青年層男女の非正規就業の増加など、雇用や働き方の問題と結婚・出産行動の関係も注目を集めている。」P43

この3)は現状をよくとらえていると思う。そうした中で、10代出産が多い状況にも注目していかななくては、と思う。

3. 少子化の社会的背景

4) 「社会学をベースとしたアプローチの主なものとしては、価値観・規範、ジェンダー・家族・社会システムなどの視点から、結婚観の多様化、個人重視傾向、「リスク」回避傾向などの状況が注目されている。結婚に関する男女の意識の不一致は、経済人口学と社会人口学がともに扱うテーマであるが、社会的アプローチでは、特にジェンダーの不公平などジェンダー関係と、結婚・出産行動の不適合に関心が寄せられている。」P43～4

ここでいう「個人重視傾向」が、人間関係の持ち方作り方において、どのようなものになるのか、に注目したい。個人重視と人間関係が対照的なものととらえられて、「孤立化」さえはらむような「個人重視」になるのか、人間関係における個人の選択判断が重視されるという意味で、個人重視が豊かな人間関係を導き出す可能性を高めるのかどうか、という問題である。

5) 「成人期への移行が伸びたのは、一面では高度経済成長により豊かな社会が実現し、若者が高学歴化したことにより、行動選択の幅が広がった結果ともいえる。しかし、最近では経済成長の終焉、グローバル化などの影響で、若者の間に雇用の不安定化と将来への不安が広がってきたことが指摘されている。」P44

これらの動向は、全体として見ると、かつて流行した「パラサイトシングル」に象徴されるような親依存を強め、親子一体化を強めた、とも言いうるであろう。20才を過ぎても、親の子どもへの保護という観念が強い日本での動向をみると、そう言えなくもない。

しかし、親依存の前提に、子どもを「保護」できるだけの親の経済力生活力がある。これから10～20年の期間に、その経済力生活力の低下が進行する気配を感じられるようになった今、この問題をどうとらえたらいいのだろうか。

また、結婚・子育てについての将来不安が、「若者の間に雇用の不安定化と将来への不安」のなかには含まれ

ているだろう。また、10代出産には、そうしたことを意識し「計算」しようとする前に、「できちゃった」というものが含まれよう。

こうした事態の中で、「成人期」のとらえ直しが求められてくる。その一つに、学校卒業→就職、というパターンだけでなく、学校と仕事とを長期にわたって繰り返していくパターンがありうる。「生涯学習」的なそういう長期の生活のありようを支える社会システムの構築がある国、たとえばフィンランドと、そうでない国、たとえば日本との差異も、今後表面化してきそうである。福祉機能を家族に依存する傾向が強い日本では、その家族機能の低下の進行のなかで、これらの問題を検討せざるを得ないことになってこよう。

4. 少子化とセクシュアリティのあり方

6) 「緩少子化」と「超少子化」の2グループ

「このような違いをもたらす「文化的」要因として、どのようなことが想定されるだろうか。ここで出生力決定のメカニズムに戻ると、両グループの大きな違いは婚外出生割合の水準にある。一般に超少子化国では同棲や婚外出生が少なく、緩少子化国では同棲と婚外出生が多い傾向にある。(中略)かつてはどの国でも大部分の女性が結婚し子どもを産むことにより人口置換水準以上の出生率もたらされていたのが、いずれの国でも結婚率の低下が起こったのだが、反応が2つに分かれたとみることができる。すなわち第1グループの国では、結婚という形をとるかどうかは別として、男女のパートナーシップは頑強であり(いわば「カップル文化」が存在するために)、結婚率低下が同棲と婚外出生によって一定程度代償され、出生力低下は「緩少子化」の水準に留まったといえる。他方、第2グループでは、結婚以外の男女のパートナーシップが脆弱(いわば「カップル文化」が不在)であるがゆえに、結婚率低下がそのまま地滑りの出生率低下をもたらす「超少子化」に陥ったと解釈できる。」P 45

7) 「それでは、このような男女パートナーシップのパターンの違いをもたらす「文化的」背景とは何であろうか。この点で津谷(2004)は、北欧や北米およびイギリスやフランスの「個人主義の文化的伝統」と、日本や南欧およびドイツ語圏の「強い家族主義の文化的伝統」を対比し、この違いによるジェンダー・システムの本質的な差異が、1970年代以降「個人主義社会」で婚外出生率が急増した背景にあると考えている。とりわけマクドナルドは、家庭外(職場など)と家庭内におけるジェンダーの公平を区別し、前者が高水準にあることと、後者が不公平な状態におかれていることの葛藤ないし不一致に、今日の先進国における超少子化の原因を見出そうとしている(中略)。このようにジェンダーの状況と出生力を結びつける見方は、わが国でも有力であり、超少子化国(それも東アジアの日本、韓国)で、男性の平均家事時間が格段に短いことはその1つの例証とされる。しかし、それだけではまだ十分な説明とはいえず、さらに男女間の「親密さ」(intimacy)や情愛(affection)の表現様式を含む広い意味のセクシュアリティのあり方の差異が、検討されるべきではないかと筆者は考えている。最近、日本でセックスレス・カップルが増えているという先の指摘はこの議論につながるものである。日本のような超少子化の国の根底には、性・生殖に対するネガティブ(否定的、消極的)な態度、文化、社会制度が横たわっているのではないだろうかという疑問も検証されるべきであろう。

いずれにしても、家族主義(中略)の強靱さとカップル文化の脆弱さに着目する見方は歴史的文化的要因の探求を促すものであり、今後掘り下げた研究が必要な課題といえよう。」P 45~6

「セクシュアリティのあり方の差異」を私なりに整理すると、セクシュアリティが、支配関係のなかでとらえられているのか、自由対等関係のなかでとらえられているのか、という問題が焦点になる。たとえば、夫婦間のDVは、前者とかかわりがある。

2) で述べた「避妊実行率が低いにもかかわらず、超少子化傾向にある」と言う問題も、このことにかかわるのだろうか。

「性・生殖に対するネガティブ（否定的、消極的）な態度、文化、社会制度」を検討することは重要だろう。それは、上に述べた支配関係のなかでセクシュアリティをとらえられてきた傾向をどうするか、にもかかわる。

性を否定すべき「悪」のなかでとらえ、「恥じるべきこと・隠すべきこと」と見る環境が強いなかで、私自身も育てられてきた。しかし、民話の世界・産育史などでは、そうでないものが日本のなかにも存在してきたことを示している。にもかかわらず、朱子学的教育観・明治期教育体制がそうしたものを抑圧し、支配的關係の中でセクシュアリティをとらえる傾向を強めてきたことを見ておく必要がある。

その点では、「セクシュアリティ」のとらえ方に健康的善的なものが相対的に強い沖縄、ということも言えよう。沖縄の出生率の高さは、そのことに関係があるかどうか、検討してみる価値はある。

先に述べた人間関係、ないしは関係性には、個人重視傾向のものと、家族主義的なものが、仮にあるとすると、この後者が低下しつつあるのが、東アジアの現状ともいえよう。それが、人間関係の希薄化・孤立化へと導かれないためにはどうすればよいのか。そこが問題の焦点の一つだろう。それは沖縄でも言いうるであろう。

5. 一企業に職業人生を尽くす形態の問題と変化

「第5章 変わる仕事の世界」では、これまでの日本型雇用システムの大変化が生じていること、それが企業サイドの論理が主導し、非正規雇用が増加し、格差拡大が進行していることを指摘する。それにとどまらず、「新しい働き方の展望」について論じる。

労働者側被雇用者側がどのようなものを構想し、経営側政府側にどのように要求を提出し、また、自らどのような仕事計画を提出し実践していくのか。それとからみつつ政府側経営側がどのような雇用形態を構想し生み出していくのか、注目していかななくてはならない。

フィンランドを、2010年、2011年と訪問して気付いたことを、別の連載記事で書いているのだが、そこで示唆を受けたことの一つに、職場、職業、そして学校・生涯学習について、がある。

労働者が、自分の専門的力と希望をもとに職場を見つけ、そこで数年間働くと、同一企業かそうでないかは別にして、別の職場に移ることが広く見られる。その移行期には、完全休養、あるいは学校に通い力量のレベルアップを図ることが多いが、その間の収入ゼロを補うものを、国、企業、組合など色々なところから受け取ることができる。生活不安を感じることはない。福祉国家らしい。加えて学校はいうまでもなく無料である。

特定の一企業に職業人生を尽くすという、日本で広く見られる感覚とは随分異なる。いってみれば社会的に働いている、という印象を受けるのだ。

日本の場合、それとは対照的に大部分の人は企業に雇用されて働き、可能な限り転職を避ける気持ちが強い。

そのため、ある意味で企業が労働者の生殺与奪の権を持っている。そして、労働組合の多数が、産業別職種別ではなく企業別になっており、結果として企業に従属する発想が強くなる。

日本で、フィンランドに似た性格をもつ職業としては、医師・看護師などの専門職がある。需給バランスの関係で、労働者側が強い。そうした状況を、需給バランスが雇用側に有利な所でも築きたい。そのためには、社会的な協同が重要になってくる。国家的な保障も重要だ。

6. 新しい働き方 ワーク・ライフ・バランス

宮本さんは、「新しい働き方の展望」のなかで、「ワーク・ライフ・バランス」について、以下のように述べる。

「現代における働き方の指針として大きな位置付けを与えられているのがワーク・ライフ・バランス (Work-Life Balance, WLB) で「仕事と生活の調和」と訳される。ワーク・ライフ・バランスには多面的な意味がある。日本では少子化対策・男女共同参画の文脈で語られることが多かった。しかし、WLBは、労働時間政策、非正規労働者政策など働き方の全般的な改革に関わるテーマである。

欧州委員会の外郭団体である欧州生活労働条件改善財団 (ダブリン財団) が、2003年に刊行した『職業生涯にわたる新たな時間編成』と題する報告書では、ライフコースという視点から、これまでの「教育訓練→フルタイム就業→引退段階」(男性)、「教育訓練→第1段階の稼得就業→家族世帯段階(並行してパートタイム就業も可能)→第2段階の稼得就業も可能→介護段階(並行してパートタイム就業も可能)→引退段階」(女性)という男女別・年齢別のライフコースから、各年齢を通じて教育と労働と余暇時間が並行して行われるようなモデルを展望し、これを支援促進するような新たな制度設計を考えるべきとしている。

また、2005年、同財団刊行の『ライフコースにわたる労働時間選択：社会保障の構造を変える』では、ある時期に就業を中断したり労働時間を減少させたりすることが本人にとってリスクとならないような社会保障制度のあり方を目指すべきだと提言している。また、人々を特定の雇用関係に依存する状態から切り離し、人生のそれぞれの時点で、自由に就業に関する意思決定ができる独立性を与えることも意図している。

人々が、生涯において、従来のようなフルタイム労働に限定されず、パートタイム労働や有給休暇制度を取り入れることによって、仕事と生活のバランスのとれた生涯プランを樹立できる社会でなければならない。生涯にわたる労働時間配分という視点が重要である。」P105～6

私が長く主張している「人生創造」と響き合う提起だ。また、ここに書いてあることは、フィンランドではすでに現実のものとなっている。日本ではどうなっていくであろうか。現実化するためには、政治経済の問題と、人々自身の人生創造とが重なりあわないと実現しないことだ。

本書では、具体例として、ベルギーのキャリア休暇制を紹介している。

「ベルギーの休暇制度は、ワーク・ライフ・バランス政策に純化したものである。2001年に労使交渉によって成立したもので、休暇に関しては時間クレジット制に転換した。労働者は、時間クレジットを使って理由を問わず一定時間の休暇が取れるようになった。育児・家族看護及び末期看取りなどのテーマ休暇の場合には使用者は申請を拒否できず、それ以外の場合には企業労働力の5%を上限とすることができる。完全休暇及びハーフ

タイム勤務の上限は1年だが、労使協定で5年まで延長できる。休暇中の労働者には、月500ユーロの手当が連邦政府から支給されるが、それに上乗せ給付を設ける自治体もある。」P106

こうした形を取ると、経済に悪影響を及ぼすという議論が出そうだが、フィンランドではそうではない。このところ、EU諸国の国債格付け引き下げが話題になっているが、ドイツ、オランダとならんでフィンランドはトップの位置のままだ。アメリカや日本より高いのだ。それだけ経済力が高く評価されているようだ。

休みを十分かつ適切にとることが、むしろ経済にもプラスになる、という発想が必要だろう。

7. 教員の研修制度休職制度の活用

ワーク・ライフ・バランスは、政治経済の問題だけでなく、人々の生き方・働き方の問題でもあると、前回書いた。日本では、制度上未熟な段階にあり、なかなか難しいところがある。しかし、すでに制度的に可能であるのに、制度をうまく活用していない、ないしは活用しづらいことがあるのではないかな。

したがって、制度的な改革と並行して、既存の制度をうまく活用するありようの追求が求められよう。

教職員に例を取って考えると、研究研修制度の活用、休職制度の活用がある。

まず大学教員の場合。大学教員は、研究のために国内外に出かける制度があるが、順番がなかなか回ってこない。そこで、自費研修という制度を使う人がいる。自費なので、研究旅費や研究費は出ないが、給与は支給される。その期間の講義などをどうするかには、同僚の協力が必要だが、そういう形を多くの人が取れば、他の人も行きやすくなる。海外の大学では、5年に一回はサバティカルがとれるのがごく普通だ。フィンランドでは、一般の雇用者全体にそういう制度がある。日本の場合は、大学でさえ難しい事情にある。

自費研修は、財政的に難しいという場合に、滞在国政府の資金を得る人もいる。また、大胆に休職して、全くの自費で賄う人もいる。

私の場合を書こう。30年ほど前に在職した琉球大学では、国費による海外研修はなかなか順番が回ってこない。年齢制限の50歳直前によく行けるのがごく普通だった。当時の地方国立大学の場合、それが普通だった。しかし、国内研修はそうでもなかった。勤続10年ぐらいで30代後半になった私は、それを活用した。

その後勤務した中京大学の場合は、比較的取りやすかった。中には、数年の間隔をおいて2回目という人もいた。私は、10年近く勤務して50代前半でカナダに一年間行った。

そのカナダで、現職の中学高校教員で、日本からきてトロント大学の大学院に在学している人に何人かであった。私立学校が多いが、公立学校の人もいた。費用もでて派遣という形ではなく、休職という形が多かった。当時は、公立学校教員が休職で海外大学院に入学できる制度を持っている自治体は少なかったが、その後増えて、全国的に広まった。3~4年前、琉球大学の修士課程に在籍する他府県からの現職教員に複数出会った。ようやく、この制度を活用する人が広がったのだな、と思った。

ところで、近年の日本の教員は、夏休みも実質的な出勤が義務づけられる事態になった。かつては「融通」がきいたが、いまではそうではなさそうだ。カナダやフィンランドなどでは、夏休みは2ヶ月以上、本当に休みなとは対照的だ。教職員に限らない。むしろ一般的でさえある。フィンランドなどでは、セカンドハウスを持つのがごく普通で、そこで暮らすのだ。郊外の湖沼のまわりなどには、そういう家がいっぱいなのだ。

働き過ぎで休み下手なため肉体的精神的に疲労が蓄積する事態を変えることに、多くの人が挑戦してほしいものだ。

8. 仕事おこし 社会的企業 労働者協同組合

現代日本での職場は、企業による雇用システムが圧倒的部分を占めている。学校教育も最終的には、それらで働くことへとつなげられ、その意味で、企業による雇用システムに学校教育は従属しているといっても過言ではなからう。ストレーターコースはそのような流れの典型というか、標準にされたものである。

その結果、そうでないものは例外にされ、学校教育で扱う対象となくなっている。その動きは、1960年代に圧倒的なものになり、自営業につくものを育てるとか、起業者を育てるといのは、眼中に置かれなかった。

幼児教育から起業家教育をするというフィンランドとは対照的でさえある。また、特定企業での雇用が終身続くというイメージではなく、数年ごとに職場を変えるのがごく普通というフィンランドの状況とは異なる。そして、1990年代ごろまでの日本での企業雇用は、「就職ではなく就社だ」といわれるように、学校での職業教育を「あて」にしない状況さえ広く存在した。

ところが、事態は急激に変化してきている。企業に依存して職場を得ようというのでは成りたちゆかなくなり始めたのである。

そうしたなかで、企業に過剰依存せず、「社会的に」職場を保障していく動き、個人ないしは共同で仕事を実現保障していく動きが広がり始めた。その動向を、宮本本は、たとえば次のように述べている。

「地域に根ざし、地域のニーズを掘り起こしながら、社会的ミッションを持って、働く人たちの生活を支える仕事作りが展開している。その形態は多様で、雇用されて働くのではなく、起業したり、非営利法人（NPO）を立ち上げて仕事を起こしたり、共同出資による労働者協同組合、ワーカーズコープなどである（谷本）。

今後期待されるのは社会的企業である。社会的企業は、社会的課題の解決をミッションとする事業体の一種であるが、ボランティア団体や慈善団体と異なるのは、有料のサービス提供活動による社会的課題の解決を目指している点である。社会的企業が増えていくことで、従来何らかの理由で市場から排除されていた社会集団が、新たに市場に参加できる機会が増えていくことが期待される」 P107

「失業率の高い社会になり、不安定雇用が拡大しているなかで、雇用されて働くという働き方だけに頼ることの限界が見えている。また、利益優先経済では放置される重要なニーズを満たすために、新しい仕事の創出はこれからの重要な課題である。」 P107—8

私のように「田舎」に住んでいても、しばしば出会うシルバー人材活用組織もその一つであろうが、宮本本は、そうしたなかの労働者協同組合に注目している。

「労働者協同組合と類似の法人としては、企業組合やNPO法人がある。しかし、企業組合においては、出資だけして組合事業に従事しない組合員や、組合員ではないが雇用契約に基づき組合事業に従事する者が存在しているため、「協同で出資し経営し、働く」という働き方の実現には不十分である。一方、NPO法人には出資や分配

の制度がなく、やはり「協同で出資し、経営し、働く」という働き方の実現には不十分である。このような理由で新たな法人制度が必要という立場から、労働者協同組合法の制定に向けて全国で運動が続いている。」P108-9

欧米ではこうした動きは広く見られるようだが、日本での追求に期待したい。

9. 家族機能の変化 人口減予測

家族にかかわってだ。

「40代、50代の人々の意識を見ると、子どもからの経済援助に関しては、「期待しない」が多数を占めている。一方、介護に関しては、扶養と比べると、「期待する」が多い。それにしても、期待しない割合が最も多い。このように老後に関しては、親は子どもに期待せず、自前でやりたいとする意識へと変わったのである。子どもに対する遺産についても大きな変化が見られる。子どものためにお金を残したいとは思わない人が増加している。

世代間で見ると、少子高齢化は、税金や社会保障費負担の増加という形で、年長世代に対する年少世代の扶養負担の増加をもたらし、世代間の対立を発生させる。親子間では、経済成長期に資産形成をした親から、子へと教育費などの形で経済援助が続く関係が見られる一方で、高齢の親の扶養は子どもの責任ではなくなり、介護は社会化しつつあるが解消しがたい問題は残っている。

少子高齢化が進むなかで、従来のように個々人の家族の範囲で諸機能を果たすことができないことを認識し、社会的レベルでケアの保障、所得の再分配など、社会保障制度の全体構造を再構築する必要がある。」P124-5

記述のなかの遺産のことだが、現在の40代、50代は、60代、70代と比べて、「子どものためにお金を残したいとは思わない人が増加している」というわけだが、そういう意識を持つ背景には、実際に経済的余裕・力量の問題があろう。その一つに教育費の増大が大きいのしかかっているだろう。かれらの子ども世代が、大学進学率50%を越したのだから。

この記事を考えているちょうどその時、国立社会保障・人口問題研究所の「日本の将来推計人口」が公表された。新聞見出しには、「人口50年後3割減」とか「65歳以上4割に」と書かれている。いずれも、現状より「ひどい事態」になるから、なんとかしなくてはならない、というトーンに彩られている。

だが、そういう見方だけでいいのだろうか。たとえば、次のような別の見方も存在しうるだろう。

・現在の人口に至る前の60～70年間、あるいは、130～150年間の爆発的人口増加を考えると、何年前かに復して、過剰な人口が落ち着いていくというとらえ方もあるだろう。急減を恐れるなら、これまでの急増への対応をしてきたことをどう考えるのか。

・いずれにしても、19世紀半ばから21世紀半ばまで日本は人口増減が激しい2世紀だ。ではいつどのようにして定常化するのか。それとも、増減のいずれにしても激動の激しい時代がその後も続くのか。

「人口50年後3割減」という予測は、その間に激しい変化が起こらないという前提だが、そうだろうか。

社会保障などについても、現在基準の予測でいいのだろうか。経済事情の激変、戦争と平和の問題、人々の生き方・生活の変貌、大災害などをどう勘案するのか。

・「65歳以上4割に」というが、平均寿命予測の男性84.19歳、女性90.93歳をもとにすれば、65歳以上が25%となるのが、平均的水準となるのだから、「とんでもなく多い」と表現するわけにはいかないだろう。それに、平均寿命が伸びれば、65歳という区切りも何歳か上にあげないわけにはいかないだろう。

それよりも、この年齢時期になれば、個人個人で多様化する状況をふまえると、一律に年齢で切る発想から卒業していかなくてはならないだろう。

・現在の社会保障制度は、人口激増時代かつ経済高度成長時代を前提に設計されているが、そうでない時代に必要な設計はどんなものか、を議論する必要がある。

・人々の生き方、家族の形なども、人口激増時代かつ経済高度成長時代を前提に考える発想がしみついているが、人口激減、経済定常化または縮小時代に対応して、変化していく、変化させていく時代だ。従来の発想からどのように卒業して、どのような生き方、『家族的なもの』を人々が作りだしていくのか。そのことを視野に入れる必要がある。

こうした見方も含めて、宮本本の提起を受けとめ、考えていきたい。

10. 長時間労働 過剰ストレス 男性の子育て 自殺

「第8章 現役世代の光景」（宮本みち子執筆）のなかの「仕事と家事・子育ての狭間にある男性」という項での次の指摘に注目したい。

「今日では、「稼ぐだけ」の父親像はもはや正当性を失い、直接的な子育てへの貢献が求められている。朝日新聞社が実施している定期国民意識調査によれば、「子育て」について、「夫婦とも同じくらい担うべきだ」という意見が2009年には74%を占めた。男女間で意見に差はなく、20～50代では8割前後と多い。しかし、実際には父親の家事・育児の負担は依然として少ない。父親の子育てへの関わりが十分でない理由として、父親の7割強、母親の6割強が「仕事が忙しすぎる」を挙げている。しかも、近年職場環境は、人員削減のなかでの効率化が進み、労働時間はむしろ長くなっている。しかも、最も労働時間が長いのは、乳幼児期の子どもを持つ30代の男性である。未婚の30代男性においては、労働時間が長いために結婚を準備する余裕がない状態も見られる。

意識や規範の面では変化が進行しているにもかかわらず、労働の現場では稼ぎ手として、男性が労働に縛りつけられる状態にあるというジレンマがある。」P148-9

「男女間で意見に差はなく」になってきたことは重要なことだ。ようやく性別役割分業意識が弱まり始めたというべきかもしれない。だが、意識ではなく現実となると、依然として事態は変わらないのだ。

問題の集中点は、労働時間の長さにある。政治・社会制度側、雇用側、労働者側のいずれも問題にしなくてはならない。それらのいずれにもあらわれてくる社会的風土のようなものも問題にしなくてはならない。たとえば、長時間労働を受け入れてしまう体質、許容する体質、さらにいえば、長時間労働を熱心に働いている表現だとさ

えとらえてしまう体質を問題にしなくてはならない。間接的には「休養は悪で、減らすべきもの」「労働＝絶対善」のような発想をも問題にしなくてはならない。

こうした問題は、長時間労働を批判する人々の中にも忍び込んでいる。実は私なども、そうした体質に長く浸ってきて、そこからの卒業にとてつもなく時間がかかっている。のんびりの田舎暮らしをしている今も、まだ完全に卒業したとは言い切れない。

そういうことを問いにくい体質が、次に示されるような「悪化する労働環境の中での男性のストレス」を許容し、自殺者を増やす要因ともなる。

「日本の自殺者は、年間2万人から2万5000人の間で推移していたが、全国で「リストラ」が進行した1997年から98年にかけて、一気に3万人を超え、その後も持続している。1990年代の自殺の理由は、「勤務問題」または「経済生活問題」が半数を占め、50代の男性が中心であった。女性の自殺者は男性よりは少なかったが、うつ病などで受診した数は男性を上回った。

定年前の働き盛りの世代を経済ショックが直撃し、中高年の失業の増大によって生活不安が大きく拡大したことが主な要因と考えられる。しかし、2000年代に入ると、20～40代の増加が顕著である。リストラや雇用構造の変化のため、将来に展望を見出せない若者や中堅世代が増加していることをうかがわせている。」P149-150

こうした事態を受けて自殺防止の取り組みが盛んになっているが、その背後にある「勤務問題」「経済生活問題」への取り組みが不可欠だ。わけても長時間労働・過剰ストレスへの対処は欠かせない。

最近強調されるメタボ問題も、これらの世代の長時間労働・過剰ストレスへの対処を抜きにしては語れない。

さらに「豊かに生きること」と「働くこと」の関係をも問わなくてはならない。「働くこと」を過剰に最高地位におしあげてはいないのか、も問わなければならない。働くことと関わる経済の成長を求める発想をも問わなくてはならない、と思う。

4. 2012～2013年

生涯学習と職業能力開発

(2012年6月25日)

書店で、社会政策学会誌「社会政策」第3巻第3号(2012年ミネルヴァ書房)というのを見つけて読んだ。書籍を初めて目にするだけでなく、この学会そのものも初めて出会う。特集タイトルが「変化する教育訓練とキャリア形成」という、私に関心をもつものなので、読んだというわけだ。他分野のものに触れると新鮮だし、異なる視点からの見方に触れられるので、刺激になる。

いくつかの論文をよんだが、佐藤厚「企業における人材育成の現状と課題」の末尾に、次のような記述がある。

「我が国の生涯学習の議論は、入社前は学校、入社後は企業というように、分断されて展開されてきた。欧米での生涯学習に刺激されながらも、我が国での議論が職業能力開発に結び付かずに来たのは、皮肉にも発達した企業内教育が背景にあったからである。発達した企業内教育が機能低下しているとすれば、今後は、職業能力開発をベースに生涯学習のしくみを検討していくことが必要である。その意味でも、学校、公共職業訓練機関などとの連携により企業内教育訓練を補完するしくみの確立が求められている。

こうした企業と学校や各種教育機関とを連携し、生涯学習システムを展望する試みは世界的な流れにもなっている。そこでは伝統的な教養と21世紀に要求されるスキル要件との亀裂を埋めて新たな方法で統合し、中等教育後に就労しながら学習できるシステムを開発することで、これまでドット(点)として孤立していた学校、訓練機関、企業といった訓練の場が線でつながれ、結び付けられる——、そんなイメージで21世紀の生涯学習社会が構想されている。」 p 21

欧米における職業能力開発と生涯学習の結びつきに比べようもなく、日本の生涯学習が未発達であることは、かねてから、くりかえし言われてきた。私自身もフィンランドにおけるそのあたりの事情を実見し、本ブログでも何回か紹介言及した。

この日本における未発達の打開には、本論文が提起することに加えて、次のことが並行して取り組まれる必要がある。

- 1) 長時間労働の解消。1ヶ月、半年、1～3年といった、学習のための長期休業期間の保障
- 2) 一生一職場ではなく、流動的になっても、地位・仕事・生活が保障されるシステムの確立。

個人差が大きい、早期退職あるいは高齢就労ができるような、五〇代から七〇代までの希望者就労を可能にする条件整備。

3) 職業訓練が、医療福祉系専門職、技能工養成などを中心とし、加えて補助的なものとしてITや語学分野で行われている現状を大きく超えて展開する方向の追求。実業高校・実業大学が生涯学習と結びあい、生涯学習的比重を高めていくこと。そして、技能技術訓練にとどまらず、研究開発的能力育成を中軸に位置づけていくこと。

ワーク・ライフ・バランスというタテマエの実質化

小崎敏男、牧野文夫編著「少子化と若者の就業行動」（2012年原書房）の第4章は、「女性就業と子育て支援」というタイトルで、次のように述べている。

「女性の社会進出が始まった頃は、家庭や職場で性別役割分業の考え方が支配的で、女性が働きながら子どもを育てる社会的サポートも乏しかった。そのため仕事と家庭（家事・育児）の両立は困難で、結婚・出産の先送りが起こり、女性の就業と出生率は逆相関を示していた。しかしその後、仕事と家庭の両立支援の充実（育児休業制度や保育サービスの拡充など）や、柔軟な労働時間の運用、性別役割分業にとらわれない考え方の浸透などの変化が実現した国では、女性の就業と出生率の相関関係が変わり、出生率と女性労働力率がともに高いという正相関を示すか、少なくとも両者の逆相関の程度が弱まったというのである。一方、女性の社会進出が増大していく中で、男女役割に関する価値観や働き方の変革、社会的な子育て支援の政策展開が遅れた国では、多くの女性にとって仕事と家庭の両立の道が見出せず、出生率も女性労働内力率も低くとどまっているとされる。」P77

私たちが結婚し育児する70年代にもすでに、これらのテーマは政策上、そして社会上でも大きなテーマとなっていた。しかし、共稼ぎで子育てをするというのは、恵まれた条件と、「断固たる決意」というか「姿勢」がなければ叶わぬものだった。60年代の女性研究者は独身で貫き、70年代は結婚するが子どもを持つことは断念し、80年代に入ってようやく子どもがもてるようになった、ということをよく耳にした。

私たちは、なにがなんでもやりぬくんだと言う、かなり「無茶」な決意と、学生や近隣の方々の支援の中でやってきたのが実情だ。合わせて、双方とも教員で、当時としては恵まれた条件があったことも幸いした。

私たちのありようが普通かと言うと、そうでもない。それがこの文がいうように、日本は逆相関であることが、それを示していると言えよう。本書は、次のようにも述べる。

「少子化対策における働き方の見直しの変遷をおおまかにまとめると、「女性の仕事と家庭の両立支援」から出発して「ファミリー・フレンドリー」という有子夫婦の仕事と家庭の両立支援に進展し、最終的には子どもを持つ人だけでなく労働者全体の働き方の見直しつまり日本の労働環境・職場風土の見直しとなる「ワーク・ライフ・バランスの推進」という働き方改革の視点へとつながった。その背景には、日本の総人口、特に若年層を中心に人口が減少していくという危機感が現実のものとなってきた中で、企業としても性別・年齢・配偶関係にとらわれずに多様な労働者を活用する必要性が生じ、性別役割分業のもとで時間制約のない男性労働者だけを想定した働き方を見直さざるを得なくなってきたという事情がある。」P87

「ワーク・ライフ・バランスについては、様々な定義があるが、それらを総合してみれば、「男女・年齢を問わず誰もが、多様なライフスタイルやライフサイクルに合わせて自由に働き方を選択でき、希望する仕事と生活のバランスを実現できる状態」といえるだろう。」P87

このように書かれているが、「ワーク・ライフ・バランス」はずっとタテマエであり続けてきた。むしろ、非正規雇用の激増、そして依然として長時間労働が続くというか、余計にひどくなっている状況がある。教員なども、大学にしても、小中高校にしても、かつてより労働時間が大幅に伸びているのではないか。労働時間制限が

実質的にない状況、サービス残業が日常化している状況がよく見られる「業界」なのだ。

だから、「ワーク・ライフ・バランス」のタテマエをいくら政策化しても、いかに実質化するかが焦点となる。政策だけでない。人々の意識・行動としても、「ワーク・ライフ・バランス」を具体化する動きを格段に強める必要がある。

「男女・年齢を問わず誰もが、多様なライフスタイルやライフサイクルに合わせて自由に働き方を選択でき、希望する仕事と生活のバランスを実現できる状態」を実質化できる条件だけでなく、それをめぐる経験を蓄積して、新たな創造へと向かう流れを拡大する必要がある。残業を断固として減らす行動ができるかどうかは、その一つの焦点だろう。『不景気で会社が大変だから』という理由にまるめこまれてしまう体質をどれだけ変えられるのだろうか。また、生き方そのものを考え、多様な体験をしていく蓄積を一人一人がもつ必要がある。終身雇用制を正規の職業のありようだ、という考え方からの卒業も必要だろう。

「ワーク・ライフ・バランス」的な事が言われ始めて30年なのに、さほど変化はない。実質化するのに、これから何年かかるのだろうか。

生活の変化がゆきついた 国内モデル不在と欧米基準

(2012年8月9日)

中川清「改訂版 現代の生活問題」(放送大学教育振興会2011年)に、次のような記述がある。

「確かに、日本の生活は激しく変化してきた。多くの親たちは、自分たちと同じ生活を繰り返すことを、子供たちに望んではこなかった。そして子供たちの多くも、親の生活を乗り越える変化を当然のこととして受け入れてきた。「下層社会」から「中流社会」への変化は、各世代のこのような生活の営みによってもたらされた。とりわけ戦後の生活は、かつてないほど激しく変化してきた。しかも変化の行方については、昨日よりは今日、今日よりは明日が「よりよい」生活であることを疑わなかった。生活の営みは「よりよい」変化においてしか受け止められなくなる。

けれども同時に、この変化の頂点において、絶えず変化し、現に過ぎ去っていく生活とは一体何なのか、という疑問が生じたことも事実である。変化に身をまかすことにある種のとまどいを感じ、これまでの生活の変化において身につけ被ってきたものの大きさを、あらためて振り返らざるをえなくなっているのではないだろうか。そればかりではない。21世紀に入ると、子供たちが親の地位を乗り越えることは至難の業になりつつある。階層脱出はもとより、階層維持すら困難な状況を迎えているのである。

ここで問われているのは、変動にともなう断片的な遅れや歪みではない。普通の人々が経験した生活の変化が共通に抱えている問題の性格である。激しい生活変動の結果としてあらためて問われているのは、生活変動そのものを包括的に振り返り検討することではないだろうか。」P19~20

引用初めの「親の生活を乗り越える変化」がいまや「変化の頂点」にいきつき、むしろ「親の地位を乗り越えることは至難の業になりつつある」という指摘は、その通りである。

※補注 「右上がり発想を前提にすれば、その通りだ」というべきだろう。

そして、このような「よりよい」変化の継続にかかわっての次の指摘は注目される。

「3つ目の特徴は、日本の生活状態の把握に際して、常に欧米の生活を参照基準にせざるをえなかったことである。このため、生活モデルは日本社会の内部にはなく、当然のこととして外部に求められてきた。(中略)

生活モデルを内在的に提示すべき中産階級(ミドルクラス)が脆弱だったともいえよう。日本の中産階級は、自分が帰属する社会の伝統と、一方で強固な参照基準を突きつける欧米との間で絶えず揺れ動いていた。自らの立脚点において動揺する中産階級に生活モデルを構築するリーダーシップを期待することはできなかったのである。」P20~1

この指摘は、ある意味であたっているだろうが、私自身は、1960年代には、ある意味でのモデルが、「ストレーター秩序」として確立し、それが今日まで続いていると、言い続けてきた。それは、ここでいう内在的なものではなく、「外から」きたものであるとしても、子どもが大人になり、さらに定年を迎えるまでの生活のモデルであった。

そのモデル実現が、少数に制限される事態の中で、それに代わるものの不在状態が続いているのが、今日なのだ。まさに、「生活変動そのものを包括的に振り返り検討すること」が「あらためて問われている」のだ。

次の指摘も興味深い。

「矛盾がしわ寄せされているために生活のイメージは「貧しさ」に覆われることになった。この貧しさの意識は同時に先にみた「階層脱出」の深い動機でもあった。こうして、普通の生活も問題を抱えているという認識が常態化する。貧しさが生活を覆うという認識構図は、欧米基準との際立った対比とも相まって、日本の貧困を、社会内部の階級・階層問題として以上に、生活問題全般として理解させることになった。」P21~2

世界的に見て、上から数えて何番目という「豊かさ」の位置にありながら、「貧しさが生活を覆う」という認識構図が広く存在し、年収1000万円の人が、なお給与増を望む事態は珍しいことではない。そしてまた、年収200万の人も600万の人も、同じように「生活が苦しい」という認識構図を共有しあう事態が存在しているのは注目すべきだろう。

そうした中で、次のような視点を本書は提起する。

「日本の生活経験は、欧米との対比では特殊だといわれてきた。しかしながら、アジアとくに東アジアの生活経験と比較すると、日本との間にいくつかの共通点を見出せるのではないだろうか。「貧しさ」から「中間層化」さらに「少子高齢化」という流れは、東アジア地域でより圧縮された形で経験されており、日本をフィールドとした「現代の生活問題」をより広い文脈で考えることができるかもしれない。」P25

注目したい視点だが、その東アジアの都市地区の代表格ともいべき、上海・シンガポールなどでは、これまでの日本と同様、欧米志向が強い。本書は、東アジア特有のものをどう把握するのだろうか。

ところで、沖縄もまた、欧米志向を潜在的にもっているが、地域特有の認識が存在している。全国的に言えば、年収300万円以下の生活と言うのは、「大変」なことであるが、沖縄ではごくありふれた生活であり、その生活は『苦しい』といえれば苦しいが、最低水準でやっていけない、という深刻な把握でもない。ここあたりをつきつめていくと、何かのヒントが生まれるかもしれない。

繁忙ストレス病気と養生 自己他者社会のケア

(2012年9月6日)

9月1～2日の日本生活指導学会課題研究A分科会「今日における生活指導実践主体の問題」での瀧澤利行「今日における生活指導実践主体の問題—生活指導実践と「養生」的接近」提案及び、間宮コメントである。

注目点を並べ、コメントしていこう。

1) 対人援助専門職の健康をめぐる状況。

「この種の統計はとりにくいので信憑性は薄い」という断り付きだが、保険医学会雑誌の報告にもとづくと、教員の平均寿命（一般男性教員平均 約73歳 教頭退職者約69歳 校長退職者約67歳）という驚くべき数字が並べられる。「驚くべき」と書いたが、実はそのような話はよく耳にする。

また、一月あたりの超過勤務が平均80時間という数字、ある県での病気療養退職者が0.7%（他の通常の職種では0.3～0.4%）という数字が並ぶ。間宮コメントにも、心身不調を理由にした教師退職者が年間5000人で、自死者は年間約200人だという。

また、看護師の高喫煙率24.1%（一般女子12%）、常習飲酒20.2%（一般女子9.3%）という数字も示された。

困難な要素を多分に持つ業務だが、加えて長時間労働や夜勤を含む交代勤務などが強いストレスを与え、心身不調をもたらす。それは最近の大学教員にもいえよう。

そして、こうしたありように批判的であり、改善のために努力する人たちも、「働き過ぎ」に陥っている例が多い。

ところで、こうした働き過ぎの対極に、大量の失業者無業者がいる。いわば、労働をめぐるの、正規—非正規とは別の次元の格差が存在しているようだ。それは「現役」と「退職者」との間にあらわれることもある。

こうした格差打開のための方策としてのワークフェアなどは、日本では大変限定的だ。だから雇用者を少数限定にして、少数者をとことん「こき使う」というイメージさえ思い浮かぶ。

こうしたことにたいして、労働組合などの組織的抵抗、あるいは個人的抵抗、といったものが、事態の改善に効を奏しているとはいえない状況が広く見られる。

2) 瀧澤提案の主張点の一つは「養生思想」の提起にあるが、それにかかわって、間宮コメントは、「わが国の養生思想が、こころとからだの全体を説く健康教育思想だからであり、また、人生の後半に価値を置く、生き方にかかわる考え方であるからにはかならない。」と指摘している。

瀧澤提案は、「平成期以降の養生への関心の高まり」の影響と課題について、次のようにいう。

● 「自愛」の強調→養生論の思想的バイアス

不健康な生活をする者→自己認識の失敗である→「自業自得」観→近世・近代の養生

等身大の自己認識→現代的養生の方向性

いずれの場合も自己に収斂する思想

当日の口頭提案を、私のメモで補足すると、「それまでは、「モデル」に合致しているのかどうかだったが、近年では、等身大で自己自身に合致しているのか、へと移行」してきているという。

3) 提案は、老子など中国の思想、あるいは貝原益軒など日本の思想をふまえつつ、

● 「関心」と「気づき」と「思いやり」→「相互ケア」

利他的であることによる利己 利己的であることによる利他

● 自らケアすることができる者にこそ他者や社会のケアを委ねることができる→ケアの実践者自らのケアの質はその人自身に顕れる

● 自らを他者のケアの犠牲としなければならない状況はケアの実践の質の問題なのか、それを成り立たせることのない社会的条件の問題なのか

● 両義的状况をどのように考えるかが今後の課題である

といった主張を展開した。

また、間宮コメントも、たとえば、次のような興味深い提起をした。

「歴史の変動期にメランコリー（うつ）が現れることがたびたび指摘されてきた」

「中井(1982)は、江戸期の末期にあつて体勢の「立て直し」を迫られた二宮尊徳（1787～1856）の場合の執着気質の者の生き方の歴史的背景を考察している。精神保健の要諦は睡眠と自己尊敬にある（サリヴァン）。（中略）自己の精神生活と労働に思いを馳せ、まずは、日々を養生して生きることであるが、そのうえで、古来の養生思想が、過酷な現実生活からただに逃避する生き方なのではなくて、「民主的的市民社会の復興の倫理」に寄せる確かな教育思想になることができないだろうか。」

ここ何十年にもわたる右上がり発想・競争主義的時代構造のなかで、働き過ぎ構造が継続してきた。その構造を社会的にも個人的にも変えていくことが必要だ。社会総体としてみれば、長時間労働しなくても、現在の「豊かさ」の大部分を享受できるにもかかわらず、競争的構造が、それを抑え込んでいる。それがまた、献身的な仕事遂行を生み出している。こうしたありように批判的な人も、無意識にのみ込まれ、ガンバリズムや「課題があるから働かねばならない」という規範主義にしたがって、働き過ぎ構造の罠にはまりこんでいる。

その意味で、どなたかの発言を使えば、「規範性の脱構築」が必要であり、オールタナティブが追求されなくてはならない。無論、それは一元的標準的なものではなく、多元的なものとして生まれてこよう。

それらへ向かう契機としては、時代構造についていけないとして「漏れ出てくる」ものを大切にする。あるいは、規範・悪循環から距離を取ることが必要だ。病気で距離を取らざるを得ないことも多いが、それまでのスタイルに戻るのではなく、新たなありようの発見創造へと向かうことが肝要だ。

坂岡洋子「老前整理 捨てれば心も暮らしも軽くなる」を読む（2012年10月31日）

徳間書店から2011年に発行され、随分売れている話題の本のようだ。書店で発見した。読んでみると、示唆に富む所が多い。「老前整理」は、私流に進めてきたことだが、この本に学ぶ点も多く、「整理」計画をさらに

展開しようと思う。この本の中で、注目した点をいくつか紹介することにしよう。

老前整理 「それは、財産や相続といった、自分がいなくなった後のことに気を揉むのではなく、それまでの人生の棚卸しをして、棚をすっきりと整理する「シンプル化」の実践でもあります。(中略)

いまをよりよく生きるため、未来の自分自身のための片付け」 P 37-8

「私自身でおすすめしているのは、たとえば、「夫が定年退職を迎える」「子どもたちが独立する」といった人生の節目の時期に開始されることです。

節目を境に暮らしは変わりますので、その時点で片付けを始めれば、そこから先の人生の人生設計を考えやすくなるというメリットがあります。いずれにしても、元気で体力がある、やる気が出るときに始めるというのがベストなのです。」 P 40

私の場合は、43歳の時の沖縄から愛知への引っ越し、57歳の時の愛知から沖縄への引っ越しの時に、大きな整理をした。いずれも、ダンボール10箱ほどの書籍をあちこちに寄贈した。また、トラック一台分相当のものを、ごみ処分場にもっていったこともある。

「講座で繰り返しお伝えするのは、「使うものと使えるものとは違う」ということです。」 P 51

「お伝えしたいのは、使わないのなら捨てればよい。処分して減らせば入りますよね、ということ。

ですから、講座でもどうしたら減らせるのかということをおひとりおひとりに考えていただくのです。

「片付けられない女」よりも「減らせない女」——。(中略)

減らすとは、判断すること。

判断の中には自分にとって何か大切に、自分はどうしたいのか、までが含まれます。「これは、あちらの空きスペースに入れる」と考えてしまうと、もはや技、テクニックの問題になります。ですが、減ればテクニックを使わなくても普通に入る。そうすれば、おそらく身軽に生活できるようになるのです。

つまり暮らしを軽くする。私の会社もそういう思いを込めて「くらしかる」と命名しています。」 P 60-1

「まだ迷っていて、決断がつかないモノは、半年や一年といった期限を決めて保留ボックスを作り、一年間この箱を開けなかったら、一年間使わなかったら処分しようというルールにしておきます。」 P 97

「あまたある整理法と老前整理との違いは、少しずつ体力も気力も弱っているであろう、ちょっと先の生活を見据えて、前倒して暮らしを軽くしておくこと、そのための準備をすることにあります。」 P 109-110

「「自分探し」はどちらかというと、自分の可能性を広げる拡張の作業。対して、老前整理は、それまでの経験を元に、より濃密な時間を過ごすための凝縮の作業ではないかと思います。」 P 198

なかなか深い考えをはらむ表現の連続だ。私がいつてきた「人生後半期」構想に通じるものをもつ。わたしよりかなり若い方なのに、早くからこうした考えを持たれたことに敬意を表したい。

ワーカーホリックからスローライフへ

(2012年10月30日～2013年1月24日)

1. 私の早期退職

このテーマは、ここ20年近くの私の主張であり、自分自身が実践してきたことである。最初に、私の個人体験から書こう。

2003年3月末をもって、私は専任としての大学教師の31年間の職業生活に終止符を打った。70歳定年まで14年残す56歳での「自己都合」早期退職なので、退職金は小額だった。そして、翌2004年9月、ここ沖縄県玉城に家を建て住み始めて、もう8年余りがたった。

この私の人生転換について、「リタイア=引退」したとか、「田舎に引っ込んだ」とか、言われることがある。そんな時、反論するのが面倒だし、「そう思いたければ、そう思うのは、その方が描くイメージだから、いたしかたがない」と思い、そのまま笑って聞いておくことが多かった。

実は、そうしたイメージを描く方のイメージ不足、固定観念があるという気持ちが私には強く、私の思いと実践について、色々な形で書いてきた。そして、その人なりでいいから、そうした生き方を検討してほしい、というメッセージを送り続けてきた。

私には、「リタイア=引退」「引っ込んだ」意識はない。以前からの「ワーカーホリック的な生き方からスローライフ的な生き方への転換」の計画を実践したものだ。だから、「スローライフ」的な生き方をしつつ、私なりの仕事をたくさんしている。私には、研究者というアイデンティティがあるが、それは以前にも増して強いし、実際、研究的な仕事量・仕事質は、高齢化に伴う体力低下を差し引けば、以前と変わらない。

こうした生き方を意識的に考え始めたのは、1990年に琉球大学から中京大学に職場を変え、以前にも増して、全国レベルの仕事を展開しはじめて間もないころであった。

私が長く専攻分野としてきた生活指導研究は、人々の生き方に深くからむものだ。バブル期頂点にあった当時、企業社会のなかでワーカーホリック的な生き方をしている人々、とくに製造業のメッカであった豊田に勤務先をもって、そのことを一層深く考えるようになった。当時、自由な生き方を模索創造するという意味でのフリーターという言葉が既に存在し、そうした積極的生き方をする人たちがいた。

そうしたありようを見ながら、かつ自分自身の生き方としてどうするか、というテーマが私の中でふくらみはじめた。

そんなころ、一人の友人が長年勤務していた公立小学校教員の職を、50歳で辞め、年金で生計費をまかないつつ、NGO活動を始めたことは、大きな刺激となった。

また、愛知に引っ越したばかりの1~2年の時期ではあったが、家族でいずれ沖縄に戻るという決断を下した。全国的な仕事をしばし展開し、それにメドがついた時に実行するというものだった。そして、1990年代後半には、沖縄に再び家を購入していた。

計画を実行する直接的きっかけは在外研究であった。在外研究に出て戻ったら、3年間は退職しないという規定があった。それだからこそ、3年たった退職する、という計画がたてやすかった。私のこれらの計画に並行して、恵美子も計画をたてていたが、彼女の方が決断が少し早かったように思う。結果的に同時退職した。

退職1年前に、1年後に退職するという届を提出した。理由は「人生を計画するため」とした。退職後の展開の詳細な計画はなかったので、そう書いた。

だが、ほとんどの人は、本当にそうだとは信じず、どこかの大学に転勤するのだろう、とっていた。退職後1年ぐらいたって、どの大学にも転勤しない私を見て「本当なんだ」とわかってもらえた。

2. ワーカーホリック時代の私

私は、長い間、ワーカーホリックだった。就職して仕事生活に入る以前から、繁忙のなかで何かに取り組んでいるという生活だった。そして、「努力」「克己」「頑張る」といった言葉を中高校生から愛用していた。

だが、私は身体的精神的に強くなかった。小学校低学年に生死をさまよう大病をして以降、いつも何かの病気を抱えていた。精神的にもそうだった。だが、身体的にも精神的にも弱い自分を受け入れられず、強くなるために忙しく頑張ったといえるかもしれない。

仕事人生に入ってからでは、とくに1970年代末から80年代前半はかなり働いた。授業回数以上の会議をこなし、いろいろなプロジェクトの進行役まとめ役をしたし、学校現場へも頻繁に訪問するなど現場教師との共同研究にも忙しく取り組んでいた。1983年、国内研究に行った折にも、全生研の仕事、生活指導学会結成の仕事に深くかかわった。

また1990年代の愛知在住時代も、とくに半ば以降、繁忙だった。JRに1年間支払った額が100万円を越した時もあった。毎月のように飛行機にも乗ったから、ANAやJALから特別会員のようなのをいただいた。客室乗務員から名前で声をかけられた時にはびっくりした。

そのころは、まだ30代40代だから、パニックにならずにやっていけたと思う。

そして、30代のころは、忙しさに満足していたかもしれない。とはいえ、時間不足、とくに研究時間不足を嘆いていた。しかし、40代も後半になると、繁忙から解放されたいという願いが強くなってくる。趣味としてやっていた卓球も、土日の半分以上各地にでかけるため試合出場が難しくなり、試合中にぎっくり腰になったことをきっかけにやめたのは、40代後半だった。

この忙しさを愛するのではなく、解放されたいと思うようになった1990年代前半に、[休む]ことを教育にかかわらせて、「休む」を「教える」——[休]にとまどう学校のために(『生活指導』1993年8月号)と言う小論を書いた。その際、いろいろな本を読んだ。印象的だったのは、日本人は勤労の精神に富んだ「働きバチ」だというのは、明治以降の近代化過程で作られたイデオロギーだという指摘だった。

そうしたなかで、私のなかに揺れ・矛盾があることを意識するようになった。先に書いたような「努力」「克己」「頑張る」を重視することと、「休む」「リラックスする」「自然の流れ」を重視することとの間での揺れ・矛盾だ。

そんな折、90年代の後半だったが、当時50歳前後だった沖縄の研究仲間(教師)たちと「人生午後の会」というのをもち、いろいろとユンタクした。

そんな刺激もあって、「人生後半期」に入った私は、「人生後半期」をいかに生きるか、というテーマに研究上だけでなく生活上も取り組み始めた。ちょうどそのころ、「人生創造」の教育というテーマについても打ち込み始め、各地で「人生ワークショップ」を行い始めた。

それらを集約したのが「<生き方>を創る教育」(大月書店2004年)だ。そしてまた、2000年代、日本生活指導学会で、「人生後半期」について2度にわたる問題提起をし、また「沖縄田舎暮らし」(アクアコーラル企画2007年)を出した。

このころになると、本格的にスローライフを主張するだけでなく、生活スタイルとしても定着してきた。

3. 高熱とオーバーワークコントロール

私が、「ワーカーホリックからスローライフへ」の道を歩むようになるきっかけの一つは、病弱で、「働こうとしても、身体がついていかない」ことにある。

40代まで、そのことを考えさせ、働き過ぎないように休むこと、つまりブレーキをかける役割を果たしたのは、春秋の季節変わりにはほぼ年2回発症する気管支炎だった。13歳からころからずっともっていた持病だ。オーバーペースの時、風邪気味になれば、39度台を出した。平熱にもどったとって動きだすと、すぐにぶりかえした。平熱にもどって1~2日さらに休み、大丈夫レベルに達するには総計数日かかった。

初めのころは、医者に診てもらったが、解熱剤と去痰剤を処方されて、「よく休み、栄養を取りなさい」といわれるぐらいだった。そのうち、この病気の進行回復過程が自分でもつかめるようになると、医者にもいかずに自分で直していった。そして寝ながら、体力回復を待ちつつ、オーバーワークにならないように反省した。

30代後半ごろからは、オーバーワーク予防のために、設定した仕事量上限に基づく仕事管理表を作り始めた。沖縄の空気がよかったことも幸いしたが、仕事管理も少しずつ上手く行き始め、気管支炎の頻度も減り、症状も軽くなっていった。50代に入ると、年1回あるかなしかなかった。最近10年間では、発症したかどうか記憶に定かではない。

自分の身体のコントロールが少しずつでき始めたわけだが、50代になると気管支炎ではなくて、後で書くように別の形であらわれるようになった。

繁忙の新たな極みになっていたために、卓球をやめたのだが、後から考えると、それはまずかった。やめた後、散歩などで代用していたが、たいした運動量にならずに、体重増でメタボに近づいて行った。また、ストレス解消の場を大きく減らしたのが、まずかった。

50代はじめ、全生研常任委員会の代表になって、以前に増して全国各地に出かけ、また、1999年から1年間カナダのトロント大学での在外研究に出かけた。これらの仕事は、充実感溢れ、オーバーワークにならないようコントロールはしてはいたが、今から思えば、仕事量上限を実際の体力以上に設定していたようだった。

そのオーバーワーク、そしてオーバーワークの過去の蓄積が爆発する新しい症状が、トロント時代の後半に頻発した。英語と数時間以上つきあって帰宅すると、悪寒がはじまって苦しみ始め、間もなく高熱を出し、大量の汗をかく。数時間すると、平熱に収まる。1日ぐらい休むと、元に戻る。風邪をひいたわけではない。

その時は、医者に行かなくては、と思うが、高熱では動きようがない。それに「英語」で医師とやりとりするのは面倒だ、という気持ちもあった。腰痛の時にカイロプラクティスの大学病院に行って、1時間にわたる問診（研修医実習でもあった）に辟易したこともあった。

「英語」が引き金だったので、「英語病」だということにしておいた。ところが、帰国して、東京での全生研の会議に参加した時も、悪寒発熱という同じ症状があらわれて中途退席し、新幹線から名古屋の友人医師に連絡して、彼の所に直行した。そして、紹介状をもらって大病院の神経内科に出かけた。

医師は、しばし診断ののち、「仕事やめられませんか」という。驚いた。「そんなにひどいのか」と、かなりショックだった。他の病気があるといけないので、諸検査をしたが、何もない。

結論的に言うと、自律神経の失調が、高熱という形で表れたようだ。

「仕事をやめなくてはならないほどひどい」という判断を受け入れるには、時間がかかった。数ヶ月たって、判断を受け入れ、とにかく休養しかあるまい、と決断した。

それまでの、仕事上限をきめて健康管理していたつもりが、上限が高すぎたのだ。思いきったことをするしかないのだ。全生研常任委員会代表を降りるなど、色々な業務を大胆に減らした。そして、在外研究後3年間勤務したのち、退職するという既定方針を進行させていった。

このころの人間ドックでは、初めて目にする「要精密検査」項目が並んだ。逆流性食道炎の疑いによる胃カメラ、眼底検査、心電図検査などだ。

今から思うと、ワーカーホリック状態が、私の身体にたくさんの黄信号どころか赤信号を灯していたのだ。勝手な判断で、大丈夫とタカをくくっていたのだと思う。

50歳前後に、こういう事態になる人は多い。私は大破局前の小破局でとどまったと思う。そういう黄信号を灯している人に出会うと、思わず「休みなさい。身体に気をつけなさい」と言ってしまう。

かくして、休みつつ仕事計画健康計画を大胆に組み替え、実行に移していった。

4. 私の仕事・健康計画表

私は『計画魔』といってよいほど、計画をたてて活動をするタイプだが、それを、私自身の生活面、健康管理面にまで広げて計画策定し、それで生活・健康をコントロールし始めたのは2000年ごろからだ。それ以前は、仕事の総量をコントロールすることにとどまっていた。

数年の試行錯誤を経て2004年ぐらいから、ほぼ続けているスタイルを紹介しよう。

	体力(a)	原稿枚数(b)	換算(c)	諸仕事(d)	平均(e)	差引(f)	蓄積(g)	歩数(h)
1972年	155	150	60	170	115	40	-220	
1982年	150	600	200	150	175	-25	-40	
1992年	140	430	123	130	127	13	-76	
2002年	108	600	150	80	115	-7	-119	
2012年	75	356	79	61	70	5	±0	7万
2022年	50	320	64	36	50	±0	±0	6万8千

※2002年以前は、2004年に過去の実績にもとづいて算出したもの

※2012年は、進行中の今年の実績プラス計画

※2022年は、将来計画。

※年次計画なので毎年あるのだが、多くなりすぎるので10年に一回を抜粋した。

体力(a)は、この計画を作成した2004年ごろを100とし、20代の1972年は155、70代の2022年には50となるだろうと予測したもの。

原稿枚数(b)は、400字詰め原稿用紙に換算して、毎年の執筆枚数。

換算(c)は、原稿執筆には、年々執筆にかかる「エネルギー効率」が高くなる。そこで仕事量に換算するとどれくらいかを示す。1982年は3枚で1単位、2002年は4枚で1単位の仕事、といった計算になる。研究量

を反映するものといえよう。

諸仕事(d)には、授業(半期1コマ授業で4~7単位ほど、継続して担当するゼミなどは4単位、100人近くの新規科目を担当した時は7単位以上となる)、講演ワークショップ(2~3時間のものは一回1単位という計算)、会議等の業務(1日業務で1単位ほど)がある。これらの総計だ。教育活動、社会活動、大学業務の総量を反映するものといえよう。

平均(e)は、(c) と(d)の平均

差引(f)は、(a) と(e)の差引 プラスであれば、体力の限度内に仕事が収まったことを示し、-は、過剰になった事を示す。

蓄積(g)は、毎年の差引(f)を合算したもの。-であれば、疲労蓄積だ。-だと黄信号で、-50以上だと赤信号で、治療が必要な病気を抱えている状態だ。

歩数(h) は、2010年以降記入し始めた。万歩計が示す数に、卓球などのスポーツでの量を歩数換算して加える。週当たりなので、7万歩というのは、1日1万歩に相当する。

この計算方式は、私特有のものだから、他の人にはあてはまらない。考え方は、参考になるかもしれない。

私の健康管理にとって重要なのは、差引(f)と蓄積(g)だ。体力限度内であれば、健康状態は上昇していく。限度を超えれば、疲労が蓄積し、健康状態が悪化していく。

限度をこえて、蓄積がかなりたまっていたのは、1971年までの東京生活期、1980年代前半の繁忙期と、1990年代後半から2000年代前半期だ。-100を超えると、ドクターストップ状態だ。2000~2005年がその時期で、その後10年かけて、2012年久々に±0となった。

5年前にも、±0に近づいたが、アメラジアンスクールインオキナワ校長が、当初計画を遥かに超える業務となって、-の蓄積がたまり、案の定、ドクターストップ状態に近づいた。そんなこともあって、今回の沖縄大学特任教授を引き受ける時も、仕事量について上限を超えないような特段の御配慮を要請した。

これが、私の仕事・健康計画表だ。これであとしばらくはやっていけそうに思う。

5. ワーカーホリックからスローライフへと進まない社会現実

しばし私個人の話を書いてきたが、私個人のワーカーホリックからスローライフへの歩みは、社会的動向とかわりあって進行してきた。

そこで、社会的変化について見てみよう。

この問題が大きく話題になったのは、1980年代のことだ。国内的にも国際的にも、日本のワーカーホリック・長時間労働が「働き蜂」として問題にされた。同時に、生活における豊かさの「量」は実現したが、生活の「質」はどうだろうか、という問いかけが広がった。「ウサギの寝どこ」のような住宅が問題視されはじめた。また、大量生産大量消費のなかで、同一規格品が広まり、「個性」はどうなのか、という問いかけのなかで、「多品種少量生産」という言葉が広がり始めた。

だが、それらの生活の「質」の獲得も、商品売買を通してのものが中心であり、生活の量的豊かさ追求の延長線上で、「質」追求が進められたというべきだろう。質にしる量にしる、生活の豊かさは、経済成長によってつく

りだされるという発想が広く存在していた。1970年ごろまでほどの高度ではないにしても、1970年代以降も、経済成長が続き、経済成長は不可欠なものとして当然視されていた。

1990年代に入るところから広がる環境的視点からの議論は、新たなステージを作った。「自然との共生」「持続的発展」「エコ」「リサイクル」という言葉が聞かれ始めた。「エコ」という言葉が指すものが、エコノミーからエコロジーへと移っていく。

だが、「持続的発展」という言葉を「持続的経済発展」という意味で使用する動きが強いし、リサイクルなどに関心をもつが、大量消費そのものは止まらない。家電製品や自動車が不具合になった時、それまでの修理というやり方ではなく、部品取り替え、さらには買い替えに代わっていく。たとえばプリンターは修理するよりも、買い替える方が「得」だというのが、一つの象徴だろう。

これらの過程で、エコロジストという言葉が、生態学者というのではなく、自然と共生を図ろうとする人たちを指すようになるが、エコロジストのなかには、リサイクル中心で大量生産はそのままの人たちをエンバイアメンタリスト（環境主義者）と呼んで区別する論も登場した。

そして、90年代冒頭の「バブル崩壊」後、「長期不況が20年も続いている」という把握が広く行われ、「景気回復」を追求するのは当然だという意識が定着し続ける。そして、景気回復のためには企業競争力を高めなくてはならない、さらにそのためには人件費抑制が必要だということで、雇用システムの再編が進められる。その結果として、非正規労働の爆発的増加がつけられるとともに、強制的なワーカーホリックともいべき長時間労働、その結果としての過労死や精神疾患が大量に生みだされる構造が維持されていく。

こうして、ワーカーホリックからスローライフへとなかなか進まない社会現実が継続している。

6. 慢性的ワーカーホリックと経済成長

量的にも質的にも豊かな暮らしを求めるといふ流れが、長い間続いてきた。そして、実際に日本に住む人々の暮らしは、物質的に豊かになってきた。

では、どのレベルまでいけば、メドがたつのか。量的にはかなり豊かになったから、これからは、「生活の質」だ、といわれ始めたのは、1980年代のことだ。

にもかかわらず、それ以降も経済成長を追求し、かつ、例外的な年を除けば、たとえわずかだとしてもプラス成長が続いている。にもかかわらず、「不況」だと叫び続けられ、「もっと働かなくてはならない」といわれ、長時間労働、ワーカーホリック状態の改善は進むどころか、むしろ悪化しさえしているところが多い。

「今、我慢して働けば、楽な生活ができるようになる」といわれてきたが、ではいつ楽な生活になるのか。

人口減の時代になっているから、経済は縮小に向かうというのはごく当たり前の発想なのに、いまだに経済成長を追いかける雰囲気蔓延している。広井良典さんがいうように「定常化」時代だという声は、どれだけ支持をうけているのだろうか。まもなく総選挙だが、「景気回復」「経済成長」を主張する党派が圧倒的に多い。

日本の現状は、圧倒的に企業、とくに大企業主導で動いている企業中心社会であり、政府の施策も企業を後押

している。グローバルな競争力が求められ、そこで打ち勝つための策として、人件費を圧縮する必要があるということで、「規制緩和」が進められ、非正規労働者が増加し、労働時間短縮などはどこ吹く風で、サービス残業を含め、長時間労働が当たり前になっている。同じグローバル競争時代のなかにあるヨーロッパ動向とはかなり異なる状況にある。ワーカーホリックからスローライフに向かうアプローチでもあるワークシェア、ワークライフバランスといったことは、言葉としてはでてくるが、実質的には逆行とさえいえる状態だ。

もし、そうした志向をもちたいなら、競争で勝利し、年収2000万円以上の富裕層になるか、それとも企業中心社会からはずれ、年収200万円以下のフリーター暮らしをしなさい、というメッセージが出されているようにさえ感じる。そのフリーター暮らしも、スローライフを保障せず、むしろスローライフを抑え込む長時間労働を余儀なくさせる現実がある。

労働組合も、その多くは労働者のスローライフを求める動きを真剣に推進しているとは思われない。国の施策も、「掛け声」は聞けるが、実際にはスローライフとは逆行している。

こうして、ワーカーホリックからスローライフへとなかなか進まない社会現実のなかで、長時間労働、ワーカーホリックを受け入れざるを得ない人が圧倒的に多い。それを拒否したり、それらから距離をとったりする行動をとるのではなく、それを「やむをえない」とか「当たり前だ」と考える人がかなり存在する実情なのだ。

7. お金をかけるスローライフ！？

私は、スローライフというのは、金のかからないもの、というよりは金をかけないものだと考えてきた。

ところが、お金、しかも私には考えられないようなお金をかけるスローライフがある、ということに気付いた。それはスローライフではない、と私は思うのだが、当人たちはスローライフのつもりのようだ。

たとえば、一泊5万円のリゾートホテルの「スローライフ」。沖縄各地にそういうホテルが散在するようになった。国内だけでなく、海外の富裕層をターゲットにしているようだ。空港から超高級車で送迎され、外とは隔絶されたホテル敷地内での「スローライフ」を楽しむようだ。未体験なので詳しくは知らない。知人が予約なしに入って、追い返された、という話を聞いたことがある。

また、高級セカンドハウスを持たれる方もいる。

いずれにしても、「スロー」とは対照的な都会の喧騒から離れて、リゾート地で「スロー」を楽しむようだ。かなりのお金をかけてのものだ。

かなり、というほどではないが、少しはお金をかけて、こうしたスローを楽しむのは、滞在型沖縄観光の魅力の一つだろう。沖縄に限らず、太平洋諸島、アジア各地には、こうしたところがあちこちにありそうだ。そうしたところに出向かせるのが、観光の一つの目玉商品になっているようだ。

こうしたのを見ていると、スローライフも金次第なのか、と思わされてしまう。

対照的な人たちもいる。「お金をかけないスローライフ」だ。「お金のかからないスローライフ」とも言えようが、意識的に「お金をかけないようにしている」人も多い。その前に「かけるお金をもっていない」人も多い。

ふりかえってみれば、長い間「お金をかけないスローライフ」を人々は送ってきたといえよう。しかし、お中

心、お金依存が異常に進んだ今、お金依存ではないスローライフを送ると、珍しがられるとっていいかもしれない。

私たちは、7年ほど前に、「二人で月10万円で暮らす町・村」というテレビ番組に出た。10数%の視聴率だったので、「見たよ」と全国の多くの人に声をかけていただいた。そのなかには、「10万円で暮らせるなんて、・・・(ウソでしょう)」という都市暮らしの人が多かったが、私たちの近隣の人からは「10万円も使うなんて・・・(ウソでしょう)」といわれた。私たちが住んでいるところは、都市通勤をしない限りは、もともと、そうした暮らしをしていた地域なのだ。数十年前まで全国各地にあったと思う。都市標準になった今、珍しがられるだけだ。

都市標準の暮らし方を持ちこんで、「コンビニがないなんて」という人には、そんな「スローな生活」はできないだろうが、自然と人々とハモる暮らしをすれば、誰もががしている生活だ。例外はある。子どもの教育費だ。子どもを大学進学させようと言うと、都市の人々と同じような費用がかかる。日頃の生活費とのギャップは大きい。

数年前までの沖縄移住がブームとなった頃と違って、最近このあたりへの移住者は多くはない。ただ、東北大地震一原発後の移住者がかなりおられる。

数年前の移住者には、人生後半期創造の方がかなりおられたが、震災後移住の方を含めて、最近の移住者には、20代～30代の方が多い。単身者もおられるし、子育て中の方もおられる。中には、都市で仕事をしている配偶者を残して、親子でこられる方もいる。

こうした方々の多くに共通するのは、安全安心志向と共に、新たな自分なりの生き方を、「お金をかけないスローライフ」として追求することだ。都市感覚からは、「よく生活できるな」と見られるかもしれないが、ここで暮らすと、むしろ自然に近いし、沖縄式に「ナンクルナイサー」で過ごす人も多いと思う。

競争的なワーカホリック生活から、一時的に離れるために、「お金をかけてスローライフ」をするよりも、「お金をかけないで、スローライフ」するありようが広がれば、と私は願う。

8. お金に使われなくて、お金を使うことが大切

金持ちでなくとも、「お金に使われる」傾向が濃厚な時代になっている。健康でさえ、「お金次第」という風潮が強くなっている。医師にかかるにもお金がかかるし、健康保険料も年間数十万円と、かなり高額になっており、支払えない人が続出だから、「お金次第」ともいえよう。窓口の3割支払いを負担に感じて、医者から足が遠のく人も多いという。

健康食品や健康器具を購入して、健康を獲得した気持ちになっている人も多い。健康食品ブームといわれるが、その大半がお金で購入するものだ。だから、「健康」名目で荒稼ぎする業者が多い。

そうではなくて、手づくりのもの、自然との共生で得たもの、知人と交換しながら得るものを増やして、お金依存を減らしていきたい、と思う。そんな営みを軸にして、「お金」でしか手に入らないものを選んで購入するというように、「お金に使われなくて、お金を使う」生活スタイルを築きたい。金銭・商品依存率を減らす、ともいえる。

「お金に使われる」が普通になっている人を見ると、私は可哀そうだとさえ感じる。そしてそれは浪費しているのであって、「ぜいたく」をしているのではない。「ぜいたく」は、手づくりのもの、自然と共生の中で得たも

の、知人と交換しながら得るものだと思う。

スポーツを含め、運動が健康にとって重要だともいわれるが、スポーツも金がかかる。一番かからないと思われるウォーキングにしても、靴・帽子・服装の経費がかかる。私がしている卓球についての経費計算については、2011年のブログ記事に書いた。スポーツ経費は適度な額以下におさめたい。

金・商品依存を減らすためには、手づくりする、知恵を使う、友を使う、自然と共生する、ことだ。健康に限らず、生活全般についていえることだ。

それをコンビニにたとえていうと、「コンビニへの依存を減らして、コンビニエント（便利さ）を追求する」ということかもしれない。民泊する高校生など我が家を訪問する都市から来た人に、「コンビニ」はどこにありますか、と聞かれるが、「近くにはない」と応えると、困った顔されるだけでなく、時に「そんなに田舎なんだ」と軽蔑感を伴った顔をされることもある。

手・知恵・友・自然を活用することは便利な事なんだが、それがコンビニ的便利さとは対極にあるように受け取られるのだ。手・知恵・友・自然とのつながりが希薄になった事を示していると思う。

わかりやすい例は、食事だ。手づくりと弁当購入や外食とでは対照的だ。手づくりはお金依存率が低いだけでなく、いい意味で「ぜいたく」なのだ。その手づくりの際に、購入してきた加工食品の比率を下げられれば、なおいい。家庭菜園の食材を使えば、これまたいい。

食事で金銭依存率を下げることはぜいたくだし、余計な保存料着色料が不要だし、食べる人の必要と健康を配慮できるので、健康にもよいことが多い。とはいっても、すべて手作りはなかなか難しいことは確かだが。でも増やしていきたい。

私の実例。夏場の卓球練習日、毎週3回の授業日には、薬草&ハーブ・ティーを作り、ペットボトルに入れて持参する。自動販売機やコンビニなどでのペットボトル購入は、年に数回。他府県出張など、自家製の薬草&ハーブ・ティー持参が難しい時などだ。

9月末の台風襲来でハーブが壊滅状態になる以前は、もっぱらハーブ・ティーだったが、10月からは、薬草を混ぜている。

すべて我が庭畑で育てているハーブ&薬草だが、このところ、次のものをいれている。

ドクダミ ビワの葉 クミスクチン ハママーチ サンニンの葉 クールミント アップルミント オレガノ
レモングラス 他2, 3種類

9. 人生の前半期と後半期におけるスローライフ

私はかねてから、40代半ばで人生を前半期と後半期に区切り、人生後半期の人生創造について語ってきた。人生の前半期と後半期にまつわって、よく使われるキーワードを並べてみよう。

前半期 無我夢中 猪突猛進 怖いもの知らず エネルギッシュ 疲れ知らず

後半期 衰え 疲れ 円熟 経験

これらは、前半期・後半期に固有なものではなく、両方で使われるものもあるが、おおよそこんな感じだろう。ステロタイプ気味ではあるが。とはいっても、後半期の体力やエネルギーについては、前半と比べれば低下することは、ほぼ当たっているだろう。では、存在そのものが「低下」するのかといえば、そうではなからう。むしろ、経験や学習によって獲得した知恵や技で体力低下を補うどころか、それを上回ることさえある。

私の大学授業の例をあげると、人生前半期の40代初めまでは、エネルギーに授業を展開していた。そのエネルギーで受講生を圧倒し巻きこんで、受講生たちを学習させていた。そのやみくもな取り組みの中で、獲得してきた知恵と技が少しずつ蓄積し、エネルギーよりも知恵と技を軸に授業を展開し始めたのは、40代半ば以降だった。60代後半の今では、エネルギーで受講生を押ししていくという面は、かつての面影は全くないだろう。だが、知恵とワザを使って、学生たちが自主的に学ぶ広がり深みを作り出し、教育効果という点では、前半期に決して遜色はないし、むしろより効果的であるかもしれない。

無論、それがいつまで続けられるのか、体力低下を知恵と技でも補えない事態が、もうしばらくすると来るだろうと思う。その時期は、人生後半期の後半期ということになるだろう。

ところで、高齢期はスローライフだが、それ以前までは、ファーストライフだ、という発想と事実が余りにも定着しすぎてはいないだろうか。すべての時期にわたって、スローライフを再構築することが課題ではないだろうか。定年を迎えて「悠々自適」ができるようになるまで、必死に働くという発想が余りにも強すぎるのではないだろうか。

また、前半期の重要な部分を占める学校教育にストレターコースが設定されて、競争をあおるなかで、ファーストな前半期がつくられてきた。そのなかでは、「大器晩成」「青春の彷徨」といったことは、否定されてきた。ともかくファーストなのだ。前半期でスローライフを構築することで、豊かな人生全体が形作られるという余裕がないのだ。

そうでなく、前半期にもスローライフを構築したいと思う。

ところで、人生そして日々の生活には、職業・家事育児・学習・趣味社会的活動・休養などと、いろいろな領域がある。そうしたものの比率が話題になる。それを示す用語の一つが、ワーク・ライフ・バランスだ。

ところで、日本の主流の発想は、子ども・若者期→成人期→高齢期という3区分をして、成人期に、職業と家事・育児を割り振り、学習は子ども・若者期に割り振り、趣味社会的活動・休養を高齢期に割り振る発想が根強い。労働力人口という統計がよく示されるが、それには、子ども期と高齢期以外の、若者期と成人期で算出され、職業とそれ以外とを区分する発想が反映している。

こうした発想は、現代に特徴的であり、職業・家事育児・学習・趣味社会的活動・休養などのすべてが、三つのいずれの時期にも存在する発想の方が、実は人類史上の圧倒的時期をおおっていたのではなかろうか。現在の時期だけ例外的なありようをしているようだ。無論、子ども期の職業については、議論の余地があろうが、それでも、子どもも、職業とまでいえないにしても、かなり働いていた。

三つのいずれの時期にも、これらのいずれもがそれなりに割り振られるような人生・生き方を再構築することが必要ではないのか。スローライフという主張には、かつてのそうしたありようを復活させようという機運が反映してはいないだろうか。

10. 井形慶子「イギリス式年収200万円」を読む

正式書名、井形慶子「イギリス式年収200万円でゆたかに暮らす」（2008年講談社）は、書店で見つけた本だ。井形さんはこの種の本を何冊も書かれているので、そのうちの1冊を購入読書した。

人生後半期にある経済的な心配がそれほどない人々の、多様な暮らし方のイギリスでの事例紹介が興味深い。標準的な姿を追うのではなく、自分なりの独創的な生き方暮らし方を工夫する姿。こうしたありようが、イギリスで一般的といい得るかどうかは、私にはわからないが、独創的な生き方をしている人々が見出す生活感性が豊かな本といえよう。日本の例も少しは出ているが、そうした独創的な生き方への許容感覚が、日本よりは広いと言えそうなイギリスだろう。あるいはそうした経験の蓄積が日本より多そうだ、とも言えそうだ。

例をいくつか紹介しよう。

「ロンドンの郊外で一人暮らしをする女性は、多忙を極めた不動産会社での営業生活に四八歳でピリオドを打った」人だ。その人の、「仕事を辞めて収入が減っても、自由な時間がたくさんあれば支出が抑えられるのよ。忙しい時にはお金がどんどんなくなっていったのに」P3という話。

56歳で専任大学教員生活にピリオドを打った私も同じ体験というか、印象をもっている。退職前の退職後収入支出予測と比べれば、支出がはるかに少なくなり、「二人で月10万円で暮らす」生活になった。忙しい時は金銭や商品への依存率が高いが、それ以降の生活ではかなり低くなってしまったのである。

「使わない子ども部屋を物置にせず生かす知恵」P106～の節も面白い。民宿などに活用するのだ。それ以上に興味がひかれたのは、「七割の一人者シニア男性が女性と同居する背景」P178～の節だ。大きな家に住む一人者男性が、遠縁の女性と同居し、のちに彼女とカップルになった男性が同居している話だ。

それは経済的理由だけでなく、異世代異家族が同居する有効性・意味という点でも興味深い。10年ほど前の愛知県で、シニア女性たちと若い女性たちがいっしょに住むグループホームができた話に、私は強い衝撃を受けた。グループホームというと、高齢者、あるいは障がい者などを含む福祉的色彩が濃い施設しか思いつかない日本の状況の中で、強い刺激を与えるものだろう。当時人気を集めたちゅらさんアパートも、そうしたありようを提示してくれた。

最近では、ルームシェアの若者が広がっているようだ。新たな住生活のありようとして、広がって行くだろう。

本書には、こうした事例が他にもいろいろ出てくる。

人生後半期の生活が、固定観念でしぼられているのを越えて、多様な形を創造していく動きが、私たちのまわりでも始まり広がりそうな気配を感じる。

こうした問題を、暮らし感覚で考えることが求められるだろう。書店に行って、「暮らし」コーナーを見ることがこれまでは少なかったが、今後いろいろと見ていきたいと思うようになった。

1.1. 西洋医学中心の医療と身体の自己管理能力

スローライフは、自然の流れと並行して自己管理を進めるという特質を持っている、と私は考えている。自然には、外にある自然と自分の身体（内なる自然）という二つがある。スローライフは、両者がハーモニーを持って響き合うようなあり方を追求する。様々な難題をぶつけてくる自然を克服するとか、自然と闘うとかいうよりも、自然と響き合って共存しあうとか、共棲・共生すると考える。

そこで、自分の身体を感じ取り、その必要に対応することが不可欠だが、それを身体の自己管理といってもよ

いだろう。そうした身体の自己管理は、当人自身が追求展開するだけでなく、当人につながる人々との協力・支えの中で行われている。幼児や子どもへの親のかかわりもその一つだろう。また、周囲にある身体にいい生き物を活用すること、その知恵を持った人々を活用することもある。しかし、いずれにせよ、自分自身の身体管理能力を高めていくことが基本になる。それを病にかかわっていうと、自己治癒力と言ったりもする。

ここ150年間の日本では、西洋医療という新たに強力なアプローチが、身体管理の仲間に加わった。それは国家と結合して、「上」からの身体統制としても展開したが、個々人の身体管理レベルでも空前絶後の影響力を行使した。

その中で、当人が自己管理能力・自己治癒力を維持向上させる営み、自然と共生するありようを高めてきたのだろうか。対照的に、それを落としていき、西洋医療依存とでも言えるような事態が広まってきて、それが普通にさえなってきたようである。

身体の変調があれば、自己管理能力自己治癒力を高めるアプローチで考え対処するのではなく、薬依存医師依存的に振る舞う人が広がってきた。近年では、それが健康食品・サプリメント・薬品などの商品化されたものの購入に依存する傾向につながっている。それらが医療費増大を引き起こしているという、国家や自治体などがそれを抑えようと躍起になっているとさえいえる事態に至った。

自然との共生を軸にした当人の自己管理を軸にしなが、西洋医学を活用するというのではなく、西洋医学依存症的事態を作り出したのだ。たとえば発熱悪寒だるさなどといった症状が出た際に、自己の身体状況生活状況をふりかえって対処することなく、購入した薬で事態を解決しようとする。

そうしたことを避けようとしてきたつもりの私自身も、健康な暮らしへと進んできた今から振り返ると、そうした傾向をもっていたな、と思う。体調不良の時も、過剰労働が問題だと気づきながらも、そのレベルを過小にとらえ、一時的なものとみていて、自己管理能力自己治癒力を高めることが不十分なまま、医療に過剰に依存していたなと思う。

だが、社会風潮として、薬・健康食品・サプリメントや医療への過剰依存傾向は強いだらう。そして、過剰依存は、自己管理能力自己治癒力の低下を生みだし、また働き過ぎへの抵抗力を弱めているのではなかろうか。

皮肉なことに、医療関係者自身の働き過ぎがすでに明らかになっているにもかかわらず、有効な対処が政策関係者のみならず、当事者自身も取りきれない状況が慢性化さえしている。

豊かな生活・社会を作る営みがかえって、事態を悪化させているとさえいえるかもしれない。

1.2. 医療などの情報と身体の自己管理能力

前項で書いた、医療などの情報と身体自己管理能力とのことだ。前近代では、自己の身体についての情報は、身の周りの人から得るのが通例で、とくに困った時には近隣の薬草使用などに詳しい人の助けを借りることもあったろう。危機的状況の際、裕福な家の場合には医師をよぶこともあったろうが、多くの人は、神仏・シャーマンなどの助けを借りるぐらいで、運命として受け入れていただろう。日常的には当人の自己管理能力を軸に進んできた。

しかし、今日では実に多様な情報が入る。医療機関からのもの。その医療にしても、西洋医学・東洋医学・マッサージなど実に多様だ。そして、健康病気に関する書籍、新聞、テレビなどの情報。コマーシャルも多い。近

親者・知人などからの情報もマスコミから得たものが結構ある。

これら外部から来る情報が当人の自己管理能力を遥かに凌駕しており、本人が圧倒されるというか、振り回されることもしばしばだ。一つの病気で、病院をいくつか回る例も珍しくない。

こうした実に多彩な情報が入ってくることでかえって当人の自己管理能力が弱まってはいないか、と問う必要がある。また、自然のありようを読み、それを自己の身体と結びつけて読み取ることも弱まっているようだ。

こうしたことを考えると、周りの情報に振り回されるのではなく、自己管理能力を高める方向で、様々な情報を選択し、様々な対処策を自己管理能力の体系の中に組み込んでいくことが必要だ。そうでないと「宝の持ち腐れ」状況になってしまう。

たとえば、人間ドックは大量の情報を提供しつつ、結論として要観察・要精密検査・要治療といった指示勧告を提示する。要精密検査指示で驚き、精密検査の結果「異常なし」でほっとするという一喜一憂を、私も何度となく経験してきた。そうした経験を積み重ねて、人間ドック情報を私なりに読み取ることができる部分が増えてきたように思う。たとえば血液検査の経年変化のなかで、どの点が良好になり、どの点に留意が必要か、ということだが、多くの人がそういう活用をしているだろう。

人とのつながりのなかで得られる情報も有用なことが多い。長年付き合い合っている人から、顔をはじめとする身体についての印象を聞くことが改善へのきっかけになることも多い。自分では調子が悪いと思うが、周りの人に「調子よさそうだね」といわれて、改めて見直すきっかけになることがある。その逆の方が多いかもしれない。

こうした、いろいろな治療・情報をもとに、自分なりにあった形の対処法、つまり身体の自己管理能力を高めることが重要だ。

腰痛・肩痛・首痛といったことは、そのことがよく分かる例だ。これらに悩む人は、整形外科医、あんま・マッサージ、整骨院、ヨガなど、いくつかの所に行く。それらの中で、自分の症例に合ったものが、そのうち見つかる。それらを組み合わせて、自分なりの改善法を作り出していくのだ。他の同病者の良くなった例は、その人の例だ。誰かが「効いた」というものが、自分に当てはまることは多くはない。

私の腰痛は、こうした試行錯誤30年近くを経て、ようやく2011年に対処法を見つけ、それ以後急速に改善し、日常生活で痛みを感じる事がなくなった。肩痛は、40年の歴史を経て、ようやく2012年に対処法を見つけた。首痛は同じようなもので、2008年ごろ卒業した。

改善してきた現在は、良好状態を保つために、いずれもストレッチを中心とする対処法で日常管理している。

1.3. 薬草・ハーブなどの使用

医療と身体の自己管理能力ということを考える際に浮上することとして、身体に良い食、そして身体に効く薬がある。ここでは薬を取り上げたい。

薬にも、売薬と自前調達とがある。現在では、売薬に100%近く依存する人がほとんどだろう。しかし、そうなる前は、まだ数十年もたないだろう。数十年前には自前調達がかなりあったろうし、100年も前では、自前調達が中心だろう。

自前調達には、調達作業の前にかかなりの経験と知識が必要だ。自前調達から売薬への移行という変化のなかで、自前調達にかかわる経験と知識を当事者自身が持つことが極度に減少した。それに代わって、売薬についての経

験と知識が増大したかという、それほどでもなく、医療関係者およびコマーシャルへの依存が飛躍的に増大したと言うべきだろう。

その余りにも増大を問題だとして、自分なりの関心・経験・知識を増やそうとする人が増えてきた。漢方薬がそうだろうし、薬草・ハーブ・アロマなどがそうだろう。それにしても、それらさえ、コマーシャルへの依存がかなり存在している。健康食品ブームなどがそれを示している。

ここで私自身のことを書こう。

薬草・ハーブ・アロマへの関心そのものは、かなり以前からもっていた。庭でアロエを栽培し、使い始めたのは、30数年前だ。アロエを混ぜたうがい液を作り、鼻うがいを始めたのがそのころだ。フーチバー（よもぎ）を入れた泡盛を楽しんだのもそうだ。

次に熱心になったのは、世紀変わりに体調を崩していたころだ。当時はまったのは、アロマで香を楽しむこと、あるいは、午前中は元気を出すためにローズマリーなど、夕方から夜は落ち着きを得るためにカモミールなどを楽しむことだ。お茶は元々好きだったが、より一層関心を持った。日本茶を大量にといいほど飲んでしたが、日本茶が血圧を下げる機能が強いことを知って、低血圧で、とくに午前中低すぎた当時、日本茶は夕方以降に切り替えた。

その延長で、ここに移住してから、ハーブを盛んにたしなむようになった。沖縄薬草に関心を持ち始めたのも、そのころだが、最近は特にそうだ。

しかし数年前までは、本でもインターネットサイトでもよく分からないのが多かった。「沖縄医者いらず」といわれるコヘンルーダがそうだし、ボルトジンユがそうだ。といっても最近では徐々に、有益な本やサイトが増えてきたのでありがたい。

ある時、沖縄の薬草に詳しい人に尋ねた。「コヘンルーダというのは、沖縄医者いらずといわれるほど有用らしいが、毒成分も強い、というのだが、加減はどうしたらいいか」。答えは「自分の体に聴くことだ。最初は、一滴ずつで、ちょうどいい加減を探していくのだ」ということだった。

こうした沖縄薬草は、幼い時から、おばあから教えられてきたという人が多い。そして、教えられてきたことを、自分なりにやっけていき、自分の体にあったものを見つけ作りだす、という答えが共通だ。こうした所には、自然との共生・交流そのものがあるし、そうしたことができる力を育むことが大切なのだろうと思う。まさに、「医療と身体の自己管理能力」のテーマにふさわしい。

14. 脇役の生き方 保坂隆「人間、60歳からが一番おもしろい」（三笠書房2012年）を読む

なるほどと共感・発見することがある本だ。ところどころ、「60歳から」というよりは、それ以前の「現役」感覚のところもあるが、著者紹介でみると、著者は60歳ちょうどであり、「60歳から」のことがよく書けるなあ、と感じるほどだ。著者は精神科医師で、「60歳から」のことに会う機会が多いので書けるのだな、と推測する。

読者対象は現在50代で、これから「60歳から」になる人だろう。また、全体に都市感覚である点、田舎暮らしをする私には「ちょっと違うな」と感じる点もある。

本書の中で一番興味深く感じたのは、「人間通ほど「出しゃばらない」」の節で、「脇役」のすすめが書かれ

ているところだ。

私なども、40歳ごろまでは、「主役になりたくてしかたがない」という面が強かったが、それ以降徐々に、その比重を低めてきた。50代に入ると、「主役をさせられることから引く」ことをしばしば試みてきた。

ところで、今回の選挙などを見ると、政治家の多くは主役になりたがる主役病でカリスマになることを望んでいる。そして、そういう強者であることを自任する人に任せたいという風潮が、有権者のなかに広く見られるようだ。カリスマ信仰は、権威主義や強者信仰ともかかわっているといえよう。

そういう強者で一時的に勝者になった人が、数年でカリスマ性の「賞味期限」を切らせば、一時的現象になるのだろうが、カリスマ的主張が制度化されると、カリスマ性の対極にある民主主義が後退することになる。カリスマ性というのは、人気にかかわるといふ点では、民主主義とからむが、人々がある個人に任せてしまうという点では、民主主義を抑え込むことになる。「人物」中心で、政策は二の次となると、かなり心配なことになる。

「脇役」というのは、強者信仰とは逆方向だろう。弱いところを持っていることを受け入れ、自分なりの役目を果たしていくことだろう。現在の高齢男性のなかには、こうしたことに下手な人が多い。50代以前に強者だった人が、衰えを見せ「弱者」の仲間入りしているのに、なおかつ強者のつもりである時、周りに迷惑をもたらす。もしくは、まわりから煙たがられる。悲劇的なのは、身体あるいは精神的な挫折に至る場合だ。

日本では強者信仰が続いてきた。近年のように「弱肉強食」的な競争が激しい時にはとくにそうなる。学校もその風潮が濃厚だ。そこに、学校や学習をめぐる不幸な現象が広がりやすい。

家族などの身近な世界でも、そうしたことがしばしばある。特に男性に多い。力がものいう社会で「成功」してきた「主役」タイプの人々が、身近な世界でもそれを貫こうとする時、周りが避けるようになるだろう。その人は、人間関係が薄くなり、孤立さえしかねない。残念ながら、中高年齢の男性にそういう人が多いだろう。中高年齢の男性には、人間関係作りが下手で孤立しやすいとよく言われるが、こんなことに原因があることが結構多そう。

こんな世の中だからこそ「脇役」のすすめに興味を強く感じたのだ。

15. 生活指導研究の性格・課題

2012年12月15～16日の日本生活指導学会の研究会で私が行った問題提起は、スローライフ連載の趣旨とかかわりが深いので、ここで紹介することにしよう。

問題提起のタイトルは、「生活指導研究の性格・課題（浅野の関心事を中心に述べる）」だ。当日の問題提起レジメをそのまま掲載することにする。そこでの討論の中で考えたことは、※以下に追記する。

1 競争的標準コースから外れた・外れがちな人を支える営み

競争的標準コースに取り込まれた人を回復させて（コースから外れさせることを含めて）いく営み

※1 現実の人々の生き方は、1) 標準コースにしがみつ়き生き方、2) (早期に) 外れて、オールタナティブな生き方を展開する、に二分しがちだ。

※2 自分の持つ強み弱み、他者の持つ強み弱みを認めることは、相互のつながりで補い合うことに通じる。それは競争的標準コースの生き方と対照的な世界である。そうしたつながりをコーディネートすることが今日の

生活指導実践だともいえよう。

※3 外れる生き方には、自分（たち）の持つ弱さを認め受け入れることと結びあう。自分（たち）の持つ弱さを認め受け入れることは、他者とつながることを呼び込む。

2 金銭・商品的傾向の濃いモノ・コト・ヒトとのつながりの過剰な強まり・依存から脱け出させ、生き方を模索創造する営み

3 問題対処から始まって、それをきっかけにし、それを越えて、生き方・生活の新たなありようの追求へ。

問題対処だけでなく、方向性提起を含んだ展開へ（治療から予防へ）

※4 こうした実践は、すでにあちこちに見られ、それらを集約して、働きかけの「カリキュラム」「方法」として明示していくことは生活指導研究の課題でもあろう。

※5 この実践には、当事者が「受け入れる・認める」と「行動する」という二つを展開するように働きかける性格を持つ

4 ヒト・モノ（自然）・コト・自己（心と身体）との関係で不全を感じる事態からの回復

自然・人間・自己との関係の回復・成立へ。とくに人間関係における共同性の回復を入り口にして

5 社会変化をヒト周辺の具体的レベルでうけとめ実践することを通して、社会変化にかかわっていく営み

その1 新自由主義的動向と福祉国家的動向とのせめぎあいのなかで

その2 経済成長志向・物質的豊かさ追求志向と経済「定常化」縮小の受け入れと豊かさの転換追求志向とのせめぎあいのなかで

※6 これは、新しい社会を構想しつつ実践するというものであるが、具体的事例を発見集約しつつ、原理・方法を明らかにすると言う過程が並行する。

6 対人援助を広義に捉え、人々自らの生き方創造（ライフスタイル、ライフコース・・・）に対して問題提起する。

※7 人々の生き方創造にかかわることは、人々自身が自然と人々との関係のなかで、「生活」を作り直すように働きかけるということでもある。

※8 それは、現在の生活基盤を転換させるものでもあり、旧来のものの崩壊と新たなものの萌芽とを意識化させる作業でもある。

7 子ども若者を主要対象にしてきた。限定的だが、人生中盤・後半期を対象にした論議があったが、より拡大して人生全体を対象にする方向へと進むだろう。

8 実践者自身のありよう・成長の研究検討の継続拡大

9 以上のことを焦点化する素材・舞台をいくつか設定して、継続的追求することを期限を区切って展開する（研究グループ形成もありうる）。

16. 人生後半期の生き方と生活指導

2012年12月16日の日本生活指導学会理事会で、私は来年の生活指導学会31回大会企画案として、次のようなものを提起した。次年度は、多様な企画で飽和していて実現は難しいが、いつか近いうちに実現したいと思っている。生活指導学会では、「死」「中年」に関わる課題研究会を持ったことがあるし、人生後半期にかかわっては、私が自由研究で2回問題提起したから、蓄積がないわけではない。また、多様な分野で、すでに関連研究が進んでいる。

適切な時期を待って実現しようと思う。

1) タイトル

人生後半期の人々（または、中年高齢者、または、子ども若者以外）の生き方・生活に、生活指導研究はかかわることができるのか。できるとしたら、どうかかわるのか。

2) 問題事項 以下のような特性をもつ人々へのかかわりは、生活指導実践としては、どうしたらよいのか。

- ・なぜ、過剰に働き続ける人が多いのか。
- ・なぜ、成長・拡大を望んで行動する人が多いのか。
- ・なぜ、勝負・競争にこだわって生きる人が多いのか。
- ・なぜ、スローではなくファーストな生き方をする人が多いのか
- ・多様なありようと「標準」的ありよう
- ・この時期のジェンダーのありよう
- ・対人関係の多少・濃淡・ありようの多様性

※ 生活指導実践者のありようをめぐる研究

3) 研究アプローチ

・生活指導研究が、これらの時期の人を扱う時、多くの場合、支援が明示的に必要な事例が多い。支援・教育が不要、あるいは望まない人への専門家の「生活指導」的なかかわりはどのようなものか（内容と方法）

- ・実践だけでなく、研究としての生活指導的アプローチは、どうあったらよいか。
- ・次のような既存アプローチとは異なるアプローチがあるのかどうか

医療的アプローチ

福祉的アプローチ

心理発達論的アプローチ

ジェロントロジー的アプローチ

哲学宗教学的アプローチ

社会学的アプローチ

経済論的アプローチ

生活論的アプローチ
生涯学習的アプローチ

17. ワーカーホリック病から卒業できない人々

私が2002年4月に退職届を出して、2003年3月末に退職するころの話だ。

私の退職届には、退職理由として「今後の人生を計画するため」と書いた。すでに固まった計画があったわけではなかったからだ。といっても、沖縄に移住することは決めており、土地探しを始めていたが、具体的な生活・仕事の計画はなかった。沖縄移住（沖縄戻り）は、すでにその10年ほど前に決めていたことだ。

これらは秘密でなく公表していた。しかし、勤務先の大学関係者は、「どこか別の大学に転勤するのだろう」と思っていたらしい。退職間近になってようやく、「本当の退職らしい」と信じる人が増えてきて、「まだ若くて、定年まで十何年も勤められるのに、どうしてそうするのか」と尋ねられたりした。そこで、ここで書いているようなスローライフのことを話し、仕事から身を引くということではないことを説明した。

そうすると今度は「うらやましいなあ。私もそうしたいなあ」と語る人が現れた。そこで私は、「じゃあ退職して、実行してはどうですか」と話す。すると「それはできないな」と、お茶を濁す答が返ってくるのが普通だ。なかには「お金の不安がある」という返答がくる。「それはないでしょう。私と同じか、勤務年数が長いのですから、余計に条件があるのではないですか。」と話す、苦笑が返ってくる。さらに追い打ちをかけて「大学教員職を求めて浪人している若い有望な人たちがたくさんいるのだから、その人たちにポストを譲ってはどうでしょうか。経済的条件が可能で、私のような生き方に賛同していただけるなら、ぜひ実行してください」と語った。相手は、50～60代の方々だ。

退職して以降も、同じような会話を何度かした。しかし、実行した人にはお眼にかからない。むしろ、経済条件が厳しいにもかかわらず実行する人には何人もお会いした。

このように、退職して新たな人生をつくりたいし、経済的にも十分可能なのに実行できないという人たちは、結構多い。そういう人のなかには、精神疾患身体疾患に悩む人も多い。だったら余計に実行したら、と思うのだが、踏み切れない人が多い。

その理由を考えてみよう。小さな原因の一つは、金使いが荒いことだ。300万円ぐらいの自動車、外食の際には、2000～3000円ぐらいの食事、飲むことでの費用が月に2～3万円以上使うと言う人は、50代ぐらいに結構いた。私の生活費の3倍ぐらいかかるそうした生活では、スローライフは無理だろう。そういう方ではなく、質実に働いている人の例を考えると、一つに、「ワーカーホリックから卒業できない」（ワーカーホリックが生活習慣病化している）、もう一つに「システム依存症、コース依存症」（システムが終わると、システムから外れると、自分の道が見つけられない人）ということがある。

これらの例は、ほとんどが男性だ。女性はもっと柔軟多様に生き方を考えている人が多いが、女性でも「ワーカーホリック病」「システム依存症、コース依存症」の人はいる。

これらの人は、自分なりの道・生き方が基本にあって、生計のための必要上、職があるというのではない。その逆で、職があり、システム・コースがあって、それに従属した、自分の人生・生き方がある人が多い。だから、

私の選択を『うらやましいけど、別世界』に感じてしまうのだ。そして、定年に近づいてようやく「定年後どうしようか」と考え始める。しかし、考え始めるのが遅すぎたのか、定年後、気が抜けてしまう人、あるいは妻にくっついてばかりいる「濡れ落ち葉」になる人などが、けっこう多そうだ。

こうした「ワーカーホリック病」「システム依存症、コース依存症」から人々が卒業していくにはどうしたらいいのだろうか、と私は考え始めている。

18. 自然・人々とつながり合う いろいろな移住者

大学教員なりたてのころの私は、「鬼」だった。学生に厳しかったからだ。数年たって、「鬼」ではやっていけなくなり、10年ぐらいすると、学生にやさしい「仏」に変貌していった。

7、8年前、受講生の沖縄国際大学の学生から「仙人」と呼ばれた。そのころ、長いあごひげをはやしていたことが「仙人」イメージを作り出したのだろう。でも、この表現が気に入って、その後たびたび「仙人の浅野です」と自己紹介したりもした。他の人も、田舎でのスローライフをしている私を、そう呼ぶのをためらわないようだ。

しかし、はるか昔の中国の仙人は、人里離れて孤高を保ち、霞を食べていたが、私はそうではない。自然とつながり合うだけでなく、人々とつながりあう。

スローライフ・田舎暮らしを求めて、私周辺にやってくる人には多様な人がいる。大都市からやってくる人が多いので、沖縄の海、景観、空気などの自然を味わいたい、エンジョイしたいと言う人が多い。

そんな人にも、いろいろなタイプがある。多少不便を感じても、自然をそのままにして住もうとするタイプ。素晴らしい景観を味わうために、邪魔になる植物を切る人。急斜面だから、宅地造成して住もうとする人。急斜面に合わせて家を建てようとする人。家庭菜園を作る時に、邪魔な雑草を取るために除草剤をまく人。雑草も意味あって生きているのだから、できるだけそのままにする人。木を切る人もいれば、木を植え育てる人もいる。花を育てる人はすごく多い。その人たちにも、在来種と外来種とを気にせず、美しさ（時には安価さ）を重点に植える人。できるだけ在来種にしようとする人。

自然に対する考え方も多様なのだ。私は、できるだけ木や草花を切らない。外来種より在来種を好む。といっても、必要最低限は切るし、外来種を植えることも結構ある。外来種の方が手に入りやすく、在来種を売ってないということもある。ていんさぐの花（ほうせんか）の苗を売っている店は見ることがないが、インパチェンスはどの店でも大量に売っている。だから、日常的に見かけるのはインパチェンスばかりになっている。もともとの自然が比較的保たれている御嶽にインパチェンスが植えてあるとあって、憤っておられる方もいた。

スローライフは、できることなら、自然のままに、自然と共生するというか、自然に抱かれた暮らしを求めたい。自然と闘い、自然を加工することをできるだけ減らし、自然に従って、自然に包まれて生きたいと考えることが多いだろう。

同じようなことは、人々とつながりあうことにもある。無論、自然に夢中で、人々とのつながりを考えない人、なかには大都市での人間関係に疲れて、人づきあいはもうごめんだ、という人もいる。また、音楽などの文化に新鮮な気持ちを感じる人も多い。そして、沖縄の人の暖かさ・ゆったりさがとても良くて、癒しを感じる人もい

る。でも、わからない言葉もでてきたり、余りにのんびりしていたり、いい加減すぎると言って、愚痴をこぼす人もいる。

全体としてみると、自然ほど人々のつながりを求めてないかもしれない。なかには、都市的便利さ依存症とか、金銭依存症とかのために、ヒトと直接つながるより、モノ・カネを媒介につながりがちな人も多い。

スローライフを求めているのに、ついせっかちになってしまう人は結構多い。田舎暮らしを求めて沖縄に来たのに、結局は、わずらわしい人間関係がなく、モノ・カネとだけのつきあいでやっていける「便利」な都市地区に住む人も結構いる。無論逆に、都市地域にいたが、田舎に移る人も多い。また、移住者だけでかたまりがちな人もいる。配偶者の転勤で沖縄にきた人で、職場の宿舍内の人間関係にとどまる人も多い。

19. モノ・コト・カネに支配されない人間関係

私は「仙人」と呼ばれると書いたが、それは人間関係から離れるのではなく、人々と豊かな関係を作るタイプのものだ。

大都市での人間関係に疲れて、そこから離れた「癒し」を求めて、スローライフしようとする人がいる。大都市の喧騒だけでなく、人間のザワメキを避けるために、海などの自然をじっと眺める人も多い。

しかし、それは、変な人間関係ばかり経験した人のような印象を受ける。

かつての人々を縛るような共同体・コミュニティから逃げることは、ある意味で必要なことだろうが、それは人間関係一般が不要ということではない。そうしたものに代わる新たな人間関係をどう作るかが肝要だろう。

しかし、それには、人間関係にかかわる自主的な営みの蓄積が必要になる。それは、自発的な組織、つまりはアソシエーションに結成参加するということでもある。といっても、多くの人は、会社という形でのアソシエーションに入った経験をもっている。しかし、会社はアソシエーションというよりも、上意下達的なコミュニティ、つまり日本的経営になってきた。

こうして、大都市は、多種多様なアソシエーションができ、それらの集合体としてのコミュニティからなるところではなく、モノ・コトに媒介された関係が渦巻くところになっているのではないか。人間関係が、モノ・コト、さらにいうとカネに支配される形になっているのではないか。人間関係に拒否的になり「癒し」を求める人の人間関係には、ヒトではなくモノ・コト・カネが支配しているのではないか。そのため、田舎や観光地（とくにリゾート地）に「癒し」を求めてやってくる大都市人は、ヒトのつながりに拒否的になりがちである。

同じようなことは、退職した会社人間にもいえるのではないだろうか。会社時代の人間関係は、実はモノ・コト・カネのつながりであり、退職した後は、関係が続かない人が多いのではなからうか。もうそれは、過去のモノであり、それには依存できないのだ。

こうしたことを考える時、スローライフをするということは、モノ・コト・カネに比重をかけないで、豊かな人間関係を築くということだ、と思う。

長く田舎暮らしをしている私周辺の人々の生き方をみると、自然との豊かな関係だけでなく、人間と豊かな関係をつくり、そのなかに生きつつスローライフをしている人が圧倒的に多い。年収300万円以上という人は、とても少ないので、大都市基準でいくと、「貧困」すれすれラインにいるとみなされてしまうかもしれないが、カネに依存した生活ではないので、当人たちは「貧困」だとは感じていないだろう。

ところで、最近読んだ暉峻淑子「社会人の生き方」(岩波新書 2012年)は、示唆に富んだ本だが、こうした問題にも間接的に言及しているので、おすすめだ。

20. 大金持ち志向はいいのか

年末年始になると、毎年プロスポーツ選手の高額契約が話題になる。数億円という途方もない金額が新聞紙上を飾る。必要経費があるとか、一生のうちの十数年しか稼げないのだから、とかの「言い訳」は聞くが、実際生活上に必要な支出額の百倍、時には千倍もある。同じように、ニッサンのゴーン社長の数億円の報酬のように、大会社経営者の報酬や、配当収入とか投機収入も話題になる。

話題になるが、それらへの批判的なトーンは減多に見られない。生活保護をめぐる批判的トーン、あるいは格差のなかで苦しんでいる人への「自己責任」「自業自得」的な批判的トーンの話とは対照的に、高額所得への批判的トーンの論調は、脱税でもない限り、めったにお目にかかれない。むしろ、そんな大金持ち、高額収入を目標にしてがんばろう、という気持ちをふくらませるトーンが強い。

プロスポーツ選手の報酬が、「お金」中心だというのは、不正常だと思う。高い技量を獲得し、そのことが称賛され、そのレベルの技量を目指して、多くの人が頑張るといって自体が、報酬の中心ではなかろうか。

私は、2000万円以上の収入は不正常だと思う。2000万円でも、かなり潤沢にお金を使えるはずだ。そうした額を上限にしたら、いいと思う。国内の収入格差、国際的な収入格差を思う時、2000万円を上回る額は、税なり寄付なりで運用した方が、より多くの人が幸福になれると思う。

自家用車を何台も持ち、自家用飛行機をもつとか、一晩で何十万円も飲食するなどというのは、贅沢の限度を遙かに超えていると思う。高級ホテルに宿泊するにも、そうした例が多い。

一泊5万円以上のホテル。周辺に月収数万円～10数万円の人が暮らす。いわゆる発展途上国の観光地の話ではない。ここ沖縄での話だ。宿泊者が、周辺地元の人と交流するような観光滞在ではない。

こんなことは、昔からあったといわれようが、皇族貴族大名とか身分制の時代、あるいは大地主とか成金とかいわれた時代の例外的な人の話だ。近年は、努力さえすれば、だれもが大金持ちになれるかのごとき風潮さえ形成されているように感じる。

だが、現実には、よくいわれるジニ係数で示されるような格差の拡大であり、多数の貧困ライン以下の人を生み出す中での、巨大収入者を生み出す構図なのだ。右上がりの時代には、収入下位の人の収入もそれなりに伸びていたといわれることもあり、それが「一億総中流」幻想を作り出したわけだが、いまは、そういう時代ではない。大金持ちの出現は、格差拡大と連動する時代だ。

もう一つ、お金を使わないから、景気がよくなならない、といって消費刺激をあおる動向がある。節約とか、修理して使おうではなく、すぐに廃棄する流れが強力に作られる。

普通に考えれば、「何かが狂っている」と思うのだが、その「狂っている」流れが日常化され、さらには「道徳」にさえされかねない事態なのだ。

こんな歯車をどこかで変えなくてはならないと思う。スローライフは、その役割の一端を担うものでありたい。大金で買うようなスローライフは、どこかが狂っているだろう。

21. オーバーペースからマイペースへ

私が体調を崩した時、後から思いなおすと、ほとんどがオーバーペースだった。体力の上限を越えて仕事をしたのだ。その時、オーバーペースではなく、適切な仕事量の範囲内だと思っていたても、後から思い返すと、オーバーペースなのだ。

思春期から10年近く前まで長期間悩みつつ付き合ってきた頭痛も、オーバーペースが原因だったことが、頭痛の悩みがなくなった最近気付いたことだ。

オーバーペースを、別の言葉でいうと無理をするということだ。

しかし、その時は、「まだ頑張りが足りない」「必要なことができていない」と考え、自分の頭・体に「鞭打つ」ために、コーヒー・お茶を多用し、若い時には煙草を吸ったりもした。

そのころは、どれぐらいがマイペースだかわからなかった。「まだ若いから、もっとできるはずだ、しなくてはならない」と思っていた。「しなくてはならない」ことは、『外』からやってくるだけでなく、自分自身でも作りだしていた。その結果、「自分で自分を鞭打つ」ことを随分していた。それに合わせて、「頑張ろう」「努力」「克己（自分に勝つ）」といった言葉を愛用してきた。

では、オーバーペースだから、たくさんのができたかという、そうでもない。その時はできたつもりでも、集中が途切れたり、疲労がたまって寝込んだりして、マイペースの仕事と収支決算が最終的には同程度になっていたのだ。むしろ疲労の蓄積による病気など悪影響の方が大きい。

ということが、マイペースでやっている現在、よくわかる。オーバーペースにいる最中にはなかなかかわからないものだ。

物質的には、これだけ豊かになった時代にもかかわらず、現在はオーバーペースが社会的に要求される時代になっている。「外」からオーバーペースが要求されるのだ。だが、自己破壊を防ぐために、集中を途切れさせたり、うまくさぼったりしている人が多い。しかし、それをも管理し取り締まり抑え込む動きが強い。結果的に、40代50代男性を中心に、ストレスも仕事量も過剰で、寿命を縮めてしまう人数の高止まり状況を生みだしているのではないか。

だから、マイペースを生みだす、作りだす、発見すること自体が難しい時代でもある。でも、そうしたい。そのための一歩として、自分で自分を責めるようなあり方から卒業し、「自分なりによくやっているのではないか」という考え方に馴染んでいくことをきっかけにしたい。

その際、「みんながこうしている」「会社や社会の標準がこうだから」「テレビなどの情報ではこれが普通のようなだから」といったことから、距離を置くこともきっかけになるだろう。

22. 競争より共同の、強者より弱者のスローライフ

スローライフは、中高年齢者だけのことではなく、若い人たちにとっても必要であり重要だ。また、スローライフする余裕がある人だけの話ではなく、むしろ余裕がないと思っている人にこそ必要なものだ、と私は考えている。その理由に関わって書こう。

このところ書いているように、私のスローライフは、孤立とか孤高とかではなく、他者との依存共同関係のなかで生まれ保たれていくものだ。だから、当然、外に開かれるし、外にある多様なことを排除したり拒否したりするのではなく、受け止めようとする。スローライフのなかで、瞑想のようなことを大切にする人も多い。宗教家などにそうした人が多い。だが、瞑想などは自然や人々から切れて行うものではなく、自然と人々とより豊かにつながるために行うものにしたいと私は考える。

こうしたことは別の視点から見ると、弱者の生き方である。弱いからこそ自然や人々とつながるのだ。強者は、競争・勝負の世界に生きて、自然や他者に勝つことにこだわる。自然や人々との間に生まれる関係も、対抗・勝負と見なそうとする。強ければ勝利し生き残って、豊かな生活を送れると思いついでいる。弱者が、強者と出会うと、そんなに勝ちたければ、どうぞお勝ち下さい、と譲ったりする。それがスローライフなのだ。相手を打倒して勝って何になるというのか。

勝ったつもりの強者が実は孤立を深めることが多い。強者であることが、権力・権威をふるまっているだけのことが結構ある。強者である人の周りに人が集まるのは、権力・権威を持っている時だけだ。その人柄を慕って集まっているわけではない。組織・地位を失った人が、それを失った時に、そのことを痛いほど知らされることがある。定年退職した、かつての勝者にもそうした悲哀を味わう人がいそうだ。

スローライフは勝って手に入れるものではない。幼稚園保育園の「かけっこ」の時、もし人より先になってしまったら、後ろの子どもを待って、手をつないでゴールインするようなものだ。

金持ち型のスローライフは、競争に勝利して、カネをもうけて、他者を排除し他者と切断して、カネづくのスローライフを味わおうとするものだ。対照的に、弱者というか、普通の人々のスローライフは、人々とつながりを広め深めながら、保たれていく。

こうしたありようをもつ「ゆとり」を、競争や勝負が激しい風潮の中、持ちづらくなっているからこそ、余計にこうしたスローライフを求めていきたいものだ。

木暮太一「僕たちはいつまでこんな働き方を続けるのか？」星海社2012年を読む

(2013年3月20日)

店頭で、タイトルにひかれて購入した。著者は、1977年生まれだから、30代半ばだ。この本は、初版が4月で、私が購入したのは9月刊の7刷だから、結構売れている。

若い世代がこうしたことに興味をもち、どういう行動をとればいいのかを考えると、大変意義あることだと私は思う。と同時に、彼らのなかには、苦境状態にあって働き方を変えたいと思っている人が大変多いことを反映しているのだろう。

こうしたことへの処方箋が書かれるが、その前に次のような一節がある。

「いくらがんばっても、いくら稼いでも、結局生活は楽にならず、いつまで経っても苦しいまま」と感じてしまいます。

そういう人がつぎに考えることは、「ストレスなく生活するためには、どこか山奥か離島にでも移住するしか

ない」ということです。

いわゆる「ドロップアウト」ですね。

いまの生活をすべて捨てて、自給自足的な生活をしなければ「ストレスフリー」の人生は送れない、と感じてしまうのです。

もちろん、そういう生活もひとつの人生です。しかし、そうするためには、いままでの生活をすべて捨て去る覚悟がなければいけません。再び、いまの生活に戻ってきたいと思っても、かなり難易度は高くなります（少なくとも本人はそう感じるでしょう）。

となると、よほどの覚悟がなければ、この選択肢を選ぶことはできません。

「沖縄に住んで、のんびり生活ができたらいいな」と考えていても、「じゃあ、家族の生活は？」「仕事はあるの？」「子供の学校は？」「本当に生きていけるのか？」と自問することになります。

結局、「やっぱり無理」という結論になって、しづしづ今まで通りのストレスに満ちた仕事人生を継続していくしか手がありません。

ですが、本当にそれしか手がないのでしょうか？

このような「激務かドロップアウトか」「0か100か」というオール・オア・ナッシング思考ではなく、別の道があるのではないのでしょうか？

ストレスフリーで生きる＝俗世間から離れる、という発想をしていると、どうしてもハードルが高くなってしまいますが、現在のように社会のなかでちゃんと働きながら、「自己内利益」を高めていく方法を考えていくべきです。」 P209-211

それまでの「生活を捨てて」、沖縄で田舎暮らしをしている私などは、「俗世間から離れ」「ドロップアウト」して、「0か100か」のいずれかになっている、ということになってしまう。でも、私には「家族の生活」もあるし、「仕事」もある。南城市周辺には、都市から移住してきた人は多い。私のような世代だけでなく、20代、30代、40代という層に、かなり多いのだ。

こうしたありようが可能であり、かつ多いことを、おそらく著者は知らないのだろう。

著者の処方箋の基本は以下のように書かれている。

「要するに何が言いたいのかというと、「世間相場よりもストレスを感じない仕事」を選ぶことができれば、必要経費を下げることができ、その結果、自己内利益を増やすことができるということです。」 P220

こうしたアプローチも、働き方を変える一つといえるかもしれないが、これらの事例については、今度は私の方が知らないのが実情だ。